

K-505

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第8集

米沢市万世町桑山団地造成地内

埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集

二夕保A遺跡

八幡堂遺跡

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書

米沢市万世町桑山団地造成地内

埋蔵文化財調査報告書

第Ⅱ集

二夕俣 A 遺跡

八幡堂 遺跡

米沢市教育委員会

序 文

桑山団地第Ⅱ期造成工事に伴なう埋蔵文化財の発掘調査は、昭和55年度から開始され、すぐれた成果をあげて、「米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書」第Ⅰ集として刊行されました。ひきつづき、その第Ⅱ集として、このたびNo.5、No.9遺跡の報告書を刊行することになりましたことは、有意義であり誠に喜ばしい限りであります。

今回の報告書の内容中重要なことは、縄文早期の東北地方では数少ない住居跡群と古墳時代前期の紡錘車（米沢市指定文化財）そして、縄文前期の火葬臼（米沢市指定文化財）であります。ことに、紡錘車で軸棒が腐敗することなく発掘されたことは大変貴重なものであります。この他、数多くの貴重な遺物、遺跡が出土し、考古学界に多大な成果をもたらしたことは、米沢市教育委員会として心からうれしく思っておるところであります。

これまで6冊の調査報告書を刊行してまいりましたが、その都度、質、量的にも充実し、米沢市の埋蔵文化財に対する評価が高まってまいりましたことは、大きな励みであります。今後ともこの評価を損うことのないよう努力してまいる所存であります。

この報告書を作成するにあたり、米沢市開発公社、「まんぎり会」の方々はもとより調査、報告書作成に当っては加藤 稔先生や関係各先生方にご助力とご協力を賜わりましたことを心から感謝申しあげます。

昭和58年3月

米沢市教育委員会

教育長 北 目 二 郎

例　　言　　I

1. 本報告書は米沢市万世町桑山団地造成地内の埋蔵文化財にかかる緊急発掘調査報告書であり、昭和55年4月10日～昭和56年3月10日までに実施した八幡原No.2遺跡、No.3遺跡、No.4遺跡、No.5遺跡、No.6遺跡のうちの八幡原No.5遺跡と昭和56年4月1日～昭和56年6月30日に実施した八幡原No.9遺跡をまとめた報告書第Ⅱ集である。
2. 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって、財團法人米沢市開発公社との協議のうえ、桑山遺跡特別調査委員会（下平才次委員長）の意向に沿って実施したものである。
3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 山口和雄 米沢市教育委員会社会教育課長
調査主任 手塚 孝 調査担当
同副主任 菊地政信
同補助員 西村栄一
調査協力 柏倉亮吉、加藤 稔、川崎利夫、桑原滋郎、橋爪 健、佐々木洋治、佐藤鎮雄
亀田晃明、佐藤正四郎、田中則和、青木敏雄、山口博之、佐藤祐宏、小野 忍
高橋源一、安部一彦、秦 昭繁
山形県教育庁文化課、財團法人米沢市開発公社、東北歴史資料館
作業員 遠藤重男、鈴木芳徳、本田利雄、佐藤庄作、手塚武雄、我妻正寿、我妻 勇
原 三郎、須賀寿広、縮 長男、本間宮之助、田畠喜雄、佐藤庄吉、小方藤馬
伊藤清美、坂野義博、皆川清助、沢根忠夫、浜田この、鈴木こう、黒田かつよ
近野きよ、斎藤とく、渡部ゆり子、石黒良子、我妻徳技、遠藤きちえ、高橋幸子
梅津てるよ、梅津佐世子、金子かのゑ、伊藤 幸、我妻八子、星野たか子、鈴木とよ
佐藤ふみ子、宍戸豊子、松沢とよ子、渡部捷子、渡部富子、鈴木タミ子、高橋イセオ
沢根えい子、本間しげ、高橋おえ子、我妻かつよ、渡部アサノ、遠藤とみ、後藤たつの
鈴木和子、石黒宮子、遠藤サダエ、大友洋子
事務局 星 忠平、金子正廣、神野直子

遺物整理 (昭和57年4月1日～昭和58年3月31日)

同主任 手塚 孝

同副主任 菊地政信

同補助員 小松佳子、我妻徳技、色摩美由紀

調査協力 松田駒吉

4. 報告書内の造構記号はS T一竪穴住居跡、S K一土壤(風倒木含む)、S D一溝状造構、P一小ピット(柱穴含む30cm未満)として各記号順(S T 1～S T 5、S K 1～S K 5例)に一連番号を採用した。

5. 捷図縮尺は、造構を60分の1土器の実測図、拓影図を3分の1、石器の実測図は1.5分の1を原則としたが、石、石皿等の礎器・木器の一部は4分の1とした。写真図版に関しては、石器を2分の1、土器片を2分の1の統一したが完形土器は、縮尺不同にせざるを得なかった。

6. 石器の実測図の中で「—」を使用痕、「●●」を磨滅、「◆◆」を柄着装痕と現わす様にした。

7. 土器の拓影図の中で表裏に文様を施すものに関しては、断面図が明確に判る様に表面側を右、裏面側を左に置き、写真図版では従来の様に表面を左、裏面を右にしている。

8. 造構等の土層については、「新版標準土色表」(小山、竹原1973)等を参考にした。

9. 造構等の図化は全面的にその統一性がないことを考慮し、今回は造構のもつ特性や状況を明確に把握する様に基本図化表を作り、造構の図化はすべてそれに沿っている。

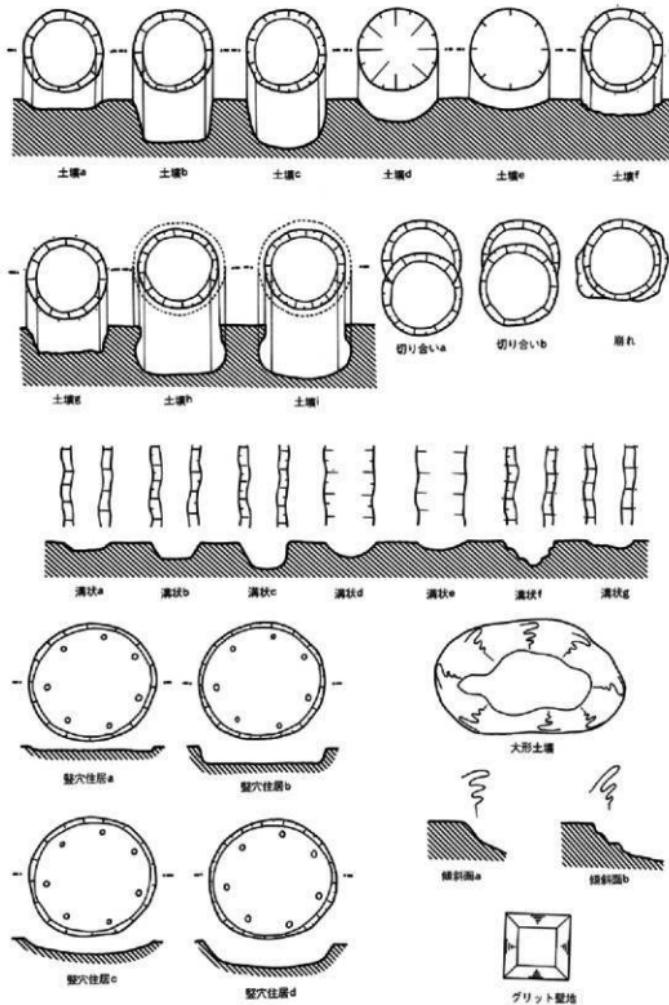
10. №9遺跡の磨製石斧の製作伐採実験に関しては松田駒吉氏の多大なる御協力を賜わった。

11. 本書の作成は、手塚 孝、菊地政信の両名が担当し、編集は手塚 孝、責任校正は木村塚美金子正廣がその任務にあたった。

例 言 II

1. 遺構実測記号統一を図るため米沢市教育委員会は次の図化と名称を採用する。
2. 穴住居跡—4グループに分ける。壁の深さが10cm未溝のもの『豎穴住居a』、壁の深さが10cm以上を有するもの『豎穴住居b』、壁の深さが10cm未溝で下場の確認の難しいいわゆるボール状をなすもの『豎穴住居c』、壁の深さが10cm以上で下場の確認の難しいいわゆるボール状をなすもの『豎穴住居d』とする。
3. 土壌—9のグループに分ける。20cm未溝の浅豎形状をなすもの『土壌a』、10cm以上を有し豎形状をなすもの『土壌b』、底面がボール状で、豎形をなすもの『土壌c』、底面の不明な20cm以上のボール状をなすもの『土壌d』、20cm未溝の浅ボール状をなすもの『土壌e』、20cm未溝の底部位が不整をなすもの『土壌f』、底面が不整をなし20cm以上をなすもの『土壌g』、プラスコ状を有し底面が平坦をなすもの『土壌h』、プラスコ状を有し底面がボール状をなすもの『土壌i』とする。
4. 溝状遺構—7のグループに分ける。10cm未溝をなすもの『溝状a』、20cm以上をなすもの『溝状b』、底面位（下場）の確認が難しいもの『溝状c』、10cm以上の深ボール状をなすもの溝状d、10cm未溝の浅ボール状をなすものの溝状e、底面が不整形を有し10cm以上をなすもの『溝状f』、底面が不整形を有し10cm未溝をなすもの『溝状g』とする。
5. 2m以上の大形土壌や自然傾斜を有するもの『傾斜面a』、不整傾斜を有するもの『傾斜面b』とする。
6. 切り合い関係はBをAが切る場合『切り合いa』とし、AをBが切る場合『切り合いb』とし、崩れは『崩れ』とする。
7. 柱穴、ピット群は2の土壌の図化と同様に扱い、ただし土壌の20cm以上を10cm以上、20cm未溝を10cm未溝とし、堀立建物等の掘り方も同様に図化し、確認のための未完柱穴はその深さの図化で内部に『未』とする。

造構基本固化表



本文目次

序文

例言

第7章 八幡原M5（二タ俣A）遺跡	1
I 遺跡の概要	1
II 調査の経過	1
III 層位	1
IV 遺構の概要	2
A区の遺構	2
a 竪穴住居跡	2
b 土 壤	13
1) 第III層面の土壤	13
2) 第IV層上面の土壤	13
3) 第IV層下面の土壤	13
4) 第V層面の土壤	14
C溝状遺構	14
B区の遺構	14
a 竪穴住居跡	14
b 住居跡外の遺構	16
V 遺物	16
1) 出土石器の概要	17
A区出土石器の細分	17
B区出土の石器	21
礎器の概要	21
2) 出土土器の概要	49
A区出土の土器	49
B区出土の土器	56
VI まとめ	63
1) 土器の年代と遺構（A区）	63
2) 土師器の年代と遺構	66
3) 石器の年代	66

参考文献	69
第8章 八幡原M.9（八幡堂）遺跡	93
I 遺跡の概要	193
II 調査の経過	193
III 遺構	194
a 方形周溝墓	194
b 土壙	194
c 溝状遺構	194
d 橋状遺構	195
IV 遺物	195
1)土器	195
2)木器	196
a 杭	196
b 割木杭	196
c 火鑽臼	196
d 曲げ物	196
e 紡錘車と紡錘車軸棒	196
f 出土植物遺体	197
3)石器	197
V まとめ	198

挿図目次

巻頭図版一

巻頭図版二

第1図 八幡原M.5遺跡グリッド配図	71
第2図 八幡原M.5遺跡A区遺構全体図	72
第3図 八幡原M.5遺跡A区S T 1平面図	73
第4図 八幡原M.5遺跡A区住居跡内出土遺物（1）	74
第5図 八幡原M.5遺跡A区S T 2平面図	75
第6図 八幡原M.5遺跡A区住居跡内出土遺物（2）	76
第7図 八幡原M.5遺跡A区S T 3平面図	77
第8図 八幡原M.5遺跡A区出土土器実測図	78

第9図	八幡原A6.5遺跡A区S T 4平面図	79
第10図	八幡原A6.5遺跡A区S T 5平面図	80
第11図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（3）	81
第12図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（4）	82
第13図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（5）	83
第14図	八幡原A6.5遺跡A区S T 6平面図	84
第15図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（6）	85
第16図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（7）	86
第17図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（8）	87
第18図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（9）	88
第19図	八幡原A6.5遺跡A区S T 7平面図	89
第20図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（10）	90
第21図	八幡原A6.5遺跡A区S T 8平面図	91
第22図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（11）	92
第23図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（12）	93
第24図	八幡原A6.5遺跡A区S T 9平面図	94
第25図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（13）	95
第26図	八幡原A6.5遺跡A区S T 10平面図	96
第27図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（14）	97
第28図	八幡原A6.5遺跡A区S T 11平面図	98
第29図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（15）	99
第30図	八幡原A6.5遺跡A区S T 12平面図	100
第31図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土遺物（16）	101
第32図	八幡原A6.5遺跡A区S T 13平面図	102
第33図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物（17）	103
第34図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物（18）	104
第35図	八幡原A6.5遺跡A区S T 14平面図	105
第36図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物（19）	106
第37図	八幡原A6.5遺跡A区S T 15平面図	107
第38図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物（20）	108
第39図	八幡原A6.5遺跡A区S T 16平面図	109
第40図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物（21）	110

第41図	八幡原A6.5遺跡A区S T17平面図	111
第42図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(22)	112
第43図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(23)	113
第44図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(24)	114
第45図	八幡原A6.5遺跡A区S T18平面図	115
第46図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(25)	116
第47図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(26)	117
第48図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(27)	118
第49図	八幡原A6.5遺跡A区S T19平面図	119
第50図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡出土遺物(28)	120
第51図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(1)	121
第52図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(2)	122
第53図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(3)	123
第54図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(4)	124
第55図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(5)	125
第56図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(6)	126
第57図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(7)	127
第58図	八幡原A6.5遺跡A区住居跡内出土蝶器(8)	128
第59図	八幡原A6.5遺跡A区土壤平面図(1)	129
第60図	八幡原A6.5遺跡A区土壤平面図(2)	130
第61図	八幡原A6.5遺跡A区土壤平面図(3)	131
第62図	八幡原A6.5遺跡A区土壤内出土石器実測図(1)	132
第63図	八幡原A6.5遺跡A区土壤内出土石器実測図(2)	133
第64図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(1)	134
第65図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(2)	135
第66図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(3)	136
第67図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(4)	137
第68図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(5)	138
第69図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(6)	139
第70図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(7)	140
第71図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(8)	141
第72図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(9)	142

第73図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(10)	143
第74図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(11)	144
第75図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(12)	145
第76図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(13)	146
第77図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(14)	147
第78図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(15)	148
第79図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(16)	149
第80図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(17)	150
第81図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(18)	151
第82図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(19)	152
第83図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(20)	153
第84図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(21)	154
第85図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(22)	155
第86図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(23)	156
第87図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(24)	157
第88図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(25)	158
第89図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(26)	159
第90図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(27)	160
第91図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(28)	161
第92図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(29)	162
第93図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(30)	163
第94図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(31)	164
第95図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(32)	165
第96図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(33)	166
第97図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(34)	167
第98図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(35)	168
第99図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(36)	169
第100図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(37)	170
第101図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(38)	171
第102図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(39)	172
第103図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(40)	713
第104図	八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(41)	174

第105図 八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(41)	175
第106図 八幡原A6.5遺跡A区出土石器実測図(43)	176
第107図 八幡原A6.5遺跡A区出土土器拓影図(1)	177
第108図 八幡原A6.5遺跡A区出土土器拓影図(2)	178
第109図 八幡原A6.5遺跡A区出土土器拓影図(3)	179
第110図 八幡原A6.5遺跡A区出土土器拓影図(4)	180
第111図 八幡原A6.5遺跡B区遺構全体図	181
第112図 八幡原A6.5遺跡B区S T 1平面図	182
第113図 八幡原A6.5遺跡B区S T 2平面図	183
第114図 八幡原A6.5遺跡B区S T 3平面図	184
第115図 八幡原A6.5遺跡B区S T 4平面図	185
第116図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(1)	186
第117図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(2)	187
第118図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(3)	188
第119図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(4)	189
第120図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(5)	190
第121図 八幡原A6.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(6)	191
第122図 八幡原A6.5遺跡B区出土石器実測図	192
第123図 八幡原A6.9遺跡グリッド配図	199
第124図 八幡原A6.9遺跡A区遺構全体図	200
第125図 八幡原A6.9遺跡A区S D 1主要遺構平面図	201
第126図 八幡原A6.9遺跡A区橋状遺構平面図	202
第127図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(1)	203
第128図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(2)	204
第129図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(3)	205
第130図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(4)	206
第131図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(5)	207
第132図 八幡原A6.9遺跡A区出土土器拓影図	208
第133図 八幡原A6.9遺跡A区出土土器実測図	209
第134図 八幡原A6.9遺跡A区1号方形周溝墓平面図	210
第135図 八幡原A6.9遺跡A区出土木器実測図(6)	211
第136図 八幡原A6.9遺跡B区遺構全体図(1)	212

第137図 八幡原A6.9遺跡B区遺構全体図（2）	213
第138図 八幡原A6.9遺跡B区2号方形周溝墓平面図	214
第139図 八幡原A6.9遺跡B区3号方形周溝墓平面図	215
第140図 八幡原A6.9遺跡B区4号方形周溝墓平面図	216
第141図 八幡原A6.9遺跡B区5号方形周溝墓平面図	217
第142図 八幡原A6.9遺跡B区出土土器実測図	218
第143図 八幡原A6.9遺跡B区土壙平面図	219
第144図 八幡原A6.9遺跡B区出土土器拓影図	220
第145図 八幡原A6.9遺跡A・B区出土石器実測図（1）	221
第146図 八幡原A6.9遺跡A・B区出土石器実測図（2）	222
第147図 八幡原A6.9遺跡A・B区出土礫器実測図	223

付 表 目 次

第7表 八幡原A6.5（二夕俣A）遺跡

第1表 八幡原A6.5遺跡住居別礫器形態類別表	23
第2表 磁器形態分類表	23
第3表 八幡原A6.5遺跡A区出土石器形態分類表	24
第4表 八幡原A6.5遺跡A区出土石器計測表	37
第5表 八幡原A6.5遺跡A区住居出土礫器分類表	46
第6表 無文土器断面形態分類表	54
第7表 土師器分類表	56
第8表 住居跡出土土師器類別表	56
第9表 八幡原A6.5遺跡B区出土楕形土器計測分類表	60
第10表 八幡原A6.5遺跡B区出土土師器形態計測分類表	61
第11表 八幡原A6.5遺跡A区出土土師器形態計測分類表	64
第12表 八幡原A6.9A区出土RW15・RW16計測表	196

図 版 目 次

第一図版 八幡原A6.5遺跡の発掘

B区S T 2遺物出土状況

同上近景

第二図版 八幡原A6.9遺跡の発掘（一）

遺跡全景

橋状造構全景

第三図版 八幡原A6.9遺跡の発掘（二）

A区 1号方形周溝墓全景

B区 3号・4号方形周溝墓全景

第四図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（一）

第五図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（二）

第六図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（三）

第七図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（四）

第八図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（五）

第九図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（六）

第十図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（七）

第十一図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（八）

第十二図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（九）

第十三図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十）

第十四図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十一）

第十五図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十二）

第十六図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十三）

第十七図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十四）

第十八図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十五）

第十九図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十六）

第二〇図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十七）

第二十一図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十八）

第二十二図版 八幡原A6.5遺跡出土の土器（十九）

第二十三図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（一）

第二十四図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二）

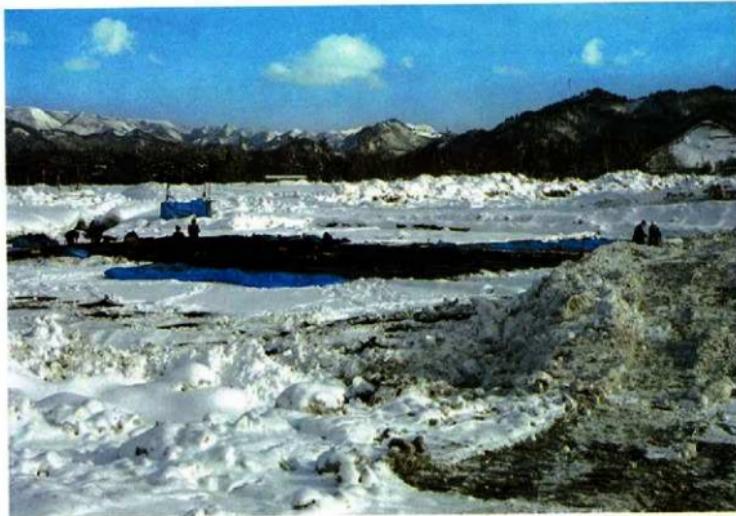
第二十五図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（三）

第二十六図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（四）

第二十七図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（五）

第二十八図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（六）

- 第二十九図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（七）
第三十図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（八）
第三十一図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（九）
第三十二図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十）
第三十三図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十一）
第三十四図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十二）
第三十五図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十三）
第三十六図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十四）
第三十七図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十五）
第三十八図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十六）
第三十九図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十五）
第四十図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十六）
第四十一図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十七）
第四十二図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十八）
第四十三図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（十九）
第四十四図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十）
第四十五図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十一）
第四十六図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十二）
第四十七図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十三）
第四十八図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十四）
第四十九図版 八幡原A6.5遺跡出土の石器（二十五）
第五十図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（二十六）
第五十一図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（二十七）
第五十二図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（一）
第五十三図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（二）
第五十四図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（三）
第五十五図版 八幡原A6.9遺跡出土の土器（四）
第五十六図版 八幡原A6.9遺跡出土の石器（五）



▲B区発掘状況



▲B区ST2遺物出土状況



▲A区1号方形周溝墓全景



▲A区横状遺構全景

第7章 八幡原No.5（ニタ俣A）遺跡

I 遺跡の概要

本遺跡は米沢市万世町桑山字柿の木3321～3327他と米沢市万世町堂森字ニタ俣 267～270他の二箇所に亘る遺跡である。旧河原によって形成された凹状の地形が、八幡原No.3（大清水）遺跡付近より東西に延びており、その凹地上段に所謂『桑山遺跡群』が点在する。現在は凹地の中心をかつての河原を忍ぶかの様に小川が流れ、その源が通称「くぐり」清水として、堂森、金谷地区の田畠を潤している。

この旧河原跡の両岸にこそ桑山遺跡群の中心的な生活基点として、東からNo.3、No.4（柿の木）No.6（ニタ俣B）、No.5（ニタ俣A）、No.9（八幡堂）と連なって約150,000m²の大遺跡群を構成している。今回のNo.5遺跡は桑山遺跡群のほぼ中央に分布する遺跡で、凹み地を越えた北側の河岸と南側に広がる二つの遺構密集地からなり現状は大半が雑木等の林と一部畠地を有する。標高261.5～262.5mを計る。

II 調査の経過

小川を境にした2箇所の調査を迅速に進めるため、二班に別れて実施することにした。小川の南側に分布する範囲は、No.4遺跡の調査の結果、No.5遺跡と統くことが判明したこともある、明確に遺跡範囲を区画するためにも64～103～169グリッド東西線を境界線と定め、小川までをA区、小川を越えた対岸をB区と仮称することにした。

調査は、No.4遺跡の終了後に同じく調査を進めているNo.3遺跡と平行して行うこととした。従つてNo.5遺跡の調査開始は10月7日となり、A区から着手する。

11月1日からはNo.3遺跡の調査終了に伴って、B区の調査を開始、A区は菊地、B区は西村が主に当り手塚が総括する方法をとった。

グリッドはNo.3、No.4遺跡と同様に、8m×8mを用い、A区は76～103～170～193の37グリッド〔1984m²〕、B区は96～131～198～213の23グリッド〔1472m²〕合せて3456m²を調査面積として、A区は昭和55年10月7日～同年12月31日、昭和56年2月21日～同年3月10日のべ104日B区は昭和55年11月1日～12月31日、昭和56年2月21日～3月10日のべ79日間を要した。

最終調査面積はA区1400m²、B区1100m²の計2500m²である。

III 層位

A区とB区で若干異なる。A区は基本層序として、第1層の表土から地山まで4枚に分れる。No.4で検出された砂層を含む第Ⅱ層（細分でⅡa～Ⅱc層）は認められず、No.4遺跡の第Ⅱが第

I層の次に現らわれている。また今回の第II層（III層）と第III（IV層）の区別は、立木による擾乱が著しく、明確に分けることが不可能なことからNo.5遺跡では、III層の範疇に加えることにした。B区はA区と基本的に同じであるがII層とIII層が明確に区分されている。

本書で扱う層序の用語は、No.4遺跡との関連性を考慮し、統一した形で記載している。すなわち次の如くである。

No.4 遺跡層序	No.5 遺跡A区	No.5 遺跡B区	土色・注記
第I 層	第I 層	第I 層	黒褐色土〔耕作土及び腐植土〕
第II a～II c層			砂層
第III 層	第II 層	第II 層～III	暗黒褐色土〔黒墨〕
第IV 層	第II 層	第III 層～IV	暗茶褐色土
第V 層	第III 層～V	第IV 層～V	暗茶褐色土
第VI 層	第IV 層～VI	第V 層～VI	黄褐色粘質土

IV 造構の概要

A地区、B地区から合せて約100基の造構が検出されている。むろん住居跡に伴う柱穴や、小ピットを除いたものであり、先のA区は縄文早期の住居跡群を中心の造構が後のB区は古墳前期の住居跡群を主にするものであり、A区とB区の相異を示している。

A区の造構

第IV層とした層から第V層にかけて77基の造構が認められ5のグループに分けている。最初は第I層下面（II層）から掘り込んでいるSD1の1基がある。

第2のグループは第IV層上面（III層）に分布するとみられる土壌11基とST3の住居跡1棟で縄文後期に位置すると考えられるもの。

第3のグループはIV層に位置する大形の土壌13基がみられる。

第4のグループは第IV層の下面から検出された土壌13基と溝状造構1基がある。

最後のグループは第V層面を掘り込んで構築した造構群であり、A区で最も多く認められた。すべて縄文早期の造構群であり、住居跡を中心に38基認められる。

ここでは住居跡を中心に造構の種類ごとに説明を加えて行きたい。

a 案穴住居跡〔第2図～第58図〕

河原状の縁片に沿って19棟の住居跡がある。ST3を除けばすべて縄文早期に位置するものであり、土器の分析と住居跡の切り合い関係からI～VI期の6時期に分けられる。詳しくはまとめの項で触れるが、その前に住居跡の年代として、桑山I～VI期の年代を与えている。住居跡出土の遺物土器、石器は、住居床面から検出されたものであり、廐棄もしくは住居廐絶後に堆積したとみられるものはすべて除外した。

S T 1 [第3図, 4図, 6図]

第V層（暗茶褐色シルト）を掘り込んで構築している。一部西南がS D 1に切られているものの比較的明確に認められた。

平面形状一ほぼ南北に長い、楕円形プランを呈し、南北405cm、東西350cmを計る。

壁一なだらかに立ち上るので特徴として、北壁が20cm、南壁が16cm、東壁17cm、西壁14cmと北と東壁が深く、南と西壁が浅いことから南面から北東にかけて傾斜をなす。

柱穴一壁柱穴である。住居には東壁を中心にP 108～P 128の22基の小ピットが存在するが、埋土の確認からP 108, P 113, P 115, P 116, P 117, P 123, P 125～P 127、それにP 121とP 122が加わった計11基とみられる。柱穴の大きさは7cm～16cmを有し、柱穴内の柱痕跡から4cm～7cm位の柱材を有していたことが判った。深さは9cm～14cmと浅い状況を示す。

床一全体的に平坦で、中央部がやや固く、若干炭化物の集中する箇所がみられた。

遺物一床面に貼り付く様に15点認められる。石器は打製石斧1点、石錐1点、サイド・スクレーパー1、それに局部磨製石斧1点がある。土器はすべて破片であり、10点ある。

先の石器は第4図-13のIV群a類を除くと先端部が尖状を示すのが特徴で、それぞれ、V群b類、VI類a類、VI類d類となる。IV群a類は、先端部を刃部とするもので尖状のナイフ形状を呈している。礫器はXIV群1点、XV群2点、XVI群4点計7点ある。

土器類は貝殻腹縁文、貝殻腹縁沈線文を中心とするVI群b類がまとめて検出、他にⅣ群a類の刺突連續沈線のグループ1点がある。

住居跡の年代一一括して検出されたVI群b類土器を同伴年代と考え桑山Ⅳ期とする。

S T 2 [第2図, 第5図, 第6図]

第IV層から掘り込んでいる西側のSK44と第5層面から掘り込んでいる東側のP44に切られている。

平面形状一明瞭な楕円形プランを有する住居で、S T 4のすぐ北側に位置する。南北375cm東西324cmをなす。

壁一は全体的に浅く、南で2cm、北で7cm、西が6cm、東5.5cmを計り、わずかに南から北へと東から西に傾斜している。

柱穴一不規則に配している。覆土の状況からP26, P28, P29, P31, P33, P35, P36の7本と考えられる。ただし、同V層面から掘り込んでいるP30, P39, P41も加わる可能性があるが、明らかにできなかった。P32, P34, P37, P38, P40, P42, P43に関しては第IV層からのもので、区別できる。柱穴の大きさは17cm～28cmで、柱痕跡の状況から10cm～12cm位の柱材を用いたと判断された。深さは15cm～22cmである。

床一平坦で北側が若干固く他はやわらかく中央から東壁にかけて木炭粒の分布がみられた。

覆土—4枚認められた。No.1, No.2は黒褐色土層で、第IV層下を含んでおりNo.3は黒茶褐色層のV層上部No.5は壁の崩れと第V層を含んでいる。

遺物—VI群石器2点とⅢ群土器15点、IV群a類土器1点が住居中央から西よりにかけて検出されている。石器はj類とk類の仲間に位置するもので、特にj類は方形状を有する両面加工を示し、使用による柄着痕と磨滅が認められている。Ⅲ群土器はまとめて一括した状況で認められ、沈線文を数段に配する。一見、三戸式であるが、細かく観察すると異なる要素を呈しており初期沈線文土器群のグループに加えた方が妥当と考える。礫器としてXV群1点がある。

住居跡の年代—Ⅲ群土器を住居跡年代とみる。本類をどの位置に属するかによって異なるが、最近注目されている初期沈線文係土器群と平行、もしくは三戸式の前段階と考え、桑山Ⅰ期とする。

S T 3【第2図、第7図、第8図】

平面形状—長径335cm、短径256cmの風倒木壙SK10を切って構築する住居跡であり、不整な椭円形もしくは不整長方形プランを有する。長径363cm、短径255cmを計る。

壁—は浅く、平均7.5cmをなし、南から北にかけてゆるやかな傾斜をもっている。

柱穴—住居跡に9基、住居跡北側に4基の柱穴が認められたが、住居跡に伴うものは、P50, P53, P57, P60の4基で他は不明であった。

炉跡—土器を埋設したP56を囲んで炉土が120cm×88cmに分布している。埋設土器内にも多量の焼土と木炭が検出されていることから、土器埋設炉とみたい。

床—は全体的に固い。

覆土—埋設土器を除く3枚である。No.1は暗黒褐色の第Ⅲ層、No.2は黒褐色を呈し、Ⅲ層もしくはIV層上面の流れ土砂とみられ、No.3は暗黒茶褐色を呈し、壁の一部とIV層の混入したものと理解された。

遺物—埋設土器第8図1と浅鉢形土器2点とそれに礫器のXV群1点がある。

年代—入組文を横位に転回する特徴から関東の加曾利B1式に併行するものである。桑山Ⅳに位置する。

S T 4【第2図、第6図、第9図、第11図】

平面形状—ほぼ円形を示す長径435cm、短径403cmの住居跡であり、北にS T 2、西にS T 3を接する。

柱穴—壁柱穴であり、約100cmの間隔でP1～P17の17本を柱穴に配している。柱穴の大きさは16cm～28cmで、9cm～14cmの柱痕跡を示していた。深さは最深20～5cmで比較的浅い。

壁—は西壁が8cmと深く、東壁で5cm、南と北が6cmを呈し、ほぼ真っ直ぐ立ち上っている。床は平坦で、西から東にかけて固くしまり、部分的に焼土と木炭粒が点在する。

遺物—Ⅶ群a類9点とⅨ群b類、Ⅸ群d類各1点の土器片とⅧ群石器「類1点とg類1点が北よりに検出されている。特にⅧ群g類は両面加工の台形状石器に分類したものであり、第V層から出土する石器と同様に古い要素をもつ。Ⅷ群a類土器は刺突連続沈線文を基本とする土器群で本住居跡から最も主体的にみられた。礪器はⅧ群1点のみである。

住居跡の年代—Ⅷ群 類土器から桑山Ⅳ期に相当する。

S T 5 [第2図、第11~13図]

平面形状—不整円形を示すもので、南北556cm、東西505cmを計る。北壁の1部をS D 1が、南壁に沿って、S K 7、S K 8、S K 9、P 89が切っている。

柱穴—典型的な壁柱穴を有するものであり、P 69~P 104の36本を配している。住居跡を南北線で区分すると、東側が約50cmの等間隔を有するのに対し、西側は波状的に設置して不規則な要素を呈していた。柱穴の大きさは13cm~19cmと平均的なのが特徴であり、深さも13cm~29cmと他の住居跡より深い。柱穴の角度は120°~122°と幾分内壁に傾く構造をもつ。柱穴のセクションから5cm~8cm位の柱材を有していたものと推測される。

壁—ゆるやかな立ち入りをなす所謂ボール状を呈し、西壁20cm、東壁23cm、北が最深の27cm、南が22cmと南から北、西から東壁と傾斜をもつ。

炉跡—本遺跡発見の早期住居の多くは炉の存在が認められない中で、本住居跡とS T 19の二者に確認されている。両者とも後述する様に最古のグループに属するものであり、注目されよう。

さて本住居跡の炉跡は、地床炉として住居跡のはば中央に115×92cm深さ7cmの不整円形状に掘り込んでおり内部に多量の焼土と木炭を有していた。

床—全体的に平坦である。炉を中心に木炭粒が点在し、東から北側に沿った床面が固くしまっている。

覆土—炉の堆積層を除くと3枚に分かれる。上のNo.1は黒褐色を呈す流れ込んだ第IV層、No.2は暗茶褐色シルト層と第V層の暗黒茶褐色の混入したものであり、住居跡廃絶後に堆積したものと考える。No.3は東から北にかけて約3cm位の暗褐色シルト層であり、小量の焼土と木炭を含んでいることから住居跡が機能していた際に運びこまれたものと理解される。

遺物—Ⅷ群を中心とした14点の石器と撫糸文系土器他16点が住居跡床面に貼り付く様に認められている。石器はⅡ群a類、Ⅵ群j類、Ⅷ群a~c類、Ⅷ群a、c、「」、g類、Ⅹ群a類、Ⅺ群b類があり、中でもⅧ群a~c類石器は石槍に分類され、特にa類は広幅状を有する両面加工の石槍で、本遺跡からは本例のみの検出である。

土器は撫糸文を施すⅡ群a類土器と無文系のⅩ群土器それに壁上面から検出された混入品Ⅷ群b類土器1点がある。

住居跡の年代—Ⅱ群a類からみて最古のグループ桑山Ⅰ期に位置付けられる。

S T 6 [第2図, 第13図~第18図]

ほぼ円形に近いプランを呈し、東南壁に住居廃絶後に掘り込まれた S K29が切っている。長径 475 cm, 短径 438 cmを計る。

柱穴一壁外柱穴を示す特異な構造をもつ。柱穴は P 292 ~ P 303 の12本を要し、特に P 298 と P 295 は住居内部に存在することから、外の P 293 と P 294 と組み合せた入口的な施設を呈していた可能性がある。大きさは13cm~18cm, 深さ 9 cm~23cmをなし、住穴に残存する柱痕跡から7~10cm位の柱材を有したものとみられる。ただし P 297・P 296 に関しては同じ柱穴でも第IV層の土砂が混入しており、住居跡に伴うものではない。

壁一ゆるやかに立ち上り西壁が14cmと深く他は8cmである。

床一中央部がやや固く、平坦で部分的に焼土、木炭粒が認められるが、炉を有するものではない。

覆土一2枚に分けられる。No.1 上層が第IV層の混入土砂、No.2 が木炭を含む第V層を混入する遺物一石器類を中心に44点検出されている。石器は23点あり、細分した類形に合せると I群 b 類1点、V群 c 類、同 e 類各1点、VI群 a 類1点、同 d 類5点、同 i 類、k 類各1点、Ⅵ群 b 類同 c 類2点、同 g 類1点、IX群 a 類1点、Ⅹ群 a 類、同 c 類各1点、の計23点がある。土器は貝殻腹縁連續文を中心としたVI群 b 類8点とIV群 a 類2点、II群 a 類1点、VII群 a 類3点、それに無文土器IX b 類、同 c 類の各1点がある。礫器は多くXV群16点、XVI群3点計19点がある。

住居跡の年代一VI群 b 類からIII期を想定するが、VII群 a 類の存在も有することでIV期に近いIII期とするのが妥当と言えよう。

S T 7 [第2図, 第18図, 第20図]

平面形状一南側の一部を S T 9 によって切られているが、南北に長いほぼ円形を有するものとみられる。長径 454 cm, 短径 376 cmをなす。

柱穴一壁柱穴を基本とし壁直下に P 318, P 320 ~ P 339 の20本を設する。大きさは平均12cmと小規模をなし、深さ 5 cm~22cmを計る。柱痕跡は P 338, P 331, P 335, P 339 の4箇所に確認され、いずれも 5 cm~6 cm位と細い柱材を利用している。

壁一浅く、直ぐ立ち上りをみせている。北壁側が深く8cm、南で7cm西と東が5cmと浅くなっている。床は平坦を有し、全体的にしまっている。

覆土一3枚に分かれ。S T 9 が2枚に分かれることから、S T 7 は層No.3より付記した。No.3, No.4 は黒褐色を有する第V層の流土で、No.5 も小量の木炭を含む他はNo.3, No.4 と同である。

遺物一中央から西寄りと東壁寄りの二ヶ所に集中する。前者は石器が大半でVI群 c 類1点、同 d 類3点、同 g 類1点、同 j 類1点とⅥ群 b 類1点、同 c 類1点、Ⅶ群 b 類1点、同 c 類1点それに X群 1 点の計11点がある。土器は太状の沈線文に似る短沈線を有する仲間を中心にしたIV群 b

類15点とV群b類、V群d類、II群e類それに混入したとみるⅣ群b類各1点の計19点がある。

この中で石器はXV群を主に土器はV群b類を中心とした特徴がみられる。礫器はXV群5点のみ。

住居の年代一中核的なIV群b類から桑山Ⅱ期とする。

S T 8 [第2図、第21図～第23図]

平面形状一隅丸方形プランを有する。長径460cm、短径425cmを計り、SK28を切って構築している。

柱穴一壁と壁直下にP141～P165の25本を配し、西側に空間をもつ。大きさは平均化しており、最小で5.5cm、最大10cm、平均7cmとなる。深さは浅く4cm～9cmであった。柱痕跡は約半数に認められ、3～5cmと小さいのが特徴である。

壁一外に傾きを呈しながら明瞭に立ち上る。比較的深く、西で最深の22cm、東で14cm、南はやや浅く10cm、北は13cmをなす。

床一固く、東から中央にかけて木炭粒が点在する。平坦で床面の傾斜は少ない。

覆土一3枚に分けられた。上のNo.1は第Ⅳ層を含みNo.2は第Ⅳ層と第Ⅴ層の混合層の流土である。No.3は小量の木炭粒を含む、第Ⅴ層から流れ込んだ流出土と理解された。全般的に西から東に堆積する。

遺物一表裏条痕文を中核とする土器群を多くして計21点検出している。住居中央から東側にかけて集中する様であり、石器は石鏃1点、I群eを始め、Ⅳ群b類、同c類各1点と同f類2点の計6点がある。土器はⅣ群b類14点、同c類1点、同d類の条痕文土器とII群e類4点、同f類の1点、Ⅳ群a類1点がある。礫器としてXIV群1点とXV群4点の計5点が認められる。

住居跡の年代一条痕文を中心とすることから桑山で最も新しい桑山V期に位置付けられる。

S T 9 [第2図、第23図～第25図]

平面形状一円形プランを示す長径330cm、短径320cm住居跡でNo.5遺跡発見の住居跡中では、最小の規模を有する。ST7を切って構築し、住居の南側を逆にSK24に切られている。

柱穴一壁柱穴である。壁と床の接点位に60～80cmの間隔を要して、P307～P317の11本で構成している。柱穴の大きさは22cmを有するP313を除けば小さく、平均9cm、深さ7cmをなす。柱痕跡は覆土の状況より5cm～7cmと算定する。

壁一西側で6cm、東側で8cm、北壁が深く10cmを計る。床面は中央から北東にかけて固く微細な木炭を多量に残してあった。

覆土一2枚に分けられる。上のNo.3は黒褐色土で第Ⅳ層の流土、下のNo.5は暗黒茶褐色を呈し第Ⅴ層上部と第Ⅳ層の一部が混入した流土と分った。

遺物一石器、土器とともに14点ある。土器は刺突連続沈線を中核とするⅣ群a類7点と無文土器IX群7類1点がある。石器はIII群b類、V群f類、VI群g類、同j類、Ⅳ群f類、Ⅹ群b類各1

点の計6点がある。この中でV群f類に細別した片刃の打整石斧1点があり、使用痕、2次加工調整が認められることから完形品とみられる。本遺跡から検出されている同類の大半は使用→破損廃棄の順路をたどる、所謂『最終形態』を示すもので、本石器原形をなす好資料と言える。礫器はXV群9点を初めVI群2点、XIV群1点の計12点が認められた。

住居跡の年代—Ⅳ群a類の存在から桑山Ⅳ期と考えられる。

S T 10〔第2図、第25図～第28図〕

平面形状—一部後世のSD1によって破壊をうけているが、保存状況は良く、明確に壁や柱穴が認められる。長径403cm、短径371cmを計る。円形プランを呈し、ST11を切っている。

柱穴—P 166～P 175の10基を壁に沿って配し、先のST8と同じく1部入口的な間隔をもつ大きさは9cm～23cmと壁柱穴の仲間としては大きい方で、深さ10cm～23cmをなす。柱痕跡は半数に認められ、5cm～9cmを有していた。柱間隔は約100cmをなす。

床—中央が固く、北側が軟弱である。壁は平均化しており11cmを呈し、120°の傾きをもって立ち上っている。

覆土—3枚に分けられ、No.1は第Ⅳ層を含む混合層、No.2は第Ⅳ層と第Ⅴ層の混合した流土とみられ、No.3は第Ⅴ層と壁の崩れを含むものである。遺物はNo.2に縄文前期土器片を少量認められている。

遺物—住居中に集中する様に18点検出された。石器はV群b類、VI群d類各1点、同j類2点、VII群b類1点、Ⅷ群g類2点がある。土器はⅦ群a類11点、V群c類5点の計6点がある。この中で台形を示すⅧ群g類石器や、片面加工をもつ石槍のⅧ群b類は本住居跡を代表する特徴的な石器である。礫器はXV群1点のみであった。

住居跡の年代—Ⅳ群a類から桑山Ⅲ期とみる。

S T 11〔第2図・第28図・第29図〕

平面形状—ST10、ST14に切られ、全体の3分の1が失なっているが、柱穴の状況から不整の橢円形状プランを示すことが判った。ST10と同じ様に後世のSD1が横断している長径520cm、短径450cmをなす。

柱穴—壁柱穴を有し、不規則にP 176～P 191の16基を配している。大きさは6cm～19cm、深さ12cm位をなし、5cm～7cmの柱痕跡を認める。住居跡の中央付近に存在するP 192～P 198の基は覆土の状況から第Ⅳ層(縄文前期)面から掘り込まれたものであり本住居跡には伴わない柱穴である。

壁—ゆるやかに立ち上り、西および北壁が9cm、東壁付近で11cm、南は浅く7cmを呈する。

床—全体に木炭の粒が点在する。平坦で西から東に僅かに傾斜をもつ。覆土は3枚あり、廐絶後に西から流れ込んだ流出土である。

遺物—石器4点と土器2点の計6点である。石器はI群b類、V群a類、VI群d類、VII群b類各1点に、土器はII群a類の撚糸文、IV群d類の無文土器各1点が認められた。礫器は7点ある住居跡の年代—II群a類から桑山Ⅰ期とする。

S T12〔第2図、第29図～第31図〕

平面形状—S T13によって住居跡の3分の1東側が切られている。円形プランを有し、長径400cm、短径は東側の柱穴まで365cmを計る。

柱穴—8cm～20cmの大きさを標準にP 277～P 290の14基が壁に配している。深さは最深10cm浅いので4cmと全体的に浅く、4cm～6cmの柱痕跡が認められた。

床—平坦で固くしまり北隅に96cm×58cmの楕円形状を示すSK47を中心に微量の焼土と木炭が分布している。

壁—東壁を除く、両壁、南北壁ともに9cmを有しゆるやかに立ち上りを示している。

覆土—レンズ状に堆積している。3枚ありNo.1は黒褐色の第IV層、No.2は第IV層の1部と第V層、それに少量の木炭を混入した流出土、No.3は壁の崩れとV層の混合層である。

遺物—沈線文を主体にしたIV群a類5、同b類1点、VI群a類1点の土器片とVI群a類、同f類、同k類、VII群c類、VIII群c類、それにVII群b類の各1点計13点が床面から認められた。礫器としては、XIII群2点の計2点がある。

住居跡の年代—平行沈線文を中心としたIV群a類より、桑山Ⅱ期に位置付けたい。

S T13〔第2図、第31図～第34図〕

平面形状—S T12を切って構築された楕円形状プランの住居跡である。正軸を東西方向にとり長径613cm、短径520cmをなす。住居跡の中央から東寄りにかけてSK16～SK18の3基の土壙が存在するが、第IV層から掘り込んである風倒木壙であり、住居跡に伴うものではない。

柱穴—豎柱穴を要し、P 262～P 273の12基が設している。ただP 274～P 276の3基は住居跡に伴うものかは不明である。6cm～7cmの柱痕跡を示す柱穴の大きさは11cm～22cm、深さ8cm～21cmをなす。

壁—西壁が深く8cm、南壁で6cm、東が7cmで北が5cmと全体的に浅く立ち上りは不明瞭である。床は風倒木壙のためか軟弱である。

覆土—No.1・とNo.2の2枚に分かれ。上は黒褐色土の第IV層、下は黒茶褐色をなす第IV層とV層の混入土層と理解された。

遺物—刺突連続沈線文をもつVII群a類土器4点とIV群c類、V群a類、各1点の土器とI群b類、II群d類、V群e類、VI群a類各1点、同d類2点、同f類1点、VII群b類2点と同c類1点の石器が検出されている。礫器はXIII群の欠損品1点のみである。

住居跡の年代—VII群a類に求めることができる。桑山IV期に位置付ける。

S T 14 [第2図、第34図～第36図]

平面形状一主軸長を東西にもつ豎穴住居跡であり、北側のS T 11、南東に位置するS T 15を切って構築する。やや東側が広い楕円形状を有し、長径480cm、短径404cmを計る。

壁一東壁から中央にかけて、風倒木壇と考えられるS K 27に切られているが、他は明瞭に確認することができた。ほぼ直角に立ち上り、最深を東として10cm、西8cm、南7cm、北5cmと北から東西方向に傾斜を呈する。

柱穴一壁柱穴を基本とするもの明確ではない。円形状の8cm～28cm、深さ5cm～19cmを有する柱穴は覆土の観察からP 199～P 209、P 211にP 210とP 215を加えた13基とみられる。S K 27に切られているので全体的な配置状況は不明であるが、東側と西側に多く柱穴を配するものとみられ、少なくとも16基は有していたとみてよい。

覆土一4枚ある。No.1、No.2は第IV層を含み、No.3は暗黒茶褐色の第V層上部層と第IV層の混合した流土、No.3は住居跡廃絶後すぐ堆積したものとみられる。

遺物一土器、石器合せて13点が認められている。土器は床に食い込んで確認されたVI群c類3点と床面直上から認められたⅦ群a類2点、Ⅳ群a類1点がある。石器は有舌尖頭器の仲間に属する第34図12(Ⅱ群b類)2点とⅠ群d類、VI群a類、Ⅶ群a類、同b類、XI群a類各1点である。礫器はXV群3点とXIV群1点が認められる。

住居跡の年代一VI群c類土器から桑山Ⅲ期にする。

S T 15 [第2図、第36図～第38図]

平面形状一北壁を掠る様にS T 16、南壁の大半をS T 14に切られ、全体の3分の1程は失なわれているが柱穴の分布状態から長径約468cm、短径340cmの隅丸方形もしくは楕円形状プランを有するものとみられる。

柱穴一壁に沿って存在するP 219～P 229、P 230とそれに壁から離れて分布するP 233、P 239、P 207、P 206の計16基が本住居跡の柱穴と考えられる。本状のP 231、P 232、P 234～P 237、P 238、P 228、P 240、P 241もセクションの観察から柱穴と認められるが覆土の状況より、第IV層から掘り込まれたものと断定された。

壁一崩れたと考えるべきで、なだらかに立ち上り、平均6cmをなす。

床一中央から西よりにかけて部分的に固く、少量の木炭粒を確認することができた。

覆土一レンズ状に堆積している。No.3は壁が崩れたもの、No.1、No.2は木炭を含む明黒茶褐色を呈し、第V層の流土とみられる。

遺物一Ⅱ群b類の撲糸文、表裏条痕をもつⅦ群b類各1点の土器と今回唯一のトランシェ様石器V群d類、尖状を有する曲形的な打製石斧V群a類2点それにⅡ群c類、VI群d類、Ⅶ群g類各1点がある。礫器はXV群2点、XVI群1点がある。

住居跡の年代—住居床面に2点の土器片が認められ、一つはⅡ期に相当するⅡ群b類、もう一つはV期に相当するⅦ群b類土器である。しかし、住居跡の切り合い関係からすると、S T14は桑山Ⅲ期、S T16はV期に位置することは既に併出土器等の吟味で明らかである。すなわち切り合いと土器の年代から考えた場合、新しい方からS T16、S T14、S T15となり、Ⅶ群b類土器は住居跡の年代を示すものではない。と言っても1点のⅡ群b類土器だけで年代決定には難しいが、ここではS T14のⅢ期を考慮し、(少なくともこれより古い年代をあたえるのは可能であり)Ⅱ群b類土器をⅡ期とみた桑山Ⅲ期との推測をしておきたい。

S T16 [第2図、第38図～第40図]

平面形状—S T を微かに切って構築した長径445cm、短径370cmの楕円形プランの住居跡であり、第IV層から掘り込まれたSD 4に切られているが保存状況は良い。

柱穴—壁直下に配列したP 242～P 254の13基で構成する。柱規模は小さく6cm～17cm、深さ6cm～19cmを計る。柱痕跡は3基しか認められなかったが4cm～7cmを有するものとみられる。

壁—ならだかで、東8cm、西10cm、北と南が6cmをなし、北壁が著しく崩れていた。床は平坦で、南壁から東壁にかけて木炭が認められる。

覆土—一本住居跡が最も苦労した。層位はNo.1～No.3の3枚に区分され、No.1が黒褐色の第IV層、No.2が第IV層に第V層の一部が混入した流土とみられ、No.3は住居跡廃絶後まもなく堆積したものと理解されるが、No.2から床面にかけて、第38図8～13Ⅶ群a類、V群b類と西壁のNo.3から床にかけて第38図3～7Ⅷ群a類、Ⅱ群c類と東壁に刺る様に第38図14～18、第40図1～4Ⅸ群a類が認められたのである。前にも触れた様に住居跡出土の遺物は、すべて床面から検出されたもののみを使用することで、あえてこの様にしたのである。

遺物—いま述べた様に時期的に古いⅦ群a類3点・V群b類3点、Ⅶ群a類1点、Ⅱ群c類4点とⅧ群a類9点計20点の土器がある。石器は5点で、Ⅱ群a類1点、Ⅵ群e類2点、Ⅷ群c類、Ⅸ群a類各1点となる。礫器はXIV群1点とXV群3点ある。

住居跡の年代—同じ床面でも、明らかに住居廃絶後古い土器とともに堆積したと理解されるNo.2、No.3を除くとⅦ群a類となり、本類が住居跡の年代に最も近いものとみられ桑山V期とみたい。

S T17 [第2図、第41図～第44図]

平面形状—S T18の一部をかすかに切って構築した長楕円形プランの住居跡であり、南東壁を後世のSK50、SK21に切られている。長径605cm、短径366cmを有している。

柱穴—壁柱穴を基本にP 344～P 370の26本を用いている。いずれも小規模な柱穴であり、平均9cm、深さ12cmをなす。柱痕跡は5.5cm～7cmであった。

壁—全体的に浅く、東壁で8cm、西で6cm、南4cm、北5cmを計り、ゆるやかに立ち上っている。

る。床も平坦で、中央から東西に細長く木炭が認められた。

覆土—3枚ある。No.1は暗黒褐色を有し、第IV層、No.2は暗黒茶褐色の第IV層、V層の混合層でNo.3は茶褐色シルト層をなす壁の崩と第V層の混合層である。

遺物—東側と西側に集中して分布していた。土器は72点認められ、そのうち磨滅の少ない37点を図化した。細沈線を中心とするIV群a類15点同c類2点、VI群b類3点、VI群a類5点同c類2点、V群a類11点がそれである。石器は14点あり、V群b類1点、VI群a類、同d類各1点、同j類同k類各3点、VI群a類、同c類各1点、Ⅶ群c類、同f類各1点となっている。

住居跡の年代—住居跡出土の土器を分類すると、田戸下層に併行するとみられるものIV群a類、VI群b類、VI群c類、VI群a類5点のグループ、田戸上層に併行するとみられるものVI群b類3点、V群a類11点である。覆土の状況や遺物の分布状況から後に混入した（廃絶後堆積した）ものとは認められないことから年代的な移行期と考えることができよう。すなわち田戸下層から田戸上層へ変化する時期に位置するものとみる。従ってここでは桑山Ⅲ期の古い方としておく。

S T18〔第2図、第44図～第48図〕

平面状況—S T17と同じ橢円形状プランを示すもので、南東壁の一部を切られている。長径640cm、短径496cmをなし、No.5の住居跡の中で最大規模を呈している。

柱穴一間隔を80cm～118cmを有しながらP 373～P 387を壁に配している。円形を有する柱穴は、7cm～23cmをなし、6cm～25cmの深さを施している。柱痕跡は大きいもので15cm、小さいもので5cm位で平均8cmを有している。

壁—なだらかに立ち上るのを特徴とし、東壁を5cm、西壁を12cm、北と南が9cmと東から西へ幾分傾斜をもつ。床は平坦で、中央から西壁よりにかけて多量の木炭と微量の焼土をもつ範囲が認められている。

覆土—No.1～No.4の4枚に分けられる。No.1は第IV層、No.2、No.3は第IV層と第V層、それにこぶし大の円礫を含む、暗黒茶褐色の流土、No.3は住居壁の一部が崩れたものと第V層の混入層で住居廃絶後まもなく堆積した土層である。

遺物—石器を中心に42点検出している。土器は22点あり、IV群a類7点、同b類3点、VI群b類6点、V群a類6点と石器は20点でI群e類1点、II群a類、同b類、IV群a類、V群a類、VI群b類、同d類、同e類、同i類各1点、同j類2点、VI群b類、VI群b類、同f類、IX群a類、X群a類、XI群各1点があり、等に石鏟を有するものが多くみられた。礫器はXIII群4点、XV群23点、XIV群4点の計31点が得られている。

住居跡の年代—太状の沈線文を有するIV群a類と同b類から桑山Ⅱ期とみる。

S T19〔第2図・第49図・第50図〕

平面形状—不整の隅丸方形プランを有し、長径375cm、短径342cmを計る。柱穴はP 64、P 65

P67, P68の4本で、19cm～27cm、深さ11cm～22cmを計る。

壁一は浅く、ほぼ直ぐ立ち、最深の東を10cmとし、西3cm、南4cm、北5cmをなす。床は凸凹した不整床をなし、中央から西南よりに70cm×67cm、深さ3cmの地床炉を配している。

覆土一は2枚であり、No.1, No.2とも暗茶褐色のシルト層をもつ。No.3は焼土である。

遺物一3点の土器片と、5点の石器が得られた。先の土器は平行沈線間を転回する菱形状口計型押型文のI群土器であり、本遺跡ではST19のみに発見されたものである。石器は石鏃のI群d類を初め、VI群h類、同j類各1点とⅦ群b類2点、同d類1点が認められた。

住居跡の年代—I群土器から先の撚糸文土器を伴うST5・ST11と同様な最も古いグループ桑山I期に位置付けられる。

b 土壌〔第2図・第59図～第63図〕

No.5遺跡A区のはば全域に分布し、SK1～SK51の51基が検出された。検出した土壌は確認層序、規模、堆積土等の状況から、次の4グループに分けられる。

1) 第Ⅲ層面の土壌

第Ⅲ層面から掘り込まれた土壌であり、繩文後期初頭に位置付けられるもの。SK4・SK5・SK10・SK16～SK20, SK25, SK27, SK37の11基。

円形、橢円形状を有し、小規模で浅いのが特徴である。No.4遺跡で明らかとなった風倒木壙は繩文中期後葉期に位置付けられており、これを裏付ける様にSK14の上部にSK11～SK13が構築している。土壌内部には少量の木炭と磨滅した土器が僅かに伴う他は殆んど遺物の検出は認められないのが現状である。大きさはSK8の120cmを最大として、最小SK44の50cmを計り平均98cmをなす。深さは7cm～35cmで埋土は1～3枚でSK12の様に4枚～6枚を呈するもある。

2) 第Ⅳ層上面の土壌「風倒木壙」〔第2図・第60図～第63図〕

第Ⅳ層の上面に確認する大形の土壌状遺構で、SK4, SK5, SK10, SK14, SK16～SK20, SK25, SK27, SK37, SK50の13基がある。平面形状が不整の橢円形プランを有し、最大規模を誇るSK4が長径545cm、短径375cm、深さ71cm、次いでSK14が405cm×275cm、深さ49cm、SK5が375cm×288cm、深さ65cmをなす他は180cm～350cm、深さ37cm～69cmを示す。埋土は長軸方向がレンズ状、短径が縦位の堆積状況をなし、地山（黄灰褐色粘質シルト層）と第Ⅳ層、第V層が合わかる様に認められる。埋土の枚数はすべて異なるが、SK4は23枚、SK5が29枚、SK14が10枚、SK25が9枚等なる。

遺物一は風倒木壙であることから伴出遺物の資料価値は殆どないが、SK4から6点、VI群b類、VI群c類各1点、VI群f類2点、X群、II群a類各1点、SK5からはX群1点、SK24から3点、II群b類、VI群b類、X群各1点とSK14からIX群a類1点が混入していた。

3) 第Ⅳ層下面の土壌〔第2図・第59図〕

橢円形、円形プランを中心とする土壤群である。先の第Ⅲ層面の土壤と同じ様に浅く、遺物の含まないものが多い。長径202cm、短径181cm、深さ12cmをもつSK24他、SK21、SK23、SK28、SK29、SK33、SK40～SK42、SK44～SK46、SK51の計13基が認められた。

長径202cm～75cm、深さ7cm～29cmと浅状を有し、断面形態がボール状を示すのが特徴である。埋土は黒褐色もしくは暗茶褐色を示す2～4枚が多い。繩文前期に伴うものとみる。

4) 第V層面の土壤〔第2図・第59図〕

ST12に伴うSK47は別として、殆んどは住居跡より離れて存在する。第V層から掘り込んでいることから繩文早期に属するものとみてよい。橢円形プランを示すものが多く、SK1～SK3、SK6、SK32、SK35、SK39、SK43、SK47の9基がある。規模は205cm～72cm、深さ5cm～15cmと非常に浅く、内部に少量の木炭を含む場合が多くみられた。遺物は微量であることから明確な年代決定は差し控えておく。

C溝状遺構〔第2図・第60図〕

SD1からSD3の3基が認められる。SD1は第Ⅲ層の上部(第Ⅱ層か)より掘り込んでいる溝状遺構である。平均幅32cm、同深さ37cmを有し、細長いクランク状に配する。SD2はST6を切って構築する第IV層の遺構である。幅25cm、深さ35cmをなす。最後のSD3は長径338cm、幅66cm、深さ22cmをなすもので、第V層の遺構である。

B区の遺構

99～110—206～217にかけてST1～ST5の5棟の住居跡と8基の土壤、それに不明の溝状遺構2基が存在する。この中でST5と称した住居跡は規模形態からも他の住居跡と異なっており、住居跡とすべきではなく、不明遺構として位置付けたい。

以下簡単に説明を加える。

a 竪穴住居跡〔第111図・第112図～第121図〕

方形プランを有する竪穴住居跡で4棟ある。いずれも火災に遭遇した住居跡と考えられ、内部に多量の焼土を含んでいた。住居跡の方位はST1が磁北を示す他はまちまちであった。

ST1〔第111図・第112図・第116図〕

平面形狀一不整の方形プランを有し、長径311cm、短径275cmをなし、今回検出された住居跡では最も小規模である。

柱穴—長径22cm、深さ30cmを計るP1のみで、南壁に接してあった。

壁—北壁と西側がほぼ真すぐ立ち上り18cm、南壁と東壁が外に傾く様に立ち上りを有し16cmを計る。周溝は認められなかった。

床—平坦で、南壁に接する64cm×54cmのSK5と東南壁に76cm×46cmのSK6を配してあった深さは両者とも15cmと浅い。

炉跡一住居跡中央西よりに93cm×64cm, 深さ3cmの楕円形地床炉がみられる。

遺物一土師器楕形土器を中心としてa²類2点, a³類2点, a⁴類2点, a⁵類1点, d²類の菱形土器2点, それに櫛器e類1点が認められる。

住居跡の年代—古墳前期の南小泉II式とみる。

S T 2 [第111図・第

平面形状—ほぼ正方形をなし, 長径480cm, 短径470cmを計る。主軸方向はN-46°-Eを有し, 磁北にコーナー部分が合っている。

柱穴一主柱穴がP 2-P 4の4本, それに周溝内に小柱穴が密に配するのを特徴としている。中心的な主柱穴は, 25cm~35cm, 深さ46cm~50cmの円形に掘り込んで, 12cm~15cmの円柱を設置している。柱痕跡の中央からの間隔はP 2-P 3が251cm, P 3-P 4が351cmとほぼ等しい。壁下に存在する小柱穴群は6cm~12cm位の楕円形を有し, 20cm~30cmの間隔を有して78本認められる。一部周溝とともに西隅で切れている空間は, 入口ともみられる。

壁—周溝から約128°の角度をもって立ち上る。深さは床まで, 西で18cm, 東で17cm, 南22cm, 北で19cmを計り, 平均的である。

床—は平坦で固い。

炉跡—P 2とP 3の中間に楕円形で配し, 68cm×62cm, 深さ3cmの地床炉形態をなす。

周溝—西隅に70cmの空間を置き, 上端幅で30cm~20cm, 下場で6cm~7cm, 床からの深さ8cm~10cmを呈する。

遺物—西隅のコーナー付近にかけて22個の完形土器が認められる。最も多いのは楕形土器であり, 伏た状態で2個ないし3個が設置した様に検出された。器形の分類は, a¹類5点, a²類1点, a³類1点, a⁴類1点, a⁵類4点, a⁶類5点, a⁷類, a⁸類各1点, b¹類, d²類, e類各1点とそれにラウンド・スクレーパー羣C類1点が含まれる。

住居跡の年代—古墳前期の古手の南小泉II式併行としておく。

S T 3 [第111図・第114図・第119図・第120図]

平面形状—N-26°-Wを有し, 長径480cm, 短径420cmと東西に長い長方形プランをなす。一部北東コーナー部の壁が崩れた様子を示すが, 他は明瞭である。

柱穴一主柱穴4本と壁柱穴の組み合せで構成している。主柱穴はP 7が30cm×24cm, 深さ38cm, P 8が32cm×30cm, 深さ45cm, P 9が33cm×34cm, 深さ46cm, P 10が28cm×26cm, 深さ46cmと円形もしくは楕円形形状に掘り下げている。柱痕跡は9cm×12cmを計り, 平均10cm位の円柱材を設置していたものとみられる。周溝内に配されている壁柱穴は, 先のS T 2と同様に5cm~7cmの小さな柱穴を示すもので, 柱穴を接する様に111本認められた。

壁—外側に, 98°と比較的の直角に近い立ち上りを示す。深さは北壁が深く床面まで22cm, 他は約18

cm位であった。

床—主柱穴を中心として固くしまっている。炉は住居跡のほぼ中央に74cm×53cm、深さ25cmの橢円形に残っていた。なお主柱穴P7—P9とP8、P10をつなぐ南壁に2ヶ所の粘土盛り上り部分がみられる。

遺物 住居全体に分布している。楕形土器を多く残し、a²類6点、a⁷類、a⁸類、b類、c類、d⁴類各1点の計11点と磨石1点がある。

住居跡の年代—古墳前期の南小泉II式としておく。

S T 4〔第111図、第115図〕

平面形状—一辺各450cmの正方形プランを有する。西壁の周溝が南壁寄りに狹まることからその部、西コーナー部にテラス状の張り出しをもっている。

柱穴—P11～P14主柱穴と壁柱穴で構成する。主柱穴は円形をなす直径30cm～36cm、深さ45cm～65cmとこれまでS T 2～S T 3とはほぼ同じく、小規模な壁柱穴も壁から床面方向に細長い6cm～10cmの小柱穴として周溝内に75基認められている。一部SK8によって切られている東コーナー一部と南コーナー部分が切れている。

壁—斜状に120°の傾斜を有して立ち上る。深さは床面で6cm～11cmを有し、西壁がやや深い。

床—主柱穴を結ぶ中央が固い。床面から掘り込んだと考えられるSK8、SK7、P15、P16の4基の遺跡が伴っている。先の土壤は、内部に多量の焼土、木炭が混入することから、住居が機能していた時からの存在をもつ。SK8は90cm×100cm、深さ50cm、SK7は75cm×80cm、深さ25cmで円形プランを呈している。P17はP11に切られ、P16も周溝に切られていることから少なくとも住居跡構築時よりも新しくはならない。

周溝—壁から直下する溝造をもち、床面から深さ5cm～9cm、幅14cm～20cmをなす。

炉—北壁に近い所に位置し、40cm×30cm、深さ3cmの地床炉である。

遺物—住居跡全体から9点検出されている。主に楕形土器と變形土器が占め、a²類・a⁴類各1点、a⁶類・a⁷類各2点の計6点の楕形土器とd⁴類・d⁵類・d⁶類各1点の變形土器が認められる。

住居跡の年代—古墳前期の南小泉II式であり、楕の形状はこれまでのS T 1～S T 3も含めてむしろ南東地方の和泉I式に類似する。

b住居跡外の遺構

S D 1・S T 2の溝状遺構と4基の土壤がある。SD1は幅120cm位深さ30cm位を有し、東西に長く、211Gで北へのびる近世の遺構、SD2も同様である。土壤は長径600cm、短径350cmをもつSK3の風倒木壙であり、他の土壤は不明である。

V遺 物

1)出土石器の概要

本遺跡のA・B両区から総数3,017点の石器が出土し、この中で細類し図面化を必要と認識された428点について、すべて実測図を作成した。ちなみにこれらの石器を各出土状況ごとにみるとA区は住居跡153点、その他の遺構12点、第V層出土87点、第IV層出土150点、B区は住居跡1点、第III層10点となり、この結果は他の石器にも類似する。

実測図を作成した428点の石器を一括して、それぞれの形態、使用痕等の吟味に視点を置き、I群～X群の13形態に種別し、さらに必要に応じて細分を加えた。詳細は後に述べるが、I群石器28点〔石鎌〕、II群石器24点〔尖頭器〕、III群石器12点〔石錐〕、IV群石器17点〔石匙〕、V群石器33点〔打製石斧〕、VI群石器116点〔石箒〕、VII群石器16点〔石槍〕、VIII群石器127点〔スクレーパー類〕、XI群石器13点〔大形状のサイド・スクレーパー類〕、X群石器23点〔破損面を有する石器〕、XI群8点〔石核〕、XII群石器12点〔磨製石斧〕、XIII群石器1点〔石製品〕等に類別した。以上の石器群は、後述した第3表、第4表に石器形態及び計測値と出土地点グリットを明記しているので参照願いたい。

礫石器はXV群17点〔石皿〕、XV群90点〔磨石〕、XVI群19点〔凹石〕、XVII群1点〔敲石〕の4形態に大別し、概要については別項で述べたい。

なお今回は、住居跡に関しては各住居跡別に、包含層出土はV層、IV層の順で各群に図示した。A区出土石器の細分

I群石器

住居跡6点、V層7点、IV層15点があり、これらの石器は、基部形態や微細な剥離調整から、さらにa類～f類の6形態に細分することが可能である。

住居跡出土の石器は、b・d・e類の3形態が認められる。b・d類の両者には先端部の形態に共通点がみられ、注意を要したい。V層出土は、b・c・e・fの4形態が観察されるが、これらの中でも特にc類が主流をなす。b・d類は住居跡と共存し、c類はIV層と共有する。IV層はa・c・e・f類の4形態が有り、特にNo.4でも出土量の多いI群b類に類似する本群のe類が過半数をなす。

II群石器

本群は住居跡8点、V層15点、IV層1点の出土を数える。これらの石器は、基部形態よりa類～d類の4形態に細別できる。なお本群のa・b類はNo.4 I群j類、V群c・e類に類する石器である。

住居跡からはa類～d類の石器がほぼ平均的に出土しているが、特にa類が多く観察でき、このことはV層にも共通する。前述した出土量が示すように、本群は住居跡・V層を中心に分布する。なおB図5、46図11はIII群石器のa類に類似する剥離調整を持つ。

III群石器

住居跡2点、V層4点、IV層6点の出土を数える。素材の用い方や錐部の整形に注意してa類～c類の3形態に細分した。

住居跡には、b類とc類の2形態がある。前者の石器は、本来V群石器b類に類似する柳葉形状尖頭器であるが、先端部に磨滅痕を有することから本群に加えた。錐部の作り出しは明瞭でなく、そのまま使用している。c類は、No.4のIV群e類に類似する。又、V層にはa・c類の2形態があり、a類はNo.4のIV群b類に相当する。IV層は、a・c類の2形態が認められ、c類は各出土地点に共通する。

IV群石器

住居跡0点、V層4点、IV層より13点が出土している。剝離調整及びつまみ部の整形に着目して、a類～e類の5形態に細分した。

V層出土は、a、b類に限定される。64図3は、横形の形態でNo.4のIII群a類石器に外形状では共通する。IV層出土はc～e類の形態があり、c、d類はNo.4のIII群b類、e類はIII群d類にそれぞれ類似するが、本群の石器は身巾が広く、若干の形態的相違を呈する。

V群石器

住居跡11点、V層12点、IV層10点の出土を数える。それらの石器群を基部形態及び刃部調整に注意し a類～j類の10形態に細分を加えた。

住居跡出土の石器としては、a類～f類の6形態が存在する。それらの石器類の中でもa,e類は出土範囲が限定され注意したい。他はV層と共有した出土状況を呈するがb類は住居跡出土が主流をなし、No.4のVI群a類に類似する。残りのc・d・f類の3形態は少量認められるにすぎない。

V層からは、b,c,d,f,hの各種5形態が出土している。主流はNo.4でも出土数が多いVI群b類に類似するc類やf類(No.4のVI群d類)がある。他のb,d,h類の中でd類は所謂〔トランシエ様石器〕でNo.4のVI群c類に類似するが、基部の形態に異質な要素を有する。

IV層出土はg類～j類の4形態がありそれらのg,i,jの3形態はIV層の疇中として理解されh類はIV V層に共存する形態を有する。なおIV層と住居跡が共存する形態は認められない。

VI群石器

本遺跡出土の石器群の中でも最も数量が多いグループで全体の25%を占め、特にIV層では30%に達する。各出土別類計は、住居跡37点、その他遺構3点、V層20点、IV層50点となる。これらの石器は、剝離調整や作業縁辺の観察よりa類～k類の11形態に細分することが可能である。

住居跡からはa類～k類まで変化に富んだ形態の石器が出土し、それらの中でもa,e,f,iの4形態は住居跡に限定される仲間である。他のb,c,g,hの各類は少量でありV層と共存している。残るj,kの両者は、各出土状況地点に平均的な分布を呈する。

V層出土の石器類はb, c, h, j, kの6形態がある。これらはすべて住居跡やIV層と共存を呈し、V層出土の特色を有する石器は認められない。

IV層出土の石器としてはc, d, g, h, j, k類の6形態が観察でき、特にd, j, k類の3形態の出土が多い。これらは住居跡からも平均に出土している石器であり、出土地別に比較すると住居跡は両面調整を主体としIV層は片面調整が主流を有する。

V群石器

住居跡6点、V層3点を数え、IV層からは検出されなかった。これらの石器は剝離調整や尖状部形態よりa類～d類の4形態に細分を加えた。

住居跡からは、a, b, c類の3形態があり、いずれもするどい尖状部を有する。これら中でa類は柳葉形状を有する石槍で、No.4出土のⅡ群石器と類似する。b, c類は縁辺に使用痕を有することからスクレーバー類に分類できるが、前述した形態から理解して本類とした。なおNo.4からはb, c, d類の出土はない。V層出土はb類に代表されるが、すべての石器が欠損面を有すことから全容は明確にはいえないが、現存する形態から判断して、両端が尖状を呈する形態と推測する。

Ⅳ群石器

住居跡45点、その他の造構3点、V層12点、IV層67点を数えⅥ群と共に出土量の多い石器群である。これらの石器類は、作業縁の整形や外形状に着目し a類～j類の9形態に細分し、さらにb類はb'～b'', c類はc'～c'', f類はf'～f''に細分を加えた。

細別の結果を列順すると、b類86図2,4,5, b'類29図4, 47図4, 48図6, 86図3, b''類17図4, 20図4, 33図3, 34図1, 36図2, 47図2, 50図4,6, c類105図1, 17図2, 31図1, 84図1, e'類11図22, 18図1, 20図2, 34図14, 44図4, 83図5。c'類87図1～8, 40図7。f'類22図25, 94図2, 88図4, 89図1,3,6,7, 90図1,2,3,5,7,8, f''類25図3, f'11図2, 12図3, 6, 18図2,4, 22図23, 44図5, 48図3, 94図1, 96図2, 93図1, 97図3, 88図5, 89図2,5, 4, 96図4,6, 91図3, 92図1になる。

住居跡からは、a類～g類までの7形態が出土し、それらの中でも、b, c, f', g, の4形態が主流を呈する。注意したいのはb類の仲間でもb', c類はc', g類, f'類(ヒエス、エスキュー)の4形態が住居跡に限定されることであり、またe類の石器も注目したい。

V層出土は、b類～g類の6形態が認められ各類とも少量で住居跡出土と共存するものが多い。IV層は、g類を除く8形態が出土し、特にh, i類の2形態はIV層に限定される石器類であり、他にはf'類の出土量が多い。さらに注目されるのはc類の中でもc'がIV層出土で占めることである。

Ⅸ群石器

住居跡6点、V層4点、IV層3点の出土がある。各出土状況別による形態の差は認められないが、出土量では、住居跡、V層が多く、住居跡に伴なう石器として注意したい。

X群石器

住居跡より8点、IV層より16点出土した。これらの石器群の中には、98図9、99図3、7に觀察されるように磨滅痕を持つものは、石器として使用中に破損したものと理解されるもので、他の使用痕を有する石器も同様と考えたい。

使用痕や磨減痕をもたない石器群については、意図的な切断面を目的とした痕跡は認められないことから製作途中の破損と理解したい。

XI群石器

住居跡1点、V層2点、VI層5点である。残された形状からa類とb類の2形態に大別した。a類は剥片剝離を目的とした石核の残痕であり、b類は石核の剝離面を調整する際に生じた分割面を有する大形剥片である。100図2、101図1、102図3、No.4のIII群a類に類似する形態が多い。

XII群石器

住居跡6点、V層4点、IV層2が出土している。これらの石器を製作技法や刃部形態よりa類～d類に細分することが可能である。

住居出土はa類～c類の3形態が認められるが特にa類の局部磨製石斧〔No.4 III群a類〕に注意したい。100図1は、a類未完成品で敲打による整形が加えられた段階では磨面は有していない。48図5は、風化している為に研磨方向は不明であることから、実測図には外線と稜線を図示した。以上の2点から、本類の完形が理解されるよう思う。

V層出土は、a・b類の2形態がある。103図2は、基部を刃部に整形した再利用品で、破損面にも研磨を加えて整形している。住居跡・V層から出土した本群の3形態に共通する点は、敲打痕を有している点と、同質の石材を使用している点の2点であり、このことから住居跡とV層は同一範囲と理解した。

VI層出土は、d類の1形態が認められるが、V群のi類やj類と同じく石材の選択に注意を要したい。

XIII群石器

S T18より2点出土した。橢円形状を有し、横断面はゆるやかな弓形を呈する。表面には若干の研磨が加えられており、左側の位置には右上りに平均3cm巾0.02cmの刻線が5本、中央にはまっすぐに平均3.7cm巾0.02cmの刻線が5本、右側にはわずかに傾斜する1.8cm巾0.02cmの刻線が2本、合計12本の刻線を有する石製品である。なお石材は砂岩性の自然礫を用いている。〔第48図9〕

もう1点は、円形を呈する変成岩性の硬質な自然礫を素材に使用し、b面に平坦な磨面と斜面を呈する磨面を持ち、a面には、無数の不規則な刻線を有し、中央部と側面部に浅い凹部を持つ

形態を呈す。石製品と言うより、実用的な礫器と理解したい。

〔第56図20〕

2) B区出土の石器

S T 2 からは、Ⅳ群C'類〔119図5・113〕1点が出土している。石材は頁岩を用い、長さ4.57cm、巾3.68cm、厚さ1.62cm、重さ30gの楕円形を呈する。打面とA面に自然面を有する絶形鉗片を素材に用い、a面の縁辺にR^oを中心加えて整形し、R^o・R^oで作業縁辺を調整した石器である。b面は一次削離面で形成され、ポジティヴ・バルブを持つ。使用痕は、整調縁辺に観察され、火熱を受けた痕跡を呈する。

S T 4 からは、XV群b類〔砥石〕〔121図3・出土地点115図参照〕1点が出土した。本石器も焼成を受けハジケ面を有する。石材は黒色の粘板岩を用い、長さ16.24cm・巾4.76cm・厚さ4.2cm・重さ580gの長方形を呈し、断面はほぼ正方形をなす。全面を作業面として利用し、中央部は凹レンズ状に、わずかにくぼみをもつ。作業面には刻線（使用痕）が無数に斜線をなして走り、これらの中には交差する線もみえる。

包含層出土石器〔第122図1-10〕

I類c類1点〔1〕、II群b類2点〔2・3〕、Ⅲ群d類2点〔8・10〕、Ⅳ群c類1点〔5〕、Ⅴ群c²類1点〔6〕、Ⅵ群b類1点〔9〕、Ⅶ群c類1点〔7〕にそれぞれ細分できる。

これらの石器の中で、7・9は變成岩を使用していることから、IV層出土の磨製石斧や打製石斧と同時期とみなしたい。5はA区住居跡に多くみられる形態をなすが、断面は薄形である。

礫器の概要

石皿、磨石、凹石、敲石を総称して、礫器とする。本項ではこれらを細制するために、次の記号を用いた。XIV群、石皿「E」、XV群、磨石「D」、Ⅲ群、凹石「C」、Ⅳ群、敲石「F」のアルファベット文字を使用する。礫器の説明に関しては、第5表の計測表、第1表の住居跡別出土表第2表の細分表を参照願いたい。

上記の礫群はA区の住居跡より検出し127点を数える。各群の個数については、前項の石器の概要で述べているので省略する。分布状況はS T 18が最も多く23点が検出した。S T 5、S T 19は出土数0である。その他の住居跡からは、S T 2、3、4が1点づつで、残りの住居跡はⅦ群を主体に平均した出土状況を示す。

石材は安山岩、砂岩が主体で各群に共通して使用されている。Ⅳ群の中には変性岩性の硬質な石材を素材としているものも認められる。以下、第2表の説明に入りその後各群に移りたい。

平面形態について、I A～I Dの4形態に細別した。I A—円形を基本とするもの。I B—楕円形を基本とするもの。I C—三角形を基本とするもの、I D—四角形を基本とするもの。

断面形態は、II A～II Dの4形態に細別する。II Aは円形を基本とするもの。II Bは三角形を基本とするもの。II Cは、長方形を基本とするもの。II Dは正方形を基本とするもの。

縁辺形態は、C²1～C¹6の6形態に細別する。C¹1は磨面を有するもの、C¹2は敲痕を有する。C¹3はC¹3は凹部を1個有するもの。C¹4は凹部を2個有するもの。C¹5は凹部を3個有するもの。C¹6は凹部が3個以上有するものとした。以上の平面、断面、縁辺の各形態は砾器全体に適用するもので、57年度のNo.4遺跡と同一の細別表を用いた。

各群の形態分類について述べる。XIV群は磨面の形状より1E～3Eの3形態に細別した。1Eは、磨面が梢円形状を有し、作業面と縁辺の区別が判別できるもの。2Eは作業面と側縁の区別ができない形態を呈す。3Eは両面を作業縁辺として使用しているもの。

XV群は磨面の形態よりD¹1～D¹4の4形態に細別した。D¹1は磨面の数が1面だけのもの。D¹2は2面の磨面を有するもの。D¹3は3面の磨面を有するもの。D¹4は全面が磨面を有するもの。XVI群は凹部の個数により、C¹～C¹²の12形態に細別した。C¹は片面だけ1個の凹部を持つもの。C²は片面に1個の凹部を有するもの。C³は両面に1個と2個の凹部を有するもの。C⁴は両面に1個と3個の凹部を持つもの。C⁵は両面に凹部を有し片面に1個と3個以上の凹部を有す。

C⁶は片面に2個の凹部を有す。C⁷は両面に2個の凹部を持つ。C⁸は両面に2個と3個の凹部を持つ。C⁹は両面に凹部を有し2個と3個以上を有す。C¹⁰は片面に3個の凹部を有す。C¹¹は両面に3個の凹部を有す。C¹²両面に凹部を有し3個以上を呈すもの。

上記に述べた要項で細類し、第5表に細類した結果を細分の項目に記載しておいた。次に各群の説明に入る。

XIV群〔第51図7、9、第52図10、14、第53図6、第54図1、第55図3、10、第56図11、12、第58図35、67〕

本群は、出土したすべてに欠損面を有し、平面形態は明確でない。素材は偏平の河原石を用いている。石材は、安山岩や、凝灰岩を使用している。形態は、作業面となる中央部と縁辺の境が区別できないものが大部分に認められる。この形態は、従来より縄文早期にみられるもので、本遺跡においてもおおかた一致する。

断面形態は、厚味のある51図9、52図10、53図6、7、54図2、55図10や54図1、54図8、58図5、7にみられる薄型の二者に大別できる。52図14は、両面に磨面を有するものは1点だけで他は片面だけを作業面としている。裏面および側縁に対しての整形は加えられていない。

分布状況をみると、ST18が4点、ST17、ST11が2点、ST1、8、9、13、15、16が各1点検出し、その他の住居跡からは出土していない。

XVI群〔第51図4、5、6、8、10、13、14、15、17、19、第52図1～9、11、12、13、15～18、第53図1～5、9、10～17、第54図1、3～5～10、13～15、第55図1、2、4～7、9、11～13、第56図1～3～10、18、20、第51図1～18〕

本群は砾器の中で最も出土量が多く全体の80%に相当する。石皿と同様に破面を有するもの

が多く認められる。平面形状は I A と I B が主体で、断面形態が II B と II C で占める。磨面形態は複数を有するものが大部分で特に I B + II B + C' 2 の形態が主体をなす。石材は安山岩が多い。

III群〔第51図1～3, 11～16, 第53図8, 9, 第59図12, 16, 第56図2, 13～17, 19〕

平面形状は I A, I B, 断面形態は II C, 凹部形態は C¹, C² が多い。本群も III群と同様に磨面や敲痕を有し、台石、砥石、ハンマー、という多様な用途を有する礫器であることがわかる。

III群〔第55図6〕

本群は、ST 13より1点出土している。I Bの平面形状を有し、両端部に敲痕を持つ。

第1表 八幡原No.5遺跡住居別礫器形態類別出土表

STNo.	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	STNo.	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	STNo.	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群	STNo.	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	Ⅵ群
ST 1	1	2	4	0	ST 6	0	16	3	0	ST 11	0	4	1	0	ST 16	1	3	1	7
ST 2	0	1	0	0	ST 7	0	5	0	0	ST 12	0	0	2	0	ST 17	2	9	2	0
ST 3	0	1	0	0	ST 8	1	4	0	0	ST 13	0	0	0	1	ST 18	4	23	4	0
ST 4	0	1	0	0	ST 9	1	9	2	0	ST 14	1	3	0	0	ST 19	0	0	0	0
ST 5	0	0	0	0	ST 10	0	1	0	0	ST 15	0	2	1	0	合計	17	90	17	1

第2表 級器形態分類表

C 凹 石																				
縦 辺 形 態																				
D 磨 石	< 平面形状 >										< 断面形態 >									
	磨面形態				片面				2面				3面				全面			
	D' 1				D' 2				D' 3				D' 4							
E 石 皿																				
F 敲 石	磨面・凹をもたず、敲痕だけを有するもの。																			

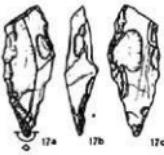
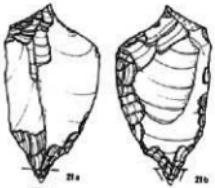
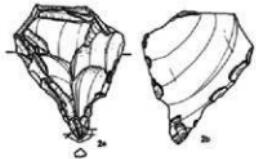
第3表八幡原No.5遺跡A区出土石器形態分類表 [I群石器 a類～f類] (長さ・幅・厚さcm・重さg)

	形 態	特 質	計測平均	出 収 分	V層	住 居 路
a 類		二等辺三角形を有し基部は平坦で両端の角が鋭角的なもの。横断面は中央部から尖状部にかけて厚味を増す。	長さ 2.84 幅 1.89 厚さ 0.42 重さ 1.53	第63回 13-14-15	3点	
b 類		やや大形の二等辺三角形で、基部がいくぶん内消し、両端の角が若干の丸味を持つもの。横断面は中央部から尖状にかけて薄影を示す。	長さ 4.02 幅 2.5 厚さ 0.86 重さ 4.5	第13回27 第29回3 第31回13 第62回3	1点	ST 6-1点 ST 11-1点 ST 13-1点
c 類		小形な三角形を有し基部はゆるやかな凸曲を見せ、両端がやや尖状的なもの。	長さ 2.17 幅 1.28 厚さ 0.86 重さ 0.83	第62回 4-7 第63回 7-12	5点	4点
d 類		大形の典型的な二等辺三角形形状を有し基部が弓形で、脚部は未発達的なタイプ。	長さ 3.67 幅 1.71 厚さ 0.53 重さ 1.33	第34回13 第50回5 第62回2	1点	ST 14-1点 ST 19-1点
e 類		二等辺三角形で基部が内消し、脚部が外側に開き尖状をなす。横断面は凸レンズ状を有し、中央に棱線があり左右対称的なもの。	長さ 2.2 幅 1.56 厚さ 0.38 重さ 0.9	第46回10 第63回 2-6-11	6点	ST 18-1点
f 類		二等辺三角形を有し大形で内厚の形状で、済曲する基部と太く尖状的な脚部をもつ。横断面は基部から尖状部まで一定した厚味を保っている。	長さ 4.31 幅 一 厚さ 0.6 重さ 一	第62回1 第63回1	1点	1点

(Ⅱ群石器 a類～d類)

	形 態	特 質	計画平均	回収番号	層	V層	作 制 路
a 類		三角形を有し、基部がゆるやかに外傾を呈す。 基部がゆく尖状部に対し傾墜に仰懸になる傾向を見せる。 これらの中で不定な三角形を有するグループはa'類とした。	長さ 3.48 幅 2.51 厚さ 0.78 重さ 6.12	第13回5 第40回8 第48回8 第62回8 8~13 第105回7	6点	S T 5~1点 S T 10~1点 S T 18~1点 S K 1~1点	
II b 類		二等辺三角形を有し、細身で内傾的な要素を持つ基部がやや尖状を呈するもの。 縱断面は、基部が厚く尖部に対するゆるやかに薄くなる。	長さ 2.97 幅 1.84 厚さ 0.64 重さ 3.08	第34回11 第34回12 第46回11 第62回 14~16 第63回16	1点	3点	S T 14~2点 S T 18~1点
c 類		本葉形を有し、丸味を持つ中央部で最大巾を計り平坦な基部をもつ。 縱断面は中央で厚く両端がやや薄形を呈す。 調整はバルブを有する面に集中している。	長さ 4.8 幅 3.22 厚さ 0.8 重さ 8.17	第36回5 第53回5 第62回 17~19	3点	S T 15~1点 S T 13~1点	
群 d 類		三角形状を有し、基部が欠損しているものを本群とする。 これらの石器は残された先端部の形状からⅡ群石器の欠損品と推測できることから本群とした。		第33回5 第62回 20~22	3点	S T 13~1点	

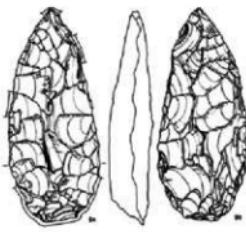
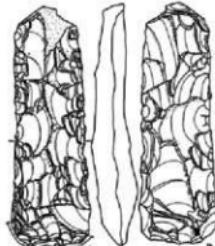
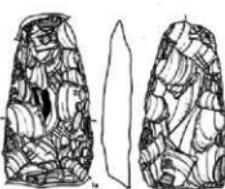
[Ⅲ群石器 a類～c類]

	形態	特徴	計画平均	図版番号	IV層	V層	住居跡	
III 類	a		細身で小形の器形を有し、平削な基部と中央部より先端した尖状部を持つもの。横断面は基部から中央部にかけて厚く尖状部は薄形で三角形の横断面を示す。	長さ 4.36 幅 1.71 厚さ 0.69 重さ 5.5	第63図 7-23	3点	1点	
	b		長円形を有し、中央部が最大巾を計り両端部が尖状を呈するもの。横断面も中央部が厚く側端部にかけやや薄形となる。	長さ 4.05 幅 1.6 厚さ 1.0 重さ 6	第23図11 第63図20	1点	ST 9-1点	
類	c		本類は大型の器形剝片を素材に用いているグループであるが調整法から次の3タイプに分けられる。 c ¹ 類はバブル除去を加え先端部にだけ両面調整で尖端部を整形しているもの。 c ² 類は切削面を利用して整形している。 c ³ 類は他の石器の副用品と考えられるもの。	長さ 5.30 幅 3.82 厚さ 1.19 重さ 21.5	第48図 7 第63図 18-21・24 第64図 1-2	3点	2点	ST 18-1点
								

〔IV群石器 a類～e類〕

		形態	特徴	計測平均	図版番号	基層	V層	住居跡
IV 類	a 類		やなぎ葉形を有し基部はやや尖状的である。 両縁道がゆるやかに右側にカーブして尖状部を形成しているもの。	長さ 7.2 幅 1.55 厚さ 0.65 重さ 7.25	第64図 5・6		2点	
	b 類		横形の形状を有し基部が平川で、尖状部をもち、薄形なもの。 つまみ部の形成は未発達である。	長さ 5.15 幅 2.15 厚さ 0.65 重さ 5.95	第64図 3・4		2点	
	c 類		ナイフ形を有し中央部が最大巾で、平行なつまみ部をもち尖状部がややハート上る。 断面は中央部が厚い、弓形を呈す。	長さ 6.43 幅 2.32 厚さ 0.65 重さ 10.36	第64図 7・9-10-11 12 第66図 2	6点		
	d 類		スプーン形を有し巾が広く、短形であり先端部が丸味をもつ。 断面もやや内厚で半円形状だ。 つまみ部には断面から調整が加え整形する。	長さ 5.02 幅 3.27 厚さ 0.69 重さ 10.33	第64図 13 第65図 2・5	3点		
	e 類		楕円形の不定形を有し、細身で基部が丸味をなすもの。 断面も薄く、小形である。 調整は素材に使用された剝片の原形をとどめている。	長さ 5.18 幅 2.38 厚さ 6.62 重さ 8.22	第64図 8 14 第65図 1・4	4点		

〔V群石器 a類～c類〕

形 態		特 質	計測平均	図版番号	V層	住居 路
a 類	V	 <p>大型の本葉形を有し、基部が尖状を有し、基部が尖状で刃部が外湾を呈するもの。 左右対称で両面の中央部に接觸を持つ。</p>	長さ 11.1 幅 4.8 厚さ 1.5 重さ 104 刃角 53.7°	第29図6 第38図1 第46図9		ST 11-1点 ST 15-1点 ST 18-1点
b 類		 <p>長方形を有し、基部がやや尖状をなし刃部は直線的で両端がゆるやかな丸味を帯び平行に両縁辺が走る。</p>	長さ 10.7 幅 4.8 厚さ 2.1 重さ 114 刃角 58°	第4図14 第27図1 第42図7 第69図1	1点	ST 1-1点 ST 10-1点 ST 17-1点
c 類		 <p>短橢型を有し、基部がゆるやかな弧状をなし刃部は両端の角がとれ直線的なもの。 概断面は刃部から中央部にかけて厚く基部近くで薄形になる。</p>	長さ 8.9 幅 4.7 厚さ 2.0 重さ 90.8 刃角 79°	第15図1 第69図2 第69図3 第70図2 第71図1	4点	ST 6-1点

〔V群石器d類～f類〕

	形態	特徴	計測平均	図版番号	日層	V層	住居跡
d 類	  	複数の刃部をもつ。刃部は直線的で両端は鋭利な形状をもつ。複数面は基部から中央部にかけて厚く刃部は薄影だ。	長さ 8.2 幅 4.5 厚さ 1.6 重さ 45.6 刃角 40°	第36図 6 第67図 3		1点	S T 15-1点
V e 類	  	長方形を有し直線的な基部とやや丸味をもつ刃部がある。 複数面はほぼ平均の厚味を呈す。 両面の縁辺より調整が加えられ整形する。	長さ 7.7 幅 4.6 厚さ 1.5 重さ 65 刃角 63°	第16図 3 第33図 4			S T 6-1点 S T 13-1点
f 類	 	複数の刃部をもつ。刃部は直線的で両端は鋭利な形状をもつもの。 刃部では大巾を計り両縁辺は中央部まで平行で、ゆるやかにカーブして基部に向う。	長さ 10.0 幅 4.8 厚さ 2.18 重さ 117.4 刃角 68°	第25図 1 第65図 6 第66図 1 第67図 1 第70図 1		4点	S T 9-1点

[V群石器 g類～j類]

	形 態	特 徴	計測平均	図版番号	V層	
g 類		長円形を有し丸味を持つ刃部と切妻面を示す基部をもつ。 縱断面は刃部から基部に至るまで平均的厚味を見せる。	長さ 8.1 幅 4.7 厚さ 2.4 重さ 73 刃角 69°	第72図 1～3	3点	
V 類		不定形な短剣型を有し、基部は平坦及びやや尖状をなすもの。 刃部はゆるやかな丸味を持つ。	長さ 8.4 幅 4.0 厚さ 7.6 重さ 51 刃角 51°	第67図2 第70図3 第73図 1～3	3点	2点
i 類		分頭形を有し両端部が丸味を帶び中央部に剣妻面をもつもの。 縱断面は中央部が薄く両端部に対しても厚味を増す。	長さ 11.6 幅 7.2 厚さ 5.7 重さ 195 刃角 68°	第74図 1・2 第75図2	3点	
群 j 類		典型的な器形を有し、中央部より刃部に対しての縁辺は極端に外溝を呈する。 基部は直線的で両端部も鋭利的形状をもつ。	長さ 9.3 幅 7.4 厚さ 2.2 重さ 131	第75図1	1点	

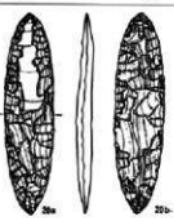
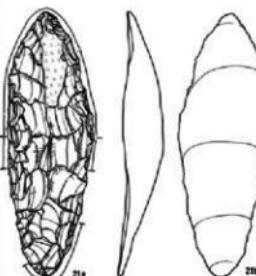
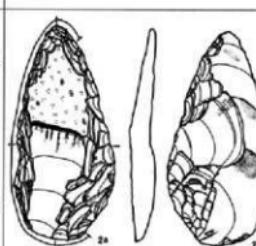
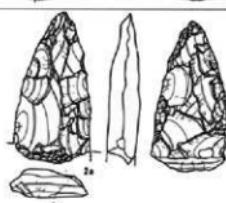
[VI群石器 a類～e類]

形 態			特 徴	計測平均	回版番号	音層	V層	住 屋 跡
a 類	VI 類		長方形を有し平坦な基部と両端の縁邊が丸味をもつ刃部を呈するもの。 縦断面は中央部が厚く両端へゆるやかな傾斜を示す。	長さ 7.99 幅 3.89 厚さ 1.64 重さ 55.4 刃角 72°	第4回12 第31回3 第33回1 第34回9 第42回39 第46回13 第16回6			S T 1—1点 S T 12—1点 S T 13—1点 S T 14—1点 S T 17—1点 S T 18—1点 S T 6—1点
b 類			洋なし形を有し尖状を呈する基部と外溝する刃部をもつ。 両端部が薄く中央部が厚い縦断面形態だ。	長さ 8.0 幅 4.03 厚さ 1.82 重さ 50.1 刃角 51.5	第46回12 第68回12 第68回3 第68回2	2点		S T 18—1点 S K 1—1点
c 類			台形を有し巾の狭い平坦な基部と両縁邊が鋭利で直線的な刃部をもつ。 縦断面は刃部が厚い。	長さ 6.05 幅 3.9 厚さ 1.71 重さ 19.1 刃角 79°	第20回1 第66回3 第77回3 第78回6	1点	2点	S T 7—1点
d 類	群 類		二等辺三角形を有し基部は尖状的で、刃部は刃形を呈し両縁邊が丸味をもつ。 縦断面は刃部から中央部まで厚く、尖状部に近づくにつれ薄くなる。	長さ 7.04 幅 3.85 厚さ 1.4 重さ 40.2 刃角 78.8° IV層	第15回2 第15回5 第16回1 第16回2 第18回24 第18回25 第20回7 第27回5 第31回12 第33回2 第33回3 第36回6 第36回8 第77回5・6 第47回3 第78回1～5 第4回11 第79回1～6 第66回22 第68回2回 第68回3回 第75回3 第75回4	13点	5点	S T 6—5点 S T 7—3点 S T 10—1点 S T 13—3点 S T 15—2点 S T 18—1点
e 類			細長い台形を有しやや尖状的な基部と両縁邊が鋭利な直線的な刃部なもの。 縦断面は刃部から基部まで同一に近い厚味を保つ。	長さ 69.3 幅 13.1 厚さ 1.2 重さ 43.33	第40回6 第47回1 第40回9			S T 16—1点 S T 18—1点 S T 16—1点

[VI群石器 f類～k類]

	形 態	特 徴	計測平均	国版番号	V層	IV層	住居跡
f 類		小形の二節辺三角形を有し尖状を示す。基部にゆるやかな丸味の刃溝をもち、基部中央部が横端に厚くなる断面をもつ。	長さ 4.85 幅 2.75 厚さ 0.9 重さ 10 刃角 56.5°	第29回14 第34回2			S T 12-1点 S T 13-1点
g 類		タマゴ形を有し両端が丸味を呈す。横断面は基部が早く中央部から先端部にかけては特に薄形になる器形をもつもの。	長さ 6.1 幅 4.08 厚さ 1.11 重さ 28.8 刃角 61.5°	第20回6 第23回13 第30回	1-3	3点	S T 7-1点 S T 9-1点
h 類		小判形を有し中央部では両縁辺が平行して走り、両端部が同一の丸味を示すもの。 横断面は中央部が早く、両端へゆるやかに傾斜する。 横断面はカマボコ形を呈す。	長さ 7.32 幅 3.87 厚さ 1.41 重さ 47 刃角 73.5°	第50回9 第51回2 第51回3 第50回4 第50回5	2点	2点	S T 19-1点
i 類		長円形状を有し、ゆるやかな丸味の基部とやや直線的な刃部をもつタイプ。 横断面は肉厚で凸レンズ状をなす。	長さ 5.2 幅 3.23 厚さ 1.93 重さ 23.6 刃角 67°	第12回5 第16回4 第25回3 第48回2			S T 5-1点 S T 6-1点 S T 9-1点 S T 18-1点
j 類		長方形を有し、部は平頭で両縁辺も鋭利で両端部は直線的なもの。 横断面は刃部から基部まで一定の厚みを保っている。	住居跡 長さ 6.72 幅 4.19 厚さ 1.46 重さ 48.72 刃角 74.3°	第76回13 第76回5 第77回14 第80回6 第81回5 第47回5 第48回1 第50回8 幅 4.2 厚さ 1.54 重さ 46.25 刃角 73.6°	8点	5点	S T 2-1点 S T 7-1点 S T 9-1点 S T 10-1点 S T 17-1点 S T 18-2点 S T 19-1点
k 類		長円形に近い形状を有し、両端が丸味をなし、これをつなぐ縁辺の片方が直線的なもの。	住居跡 長さ 5.76 幅 3.2 厚さ 1.1 重さ 23.3 刃角 73.6°	第6回18 第15回4 第29回15 第42回38 第43回3 第46回 厚層 2.4.6 長さ 5.85 幅 4.10 厚さ 1.29 重さ 31.5 刃角 79.5°	8点	4点	S T 2-1点 S T 6-1点 S T 12-1点 S T 17-3点

[VII群石器 a類～d類]

	形 態	特 徴	計測平均	図版番号	長 さ	幅 さ	V層	IE 居 所
a 類		楕円形を有し細身の 肉薄の断面で、両端 が尖状を示すもの。 左右対称で、中央部 で最大印を計る。 縱断面も中央部で は一定の厚みを持ち 両端に對してあるや かに傾斜している。	長さ 8.0 幅 2.0 厚さ 0.6 重き 10.	第11回20				S T 5-1点
b 類		カマボコ形を呈し 両端が尖状を有する もの。 縱断面は円錐をな し中央部が最も早く 両端に傾斜している。 背面の中央部には 棱線が延びし、横断 面も半円形を見せる。 b 面は一次剥離にお おわれ、バブル除去を 加えるだけである。	長さ 14.1 幅 3.05 厚さ 1.35 重き 37.5	第11回21 第27回2				S T 5-1点 S T 10-1点
c 類		二等辺三角形状を 有し、基部が外済的 で先端部は尖状をも つもの。 縱断面は基部から 中央部まで、やや厚 味を持ち尖状部は薄 形になっていく。	長さ 8.8 幅 3.73 厚さ 1.13 重き 40.66	第12回2 第43回1 第31回16				S T 5-1点 S T 17-1点
d 類		尖状部を持ち、欠 損のあるものを本類 とする。 両面調整で両面に 棱線を持つ左右対称 である。本石器の欠 損面は密滅状や形状 から判断して完成品 の中央部と推測した 。		第29回5 第83回 1~3			3点	S T 11-1点

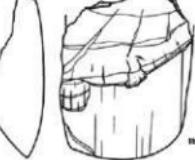
〔 集群石器 a類～e類 〕

	形態	特徴	計測平均	回収場所	Ⅳ層	V層	住居跡
a 類		基部が平坦で尖状部を有する刃部を持つ。 平滑な基部は打面を有するものと切削断面の両者がある。 刃部は尖状部を中心調整され、基部まで両縁辺が調整されるものと、片刃・尖状部と大きさ3通りに分けられる。	住居跡 長さ 7.75 幅 3.62 厚さ 1.55 重さ 47.0 Ⅳ層 長さ 5.80 幅 3.67 厚さ 1.13 重さ 27.45	第12回1 第36回1 第44回22 第44回3 第84回 第2～6 第85回 第1～4 第97回5	10点		S T 5-1点 S T 14-1点 S T 17-2点
b 類		梢円形を有し刃部が丸味を持つものを本群としたが、これらの中でも調理の方法から次の3通りに細別できる。 ①は刃部を形成する先端部だけに調整をもつもの。 ②は先端から片縁に及ぶもの。 ③は全縁辺に調整を有す。 基部は打面を有するものが多く見られる。	住居跡 長さ 7.49 幅 4.01 厚さ 1.25 重さ 40.18 Ⅳ層 長さ 5.89 幅 4.07 厚さ 1.26 重さ 27.45	第17回4 第20回4 第29回4 第34回1 第36回2 第47回2 第47回4 第48回6 第50回4 第50回6 第83回4 第85回 5～9 第86回 1～7 第11回6	11点	1点	S T 5-1点 S T 7-1点 S T 11-1点 S T 13-1点 S T 14-1点 S T 18-3点 S T 19-2点 S K 24-1点
c 類		円形状を有する仲間を本類とした。これらは石器群は次の3形態に細分できる。 ⅣC'類-梢円形 ⅣC'類-不整円形 上記のⅣC'類、ⅣC'類は断面が薄い、ⅣC'類は厚い。この中でもⅣC'類は住居跡と、V層に多い。	住居跡 長さ 5.77 幅 8.64 厚さ 1.53 重さ 40.78 Ⅳ層 長さ 5.79 幅 5.4 厚さ 1.45 重さ 34.8 第11回22 第17回2 第18回1 第20回2 第22回2 第31回1 第34回14 第40回7 第44回4 第84回1 第87回1-6 第105回1	8点	2点		S T 5-1点 S T 6-2点 S T 7-1点 S T 8-1点 S T 12-1点 S T 14-1点 S T 16-1点 S T 17-1点
d 類		横長の削片を素材としている。 両端部が丸く整えられ、バブル除去加工が施えられる。	住居跡 長さ 6.68 幅 7.6 厚さ 1.45 重さ 60 Ⅳ層 長さ 3.89 幅 6.39 厚さ 3.78 重さ 34.6	第50回7 第54回3 第88回 1～3	3点	1点	S T 19-1点
e 類		本類もd類と同様に横長の削片を使用している。 本類の特徴は両端部が尖状的であることからd類と区別した。調整法にも若干の差がある。	住居跡 長さ 5.5 幅 10.3 厚さ 1.55 重さ 95.75 Ⅳ層 長さ 4.77 幅 11.2 厚さ 1.55 重さ 90.3	第15回6 第17回3 第17回5 第93回6 第93回2-4 第94回4 第95回1 第95回2	3点	3点	S T 6-3点 S T 13-1点 S T 8-1点

(猪群石器 f類～ i類・ IX群)

形 茜		特 徴	計測平均	国版番号	Ⅳ層	V層	住 居 路
f 類	7a	基本的には台形状を有する石器を本群とする。これらの中に他の石器や他の軽用品(f+)やビエス・エスキュー的な石器(f-)・切断部をもつ石器(f+)などもふくまれる。いづれもこれららの石器は台形状の角を刃部としている。	住居跡 長さ 5.62 幅 4.2 厚さ 1.17 重さ 41.8 Ⅳ層 長さ 4.82 幅 4.79 厚さ 1.34 重さ 46.38	第11回2 第12回3 第13回4 第14回5 第18回4 第22回23 第22回25 第44回5 第48回3 第94回2 第96回2 第97回1 第97回3 第88回 4・5 第89回 1・7 第90回 8 第91回 1・6 第92回1 第105回 3・4	26.5	3点	ST 4-1点 ST 5-2点 ST 6-2点 ST 8-2点 ST 17-1点 ST 18-1点 SK 1-2点
	7b						
g 類	4a	正方形を有し、平坦な基部を持つ、直角的な刃部を持つもの。正方形に整面を刃部としたコーナー部を刃部としている。 基部は自然面や打面で振面にはループを残す。	長さ 5.91 幅 5.5 厚さ 1.21 重さ 50.1	第11回1 第13回1 第15回3 第27回3 第27回6 第38回2 第95回4		1点	ST 4-1点 ST 5-1点 ST 6-1点 ST 10-2点 ST 15-1点
	4b						
h 類	5a	基部の底盤から意識的に二次加工を加え尖状部を削りしたものの二次加工の側面は刃部近くまでおよぶ。 刃部は、半円状に整形されている。	長さ 6.47 幅 3.91 厚さ 1.49 重さ 44	第92回	2~5	4点	
	5b						
i 類		切り出しがナイフ状を有し底部がいくぶん内湾を示す、細長い尖状があるもの。 本群中では両面加工を主体にしている。 細長で複数の側片を素材とし、上面にボジティブ・バルブを残し、上面中央部の接線は右や右側よりにカーブを描く。	長さ 10.74 幅 3.59 厚さ 1.45 重さ 50.5			2点	
IX 群	a	大形のナイフ状を有する他の基部と尖状部があるもの。 刃部はやや外反する傾斜や尖状部に集中する。 素材は大形の複数側片で上面に自然面や鋸歯面を有するものが多く使用される。 側片の調整は素材の持続性を活用し、片面加工を主体としたものが多数を占める。	住居跡 長さ 10.71 幅 4.05 厚さ 1.51 重さ 60.3 Ⅳ層 長さ 11.2 幅 4.2 厚さ 1.4 重さ 62.0	第14回13 第12回4 第17回6 第34回10 第40回5 第47回6 第55回3 第56回 1・3・4 第97回 1~3	3点	4点	ST 1-1点 ST 5-1点 ST 6-1点 ST 14-1点 ST 16-1点 ST 18-1点

(X群石器a類・Y群石器a類・b類・Z群石器a類・d類)

形 塵		特 徴	回収番号	V層	V層	住 居 路
X群 a類 加	4a  4b 	不整形を有し、欠 損面を持つ石器を本 群とする。 これらの石器は、 各群石器の欠損品。 基部、刃部、両端の 各種欠損面を持つ。 本群石器の中には 意識的つくりだした 欠損面は含まない。	第13回2 第13回3 第20回6 第99回 第43回5 第48回4 第10回4 2・4・5	第98回 3～7 第99回 1～11 第10回4 2・4・5	16点	ST 5～2点 ST 7～1点 ST 17～1点 ST 18～1点 SK 24～1点 SK 11～1点 SK 1～1点
	5a  5b 			2b  2b 		
Z群 a類 第100回1～2、第101回1、第102回1～3 V層 2点 V層 3点 特徴—大形で不定形の形状を呈し、複数の打面を持つ。						
		Y群 b類、第13回4、第101回2、第102回2 ST 5 V層 2点 特徴—断面の薄い不定形状で自然面、節理面を有す。				
	7  7 			1a  1a 		
Z群 a類、第6回1、第17回1、第100回1～3 ST 1～1点 ST 6～1点 V層 2点 特徴—細身の形状と薄影の断面をもつ。刃部の形状は円刃形を 呈し、棒身は両刃形を有す。						
		Y群 b類、第23回、第22回2、第31回4～10回2～4 ST 8～1点 ST 9～1点 ST 12～1点 V層 2点 特徴—尖状的な丸みを持つ基部とやや厚味のある断面図を有す。				
	8a  8b 			2a  2b 		
Z群 c類 第18回4、ST 6～1点 特徴—小形で刃部が片刃を呈する。						
		Y群 d類、第104回1～2 V層 2点 特徴—大形の形状を呈し、円刃部と両刃形の斧身を持つ。				

第4表八幡原No.5遺跡A区出土石器計測表

I群石器

通物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 g	石材	形態	剥離調整	備考
1 1563	第63図13	87-181	V層	2.76	1.8	0.34	1.1	頁岩	I群a類	II, IIIa+R ¹⁻⁴ I~IIIb+R ¹⁻⁴	両端部欠損
2 1836	第63図14	95-185	V層	3.14	41.62	0.5	2	頁岩	I群a類	II, IIIa+R ¹⁻⁴ I~IIIb+R ¹⁻⁴	基部欠損
3 416	第63図15	83-177	V層	2.64	2.26	0.43	1.5	頁岩	I群a類	II, IIIa+R ¹⁻⁴ I~IIIb+R ¹⁻⁴	基部欠損
4 RQ54	第13図5	ST6		4.0	2.7	0.8	3	頁岩	I群b類		
5 RQ90	第29図3	ST11		3.2	2.0	0.4	2	頁岩	I群b類		
6 3700	第31図13	ST13		4.9	3.1	0.8	9	頁岩	I群b類		
7 4451	第62図3	103-186	V層	4.0	2.2	0.6	(4.0)	頁岩	I群b類		基部欠損
8 4603	第11図4	95-177	V層	2.2	(1.9)	0.4	(1.1)	頁岩	I群c類		基部欠損
9 RQ121	第11図5	91-135	V層	1.6	1.1	0.3	0.5	頁岩	I群c類		基部欠損
10 2181	第11図6	103-185	V層	(1.6)	1.4	0.2	(0.5)	頁岩	I群c類	II, IIIb+R ⁴	先端部欠損
11 RQ18	第11図7	87-173	V層	(2.1)	1.9	0.3	(1)	頁岩	I群c類		先端部欠損
12 1027	第62図7	91-177	V層	1.98	1.4	0.5	1	頁岩	I群c類		先端部欠損
13 RQ16	第23図8	87-173	V層	1.6	1.2	0.36	0.5	頁岩	I群c類		
14 RQ30	第22図9	995-177	V層	(1.8)	1.3	0.36	(0.8)	頁岩	I群c類		先端部欠損
15 RQ98	第22図10	91-181	V層	(1.9)	1.98	0.36	(1)	頁岩	I群c類		先端部欠損
16 2397	第22図12	103-171	V層	1.4	1.1	2.98	(0.1)	頁岩	I群c類		基部欠損
17 RQ96	第34図13	ST14		2.4	1.4	0.5	2	頁岩	I群d類		
18 RQ73	第50図5	ST19		5.0	2.4	0.6	1.0	頁岩	I群d類		
19 RQ71	第62図2	99-189	V層	3.6	1.35	0.5	1.0	頁岩	I群d類		
20 RQ132	第46図10	ST18		2.5	1.5	0.4	2.0	頁岩	I群e類		基部欠損
21 RQ89	第63図2	87-181	V層	1.91	(1.24)	0.3	(1.0)	頁岩	I群e類		先端部欠損
22 RQ49	第63図3	95-181	V層	(2.6)	1.48	0.46	(1.0)	頁岩	I群e類		火熱によるハジケ
23 RQ39	第63図4	99-177	V層	(1.83)	(1.22)	0.28	(0.5)	頁岩	I群e類		火熱によるハジケ
24 RQ63	第63図5	103-181	V層	3.05	2.04	0.36	(1.0)	頁岩	I群e類		火熱によるハジケ
25 RQ62	第63図6	99-189	V層	2.23	1.33	0.39	0.5	頁岩	I群e類		基部欠損
26 RQ17	第63図11	91-173	V層	1.32	1.38	0.47	0.2	頁岩	I群e類		
27 RQ102	第62図1	99-193	V層	5.4	(2.3)	0.7	(6.0)	頁岩	I群f類		脚部欠損
28 1443	第63図1	95-181	V層	3.22	(1.96)	0.5	(2.0)	頁岩	I群f類		脚部欠損

II群石器

通物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 g	石材	形態	剥離調整	備考
29 RQ162	第13図5	ST5		5.0	3.0	0.9	9.0	頁岩	II群a類	Ia, IIb+R ¹⁻⁴ IIb+R ¹⁻⁴	
30 3630	第40図8	ST16		2.2	1.7	0.6	2.0	頁岩	II群a類	I~IIIb+R ⁴⁻⁵ II~III+R ⁴	
31 RQ178	第48図8	ST18		4.3	2.6	0.8	8	頁岩	II群a類	I~III+I~IIIb+R ⁷⁻⁸	
32 RQ16	第62図8	87-173	V層	3.2	2.9	0.9	6	頁岩	II群a類		
33 1131	第62図9	91-181	V層	2.7	2.2	0.7	4	頁岩	II群a類		
34 1155	第62図10	91-181	V層	4.2	2.8	0.9	7	頁岩	II群a類	II~IIIb+R ¹⁻⁴ IIb+R ⁷	
35 110	第62図11	93-173	V層	3.4	2.3	0.6	(3.8)	頁岩	II群a類		基部欠損
36 2037	第62図12	103-185	V層	3.0	2.6	0.9	4.0	頁岩	II群a類		
37 4482	第62図13	103-189	V層	3.4	2.5	0.7	4.0	粘質頁岩	II群a類	I, II, IIIa+R ² IIb+R ⁵	節理面有り
38 4612	第62図7	SK4		3.04	2.75	0.56	4	頁岩	II群a類	I~IIIb+R ¹⁻⁴ II, IIIa+R ⁴⁻⁵	節理面有り
39 4559	第34図11	ST14		3.2	2.4	0.5	3.0	頁岩	II群b類	I~IIIb+R ¹⁻⁴	
40 RQ168	第34図12	ST14		2.4	1.4	0.5	2.0	頁岩	II群b類	II~IIIb+R ¹⁻⁴ IIa, IIb+R ¹⁻⁴ IIb+R ¹⁻⁴	
41 9445	第46図11	ST 18		3.8	2.2	0.8	3.0	頁岩	II群b類	I~IIab+R ⁷⁻⁸	
42 1934	第62図14	103-185	V層	2.9	1.6	0.7	2.8	頁岩	II群b類	II~IIIa~I~IIb+R ¹⁻⁴	
43 2449	第62図15	199-193	V層	2.6	1.8	0.7	3.9	頁岩	II群b類	I~IIIb+R ¹⁻⁴ IIIa+R ⁴	
44 1927	第62図16	95-185	V層	3.3	1.7	0.8	4.9	頁岩	II群b類	I~IIIb+R ¹⁻⁴	
45 364	第63図16	83-173	V層	2.65	1.84	0.4	2.0	頁岩	II群b類		
46 RQ91	第36図5	ST15		5.7	4.1	1.1	3.0	頁岩	II群c類	I~IIb+R ⁷⁻⁹	

番号	遺物名	同版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	形態	剥離調整	備考
47	2589	第62回17	100-190	V層	5.4	4	3.4	0.6	13.7	頁岩	Ⅱ群c類	I-Nab+R ⁷⁻⁹
48	1078	第62回18	95-177	V層	3.9	2.6	0.8	8	頁岩	Ⅱ群c類	I-Nab+R ⁷⁻⁹	
49	207	第62回19	95-173	V層	4.2	2.8	0.7	8	頁岩	Ⅱ群c類	I-Na-I-Nb+R ⁷⁻⁹	
50	RQ36	第33回5	ST13		(2.3)	(1.3)	(0.2)	(1.5)	頁岩	Ⅱ群d類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
51	2235	第62回20	99-189	V層	(2.2)	(2.4)	((0.6))	(2.0)	頁岩	Ⅱ群d類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
52	2157	第62回21	103-182	V層	(2.5)	(1.6)	(0.6)	(2.0)	頁岩	Ⅱ群d類	I-Nab+R ⁷⁻⁹	
53	1269	第62回22	99-176	V層	(3.1)	(3.0)	((0.8))	(6.0)	頁岩	Ⅱ群d類	I-Nb+R ⁷⁻⁹ Ia+R ⁷⁻⁹	

Ⅲ群石器

番号	遺物名	同版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	形態	剥離調整	備考
54	2588	第63回17		V層	4.8	1.9	0.9	7.5	頁岩	Ⅱ群a類	Ia+R ⁷⁻⁹ I-IIb+R ⁷⁻⁹	
55	754	第63回19		V層	3.9	1.6	1.03	6	頁岩	Ⅱ群a類	I-IIb+R ⁷⁻⁹ IIab+R ⁷	
56	1175	第63回22		V層	(4.15)	1.76	00.86	(5.5)	頁岩	Ⅱ群a類	Ia+R ⁷⁻⁹	
57	499	第33回23		V層	4.54	1.6	0.48	(3.0)	頁岩	Ⅱ群a類	I-IIa+R ⁷ IIb+R ⁷	
58	4144	第63回11	ST9		4.6	1.7	1.3	9.0	頁岩	Ⅱ群b類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
59	4464	第63回20	103-189	V層	3.5	1.5	0.7	3.0	頁岩	Ⅱ群b類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
60	RQ176	第48回7	ST18		4.9	3.0	0.8	10	頁岩	Ⅱ群c類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹	
61	3105	第63回18	103-173	V層	3.9	3.9	1.1	15	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIa+R ⁷⁻⁹ II-IIb+R ⁷⁻⁹	
62	2474	第63回21	103-189	V層	(7.4)	4.1	1.0	(31.8)	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIa+R ⁷⁻⁹ I-IIb+R ⁷⁻⁹	
63	541	第63回24	91-173	V層	(1.8)	(2.2)	(0.53)	(1.0)	頁岩	Ⅱ群c類	Ia+R ⁷⁻⁹ I-IIb+R ⁷⁻⁹	
64	2390	第64回1	103-173	V層	6.53	3.24	1.08	2.0	頁岩	Ⅱ群c類	IIb+R ⁷⁻⁹	
65	544	第64回2	91-173	V層	5.9	4.85	2.0	41	頁岩	Ⅱ群c類	I-Nb+R ⁷⁻⁹	

Ⅳ群石器

番号	遺物名	同版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	形態	剥離調整	備考
66	374	第64回5	87-177	V層	(7.6)	1.6	0.6	(8.0)	頁岩	Ⅱ群a類	I-IIb+R ⁷ IIb+R ⁷⁻⁹	
67	RQ61	第64回6	103-181	V層	6.8	1.5	0.7	6.5	頁岩	Ⅱ群a類	IIab+R ⁷	
68	2816	第64回3	83-177	V層	(4.3)	2.4	0.5	(5.0)	頁岩	Ⅱ群b類	I-IIb+R ⁴⁻⁶	
69	3117	第64回4	95-173	V層	6.0	1.9	0.4	6.9	頁岩	Ⅱ群b類	I-IIa-IIb+R ⁴⁻⁵	
70	RQ76	第64回7	87-177	V層	6.18	2.0	0.68	11.0	頁岩	Ⅱ群c類	Ia+R ⁵ IIa+R ⁷ II-IIb+R ⁴⁻⁶	
71	RQ152	第64回9	95-181	V層	(4.53)	1.9	0.77	(6)	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁴⁻⁶ IIb+R ⁴	
72	RQ19	第64回10	79-173	V層	6.98	1.8	0.66	8.0	頁岩	Ⅱ群c類	IIab+R ⁷ I-IIb+R ⁴⁻⁶	
73	RQ1	第64回11	87-173	V層	7.81	2.9	0.6	15.0	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁴⁻⁶ I-IIa+R ⁷	
74	3980	第64回12	91-185	V層	5.58	2.34	0.69	8.0	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁴⁻⁶ IIb+R ⁷	
75	RQ50	第65回2	99-181	V層	5.6	2.98	0.55	9.8	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIa+R ⁴⁻⁶ I-IIb+R ⁴⁻⁶	
76	RQ180	第64回13	99-185	V層	3.82	3.44	0.52	6.0	頁岩	Ⅱ群d類	I-IIb+R ⁴⁻⁶ IIa+R ⁴	
77	RQ43	第65回2	95-181	V層	6.04	3.3	0.68	10	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁴⁻⁶ I-IIa+R ⁴⁻⁶	
78	RQ11	第65回5	95-173	V層	5.2	3.08	0.87	15	頁岩	Ⅱ群d類	IIab+R ⁷⁻⁹	
79	1856	第64回8	87-183	V層	(4.15)	1.51	0.45	(2.0)	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁴⁻⁶	
80	4473	第64回14	103-189	V層	(3.22)	2.88	0.36	(4.9)	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIa+R ⁷ IIb+R ⁷ IIb+R ⁴⁻⁶	
81	1342	第65回1	95-177	V層	5.5	2.0	0.58	4	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁷ R ⁸	
82	4532	第65回4	103-187	V層	7.78	3.15	1.1	1.1	頁岩	Ⅱ群c類	I-IIb+R ⁷	

Ⅴ群石器

番号	遺物名	同版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角度	石材	形態	剥離調整	備考
83	RQ151	第29回6	ST11		8.3	4.3	1.3	40	47°	頁岩	V群a類	I-IIab+R ⁷⁻⁹ Nab+R ⁷	
84	RQ128	第38回1	ST15		13.1	5.0	1.9	142	56°	頁岩	V群a類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
85	RQ122	第46回9	ST18		11.9	5.0	2.2	130	60°	頁岩	V群a類	I-IIab+R ⁷⁻⁹	
86	RQ255	第4回14	ST1		9.3	5.0	1.8	100	61°	頁岩	V群b類	I-Nab+R ⁷⁻⁹	
87	RQ233	第27回1	ST18		13.5	4.5	1.7	130	52°	頁岩	V群b類	I-Na-I-IIb+R ⁷⁻⁹	
88	RQ145	第43回7	ST17		10.7	4.7	2.5	121	61°	頁岩	V群b類	I-Nab+R ⁷⁻⁹ Nab+R ⁷⁻⁹	
89	RQ688	第69回1	103-189	V層	9.6	5.0	2.5	105	-	頁岩	V群b類	I-IIab+R ⁷⁻⁹ Nab+R ⁷⁻⁹	

刃部欠損

番号	遺物No	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角度	石材	形態	剝離調整	備考
90	RQ49	第15回1	S T 6		9.4	4.6	1.5	82	54°	頁岩	V群c類	I-Nab+R7~9	
91	RQ67	第69回2	V層	79-173	8.0	4.3	2.1	76	—	頁岩	V群c類	I-Nab-I-II+R7~9	刃部再生
92	RQ56	第69回3	V層	91-189	8.7	4.6	2.3	96	—	頁岩	V群c類	I-IIab+R7~9	刃部再生
93	4066	第70回2	V層	91-181	9.6	5.6	2.4	125	—	頁岩	V群c類	I-IIab+R7~9	刃部、基部、欠損
94	RQ124	第71回1	V層	103-189	8.77	4.53	1.7	75	109°	頁岩	V群c類	I-IIab-I-IIb+R7~9	刃部再生
95	4571	第36回6	S T 15		7.6	4.2	1.2	35	43°	頁岩	V群d類	I-IIb-Nab+R7~9	
96	RQ92	第67回3	V層	103-173	8.8	4.8	1.9	56	37°	頁岩	V群d類	I-IIb-Nab+R7~9	
97	RQ107	第16回3	S T 6		8	4.9	1.4	70	64°	頁岩	V群e類	I-Nab+R7~9	
98	RQ41	第33回4	S T 13		7.5	4.3	1.6	60	61°	頁岩	V群e類	I-IIab+R7~9	
99	RQ134	第25回1	S T 9		13.0	6.1	2.9	210	77°	頁岩	V群f類	I-IIb-III+R7~9	
100	RQ87	第65回6	V層	95-177	11.1	4.8	1.9	121	82°	頁岩	V群f類	I-IIb+R7~9-Na+R7~9	バブル除去
101	RQ114	第66回1	V層	95-177	13.0	4.5	2.2	130	59°	頁岩	V群f類	I-Nab+R7~9	
102	RQ35	第67回1	V層	99-177	6.0	4.5	1.9	57	58°	頁岩	V群f類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	
103	RQ44	第70回1	V層	99-177	8.6	4.1	2.0	69	62°	頁岩	V群f類	I-II-Na+R7~9	
104	1716	第72回2	V層	99-177	9.3	4.7	2.2	(67)	—	頁岩	V群g類	I-IIab+R7~9	刃部欠損
105	1599	第72回2	V層	91-189	8.0	5.0	2.1	83	68°	頁岩	V群g類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	刃部欠損
106	734	第72回3	V層	97-178	7.0	4.5	2.4	69	70°	頁岩	V群g類	I-Nab+R7~9	刃部欠損
107	3034	第67回2	V層	95-177	(8.6)	4.8	(1.5)	(56)	54°	頁岩	V群h類	I-IIb+R7~9	刃部欠損
108	3978	第70回3	V層	91-185	8.3	3.8	1.7	60	62°	頁岩	V群h類	I-IIb+R7~9	刃部欠損
109	171	第73回1	V層	83-173	7.2	4.1	1.5	55	53°	頁岩	V群h類	I-II-Na+R7~9	
110	1682	第73回2	V層	91-185	9.1	4.3	1.6	55	35°	頁岩	V群h類	I-II-Na+R7~9	
111	1133	第73回3	V層	91-181	7(1)	4.0	(1.5)	(47)	—	頁岩	V群h類	I-II-Na+R7~9	刃部欠損
112	RQ65	第74回1	V層	99-189	15.3	7.5	2.9	411	95°	変成岩	V群i類	面剥離調整	
113	RQ127	第74回2	V層	95-193	11.6	8.9	3.3	115	60°	泥灰岩	V群i類	面剥離調整	
114	639	第75回2	V層	87-177	8.1	4.7	1.5	58	48°	頁岩	V群j類	I-Nab+R7~9	
115	RQ64	第75回2	V層	99-189	9.3	7.4	2.2	131	—	流紋岩	V群j類	Na-Ib+R7~9	

V群石器

番号	遺物No	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角度	石材	形態	剝離調整	備考
116	RQ27	第4回12	S T 1		7.5	4.0	1.8	58	33°	頁岩	V群a類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	
117	RQ99	第16回6	S T 6		8.0	2.9	1.6	50	112°	頁岩	V群a類	I-Nab-I-IIa+R7~9	
118	RQ95	第31回3	S T 12		6.9	3.5	1.3	40	75°	頁岩	V群a類	I-II-Na+R7~9	
119	RQ94	第33回1	S T 13		8.2	4.3	1.6	60	75°	頁岩	V群a類	I-IIab+R7~9	
120	RQ131	第34回9	S T 14		9.5	4.7	1.9	80	77°	頁岩	V群a類	I-Nab+R7~9	
121	RQ118	第42回39	S T 17		7.6	4.3	1.7	50	68°	頁岩	V群a類	I-Na-Na+R7~9-Na+R7~9	
122	RQ144	第46回13	S T 18		8.2	3.5	1.6	50	64°	頁岩	V群b類	I-Nab+R7~9	
123	RQ153	第46回12	S T 18		8.2	3.5	1.3	30	—	頁岩	V群b類	I-Na+R7~9	
124	RQ32	第68回2	V層	99-177	7.4	4.5	2.0	62.5	38°	頁岩	V群b類	Na-I-Nab+R7~9	
125	RQ31	第68回3	V層	95-177	9.6	5.0	2.5	105	65°	頁岩	V群b類	I-Nab+R7~9	
126	4607	第19回2	S T 4		6.97	3.15	1.5	30	—	頁岩	V群b類	I-Nab+R7~9	
127	RQ116	第20回1	S T 7		7.3	4.1	1.7	60	84°	頁岩	V群c類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	バブル除去
128	RQ72	第66回3	V層	87-173	6.3	4.3	2.0	40	93°	頁岩	V群c類	Na-Na-I-Nab+R7~9	バブル除去
129	RQ12	第77回3	V層	99-173	5.1	3.2	1.6	30	63°	頁岩	V群c類	I-Nab+R7~9	
130	471	第78回6	V層	83-173	5.5	4.0	1.56	31	76°	頁岩	V群c類	I-Nab+R7~9-II-Na+R7~9	
131	RQ76	第4回11	S T 1		7.2	3.75	1.8	—	89°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	
132	3907	第15回2	S T 6		7.9	3.1	1.4	35	—	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
133	RQ111	第15回5	S T 6		6.5	4.2	1.5	50	101°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
134	RQ106	第16回1	S T 6		9	4.3	1.5	50	53°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
135	RQ104	第16回2	S T 6		8	4.4	1.1	40	81.5°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
136	RQ105	第16回5	S T 6		6.5	4.1	1.9	40	84°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
137	4377	第18回24	S T 7		4.8	3.1	1.0	15	109°	頁岩	V群d類	Ib+R7~9-II-Nab+R7~9	
138	RQ149	第18回25	S T 7		7.5	4.1	1.2	42	53.5°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9	
139	4280	第20回7	S T 7		8.8	3.9	1.6	60	70.5°	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	
140	RQ81	第27回5	S T 10		6.9	3.7	1.5	40	—	頁岩	V群d類	I-Nab+R7~9-Na+R7~9	

番号	造物番号	開削番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ kg	刃角度	石材	形態	剥離調整	備考
H1	3479	第31回12	S T13		4.5	2.9	1.0	20	—	頁岩	V群 d類	I-N+R ⁺ I-Bb+R ⁺	
H2	1718	第33回2	S T13		6.0	3.7	1.9	30	—	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺	
H3	2629	第33回3	S T35		6.6	3.9	1.5	42	—	頁岩	V群 d類	I-Na-I-Nb+R ⁺	
H4	4580	第36回6	S T15		7.2	3.5	1.2	30	83'	頁岩	V群 d類	I-Na-I-Nb+R ⁺	
H5	RQ148	第36回8	S T15		8.5	4.0	1.2	50	73'	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H6	RQ147	第47回3	S T18		7.0	4.9	1.5	60	80*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H7	RQ78	第66回2	95-177	V層	8.4	4.2	1.3	48	49*	頁岩	V群 d類	I-B-N+R ⁺ I+B ⁺	
H8	2857	第68回1	95-177	V層	8.5	5.4	1.3	64	93*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H9	4602	第75回3	95-177	V層	6.2	4.2	1.3	45	92*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+N+R ⁺	
H10	4301	第75回4	99-189	V層	6.1	3.9	1.6	40	81*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺	
H11	546	第77回5	91-173	V層	5.7	3.14	0.74	17	106*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺	
H12	2536	第77回6	103-189	V層	6.4	3.6	1.0	19	76*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I-N+R ⁺	
H13	532	第77回7	79-173	V層	6.18	1.2	1.2	30	83*	頁岩	V群 d類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H14	RQ 9	第78回1	95-173	V層	7.48	4.4	1.3	46	67*	頁岩	V群 d類	I-B-N+R ⁺ I+B ⁺	
H15	554	第78回2	91-173	V層	6.42	3.22	1.32	28	80*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H16	1369	第78回3	95-177	V層	6.08	3.4	1.3	24	56*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H17	1697	第78回4	99-177	V層	6.7	3.3	1.8	42	76*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	
H18	543	第78回5	91-173	V層	6.4	3.88	1.6	30	63*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+N+R ⁺	
H19	214	第79回1	99-173	V層	5.82	3.66	1.36	29	54*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+N+R ⁺	
H20	796	第79回2	99-177	V層	6.06	3.4	1.0	19	37*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I+N+R ⁺	
H21	1073	第79回3	95-177	V層	8.32	4.04	1.34	46	54*	頁岩	V群 d類	I-B-N+R ⁺ I+N+R ⁺	欠損面有り
H22	516	第79回4	91-173	V層	6.9	3.7	1.6	37	52*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺	
H23	363	第79回5	95-173	V層	(7.36)	3.22	1.34	43	(39)*	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺	
H24	2244	第79回6	83-181	V層	6.3	3.62	1.14	34	52*	頁岩	V群 d類	I-B-N+R ⁺ I-N+R ⁺	
H25	4614	第10回2	SD,2		7.8	4.84	2.1	52	—	枕頭質	V群 d類	N+R ⁺ I-Nb+R ⁺ I-N+R ⁺	
H26	4615	第10回3	S K25		5.98	4.12	2.1	46	—	頁岩	V群 d類	I-Nb+R ⁺ I-N+R ⁺	
H27	3951	第40回6	S T16		7.1	4.1	1.2	40	—	頁岩	V群 e類	I-Nb+R ⁺	
H28	4051	第41回1	S T18		7.1	4.6	1.2	50	—	頁岩	V群 e類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	欠損面有り
H29	4021	第40回9	S T16		6.6	4.2	1.2	40	96*	頁岩	V群 e類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺ I+B ⁺	刃部欠損
H30	RQ135	第29回14	S T12		4.8	2.9	0.9	10	47*	頁岩	V群 f類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H31	2701	第34回2	S T13		4.9	2.6	0.9	10	66*	頁岩	V群 f類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H32	RQ115	第20回6	S T 7		6.7	4.2	1.3	32	87*	頁岩	V群 g類	I-B-N+R ⁺ I-N+R ⁺	
H33	4186	第23回12	S T 9		6.2	4.2	0.9	30	44*	頁岩	V群 g類	I-Nb+R ⁺ I-N+R ⁺	
H34	559	第80回1	87-177	V層	6.3	4.4	1.3	30	—	頁岩	V群 g類	I-Nb+R ⁺	
H35	1904	第80回2	103-181	V層	6.5	4.22	1.16	37	67*	頁岩	V群 g類	I-Nb+R ⁺	
H36	1381	第80回3	99-177	V層	4.8	2.92	0.92	15	49*	頁岩	V群 g類	I-Nb+R ⁺	
H37	RQ24	第50回9	S T 19		8.3	4.0	1.4	50	—	頁岩	V群 h類	I-Nb+R ⁺	
H38	RQ125	第71回2	91-177	V層	7.75	4.0	1.7	60	86*	頁岩	V群 h類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H39	RQ34	第71回3	91-189	V層	8.9	4.2	1.7	69	44*	頁岩	V群 h類	I-Nb+R ⁺ I-N+R ⁺	バルブ除去
H40	2078	第80回4	95-189	V層	5.56	3.45	1.04	22	90*	頁岩	V群 h類	I-Nb+R ⁺	
H41	2211	第80回5	103-185	V層	6.12	3.7	1.23	34	74*	頁岩	V群 h類	I-Nb+R ⁺ I-V+R ⁺	
H42	RQ 7	第12回5	S T 5		5.2	2.9	1.3	20	46.5*	頁岩	V群 i類	I-Nb+R ⁺	
H43	RQ17	第16回4	S T 6		5.9	3.3	1.5	30	87.5*	頁岩	V群 i類	I-Nb+R ⁺	
H44	4155	第25回3	S T 9		4.5	3.5	1.5	21	—	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺	
H45	RQ19	第48回2	S T18		7.2	4.2	1.2	60	80*	頁岩	V群 j類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H46	RQ88	第6回17	S T 2		7.0	4.5	1.6	70	59*	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺	
H47	RQ165	第20回3	S T 7		7.3	3.8	1.7	51	86*	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H48	4078	第23回12	S T 9		7.7	5.1	1.4	55	—	頁岩	V群 j類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H49	2978	第25回10	S T10		7.2	4.1	1.5	50	—	頁岩	V群 j類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H50	RQ82	第21回4	S T10		7.0	3.8	1.8	50	98*	頁岩	V群 j類	I-N+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H51	RQ120	第43回2	S T17		7.8	3.8	1.8	50	98*	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H52	RQ146	第43回4	S T17		6.2	4.5	1.3	30	48*	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H53	4297	第44回1	S T17		7.1	5.1	1.5	60	58*	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	
H54	RQ141	第47回5	S T18		7.8	3.9	1.1	40	—	頁岩	V群 j類	I-Nb+R ⁺ I-Nb+R ⁺	

通 番 号	遺物No	岡版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角 度	石 材	形態	刺離調整	備 考
15	RQ140	第48回1	S T 18		6.9	4.1	2.0	50	91.5	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9}	
16	RQ22	第50回1	S T 19		4.5	3.0	1.0	20	—	石 英	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+I~Nb+R ^{7~9}	
17	4164	第76回1	91~189	V層	6.0	4.2	1.9	55	—	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9} Ia+Ia+R ^{8~9}	
18	RQ14	第76回3	99~173	V層	6.74	4.0	1.5	40	61.5	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ia~Nb+R ^{7~9}	
19	RQ123	第76回5	103~189	V層	7.7	4.1	1.52	45	38*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9}	
20	4177	第77回1	91~189	V層	6.7	4.6	1.6	52	67	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ia~Nb+R ^{7~9}	
21	4349	第77回4	99~189	V層	4.5	3.4	1.26	23	84*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ia~Nb+R ^{7~9} Na+Ia~Nb+Ia+R ^{8~9}	
22	697	第80回6	95~177	Ⅳ層	3.78	2.84	1.03	13	62*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ia~Nb+R ^{7~9}	
23	619	第80回7	87~177	Ⅳ層	4.68	3.95	1.2	25	79*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{8~9} Ib+R ^{7~9}	
24	2275	第80回8	103~181	Ⅳ層	5.9	4.66	1.2	42	—	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Na~Ib~Nb+R ^{7~9}	
25	509	第81回1	91~173	Ⅳ層	6.14	3.9	1.33	38	66*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{8~9}	
26	414	第81回2	83~177	Ⅳ層	6.24	4.62	1.33	44	89*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9} Na+R ^{8~9}	
27	2266	第81回3	103~177	Ⅳ層	6.67	4.32	1.8	55	72*	頁 岩	Ⅴ群 j 類	Ia~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{8~9}	バブル除去
28	1846	第81回4	99~181	Ⅳ層	5.9	4.8	1.6	61	—	軟質頁岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9}	
29	1091	第81回5	95~177	Ⅳ層	8.3	4.9	2.9	92	—	軟質頁岩	Ⅴ群 j 類	Ib~Nb+R ^{7~9}	
30	RQ154	第6回18	S T 2		6.4	3.0	1.1	26	66.5*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb~Ia+R ^{7~9}	
31	RQ103	第15回4	S T 6		5.6	2.9	0.8	20	67*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb~I~Nb+R ^{7~9}	
32	3539	第29回15	S T 12		5.0	2.8	1.9	20	82*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{7~9}	
33	4314	第42回3	S T 17		5.0	3.1	1.0	20	79*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9} I~Nb+R ^{7~9}	
34	RQ169	第43回3	S T 17		5.6	4.3	1.1	40	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
35	4357	第43回6	S T 17		6.1	3.1	0.7	20	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
36	2756	第76回2	79~173	V層	6.45	4.9	2.0	72	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
37	3082	第76回4	95~177	V層	7.0	3.3	1.2	30	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{7~9}	
38	RQ33	第76回6	99~177	V層	8.0	4.4	1.2	63	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
39	4526	第77回2	103~181	V層	6.3	2.9	0.9	23	95*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{8~9}	
40	14	第81回6	87~173	Ⅳ層	6.1	3.56	1.7	42	93*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{7~9}	折断面有り
41	1707	第82回1	99~181	Ⅳ層	3.8	3.8	1.3	34	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
42	2176	第82回2	103~181	Ⅳ層	3.5	3.28	1.47	40	77*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb~I~Nb+R ^{7~9}	
43	1295	第82回3	91~181	Ⅳ層	5.56	3.48	1.56	33	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{8~9} Nb+R ⁹	折断面有り
44	2331	第82回4	99~189	Ⅳ層	5.24	2.78	1.2	26	89*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb+R ^{7~9}	
45	4563	第82回5	87~185	Ⅳ層	5.44	3.6	0.9	22	59*	頁 岩	Ⅴ群 k 類	Ia~I~Nb+R ^{7~9}	
46	410	第82回6	83~177	Ⅳ層	5.5	3.95	0.74	20	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	Iab+R ^{7~8}	
47	1909	第82回7	103~181	Ⅳ層	5.86	3.42	1.52	35	—	頁 岩	Ⅴ群 k 類	I~Nb~I~Nb+R ^{7~9}	

Ⅶ群石器

通 番 号	遺物No	岡版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形態	刺離調整	備 考
28	RQ 6	第11回20	ST5		8.0	2.0	0.6	10	頁 岩	Ⅵ群 a 類	Iab~Nb+R ^{4~6}	
29	RQ74	第11回21	ST 5		10.7	3.4	1.6	50	頁 岩	Ⅵ群 b 類	Ib~Nb+R ^{7~8}	
30	RQ86	第27回2	ST10		8.1	2.7	1.1	25	頁 岩	Ⅵ群 b 類	I~Nb+R ^{7~9} Ia+R ^{8~9}	
31	RQ80	第128回2	ST 5		8.7	3.8	1.0	40	頁 岩	Ⅵ群 c 類	I~Nb~I~Nb+R ^{7~9}	
32	RQ50	第43回1	ST17		10.0	4.2	1.1	50	頁 岩	Ⅵ群 c 類	Iab+R ^{7~9} Ia+R ^{8~9}	
33	RQ116	第31回16	ST12		7.7	3.2	1.3	32	頁 岩	Ⅵ群 c 類	I~Nb+R ^{7~9}	
34	RQ21	第29回5	ST11		(7.1)	4.3	1.7	(60)	頁 岩	Ⅵ群 d 類	I~Nb+R ^{7~9}	
35	2575	第63回1	103~185	V層	(7.4)	4.0	1.8	(49)	頁 岩	Ⅵ群 d 類	I~Nb+R ^{7~9} I~Nb+R ^{7~9}	欠損面有り
36	RQ29	第83回2	95~177	V層	(6.0)	3.0	1.26	(21)	頁 岩	Ⅵ群 d 類	I~Nb+R ^{7~9} I~Nb+R ^{7~9}	欠損面有り
37	RQ53	第83回3	91~189	V層	(6.05)	3.84	1.3	(34)	頁 岩	Ⅵ群 d 類	Iab+R ^{7~9}	欠損面有り

Ⅷ群石器

通 番 号	遺物No	岡版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形態	刺離調整	備 考
28	2956	第128回1	ST 5		9.6	6.30	1.0	58	頁 岩	Ⅵ群 a 類	Ia~I~Nb+R ^{7~9}	
29	4539	第36回1	ST14		7.0	3.5	1.5	40	頁 岩	Ⅵ群 a 類	I~Nb+R ^{7~9}	
30	4307	第44回2	ST17		6.7	3.7	1.5	40	頁 岩	Ⅵ群 a 類	I~Nb+R ^{7~9}	

番号	造物名	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角 度	石材	形態	刺離調整	備考
26	4319	第44回3	S T 17		7.2	4.3	1.5	50		頁岩	礫群a類	I~IIab+Nb+R ^{7~9}	
27	2233	第84回2	99~189	V層	5.5	3.7	1.14	19		頁岩	礫群a類	Ib+R ^{1~2} +R ^{7~9}	
28	1598	第84回3	99~181	V層	6.6	4.85	1.7	49		頁岩	礫群a類	Ib~IIb+R ^{7~9}	
29	422	第84回4	83~177	V層	5.54	3.7	0.96	26		頁岩	礫群a類	Ib~IIb+R ^{7~9}	
25	783	第84回5	95~177	V層	5.68	5.05	0.96	30		頁岩	礫群a類	Ib~IIb+R ^{7~9}	切削面有り
26	183	第84回6	91~173	V層	5.65	3.42	1.25	23		頁岩	礫群a類	Ib+R ^{3~4} +Nb+R ^{7~9}	
27	1862	第85回1	103~181	V層	5.86	3.56	1.3	22		頁岩	礫群a類	I~IIab+R ^{7~9}	
28	156	第85回2	83~173	V層	(5.78)3.5	1.3	(25)			頁岩	礫群a類	I~IIa+R ^{7~9}	欠損面有り
26	472	第85回3	83~173	V層	5.0	2.89	0.68	11		頁岩	礫群a類	Ib+R ^{3~4} , Nb+R ⁷	切削面有り
29	459	第85回4	91~173	V層	5.7	3.0	0.54	11		頁岩	礫群a類	Ib+R ^{3~4} , Nb+R ⁷	
25	2700	第97回5	87~173	V層	6.76	3.04	1.45	25		頁岩	礫群a類	I~IIab+R ^{7~9} , Ia+R ^{7~9}	
22	3678	第17回4	S T 6		7.8	4.9	1.5	70		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9} , Ia+R ^{7~9}	
23	RQ116	第20回4	S T 7		5.6	2.5	1.7	10		頁岩	礫群b類	Ib~IIb+R ^{3~4} Ia+R ⁷	
24	3619	第29回4	S T 11		8.3	3.1	1.0	38		頁岩	礫群b類	Ib+R ^{7~9}	
25	RQ150	第34回1	S T 13		(8.0)	5.8	0.8	(49)		頁岩	礫群b類	I~IIab+R ^{7~9}	
26	3425	第36回2	S T 14		6.8	2.7	1.2	20		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9} , IIa+R ⁷	欠損面有り
27	4331	第47回2	S T 18		5.4	4.2	1.1	30		頁岩	礫群b類	Ib+R ^{3~4} , I~IIa+R ^{7~9}	
28	RQ171	第47回4	S T 18		6.4	4.3	0.7	30		頁岩	礫群b類	Iab+R ^{7~8}	バルブ除去
29	RQ175	第48回6	S T 18		8.4	4.0	0.7	20		頁岩	礫群b類	Ia+R ^{1~2} +Ib+R ³	
26	RQ83	第50回4	S T 19		7.3	4.9	1.8	70		頁岩	礫群b類	Iab+R ^{7~9} , I~IIb+R ^{7~9}	
29	2938	第60回6	S T 19		7.7	4.4	1.7	55		頁岩	礫群b類	I~IIab+R ^{7~9}	
22	4512	第63回4	103~189	V層	5.15	4.36	1.18	27		頁岩	礫群b類	I~IIab+R ^{7~9} , IIa+R ⁷	
26	1310	第85回5	91~181	V層	5.04	3.1	1.32	17		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9}	
29	282	第85回6	95~173	V層	4.3	3.14	0.8	10		頁岩	礫群b類	I~IVb+R ^{7~9}	
25	357	第85回7	87~173	V層	6.24	2.88	0.75	16		頁岩	礫群b類	I~IVb+R ^{7~9} , I~IIa+R ^{7~9}	
26	336	第85回8	91~173	V層	5.75	3.8	1.1	24		頁岩	礫群b類	I~IIIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
27	1251	第95回5	99~177	V層	4.45	3.56	0.8	15		頁岩	礫群b類	I~IIIb+R ^{7~9}	
26	230	第86回1	99~173	V層	5.7	4.46	1.5	38		頁岩	礫群b類	I~IVb+R ^{7~9} , IIa+R ⁷	
26	1008	第86回2	91~177	V層	6.6	3.95	1.92	52		頁岩	礫群b類	I~IVb+R ^{7~9} , IIa+R ⁷	
27	212	第86回3	S K 28		6.66	5.1	1.7	57		頁岩	礫群b類	I~IVb+R ^{7~9}	
27	544	第86回4	91~173	V層	5.3	3.78	0.8	18		頁岩	礫群b類	Ib+R ^{3~4} , IIb+R ^{7~9}	
22	1170	第86回5	95~177	V層	5.5	3.9	1.3	24		頁岩	礫群b類	Ib+R ^{3~4} , Nb+R ⁷	
23	181	第86回6	91~173	V層	6.58	4.5	1.4	49		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
27	2284	第86回7	99~189	V層	(4.1)	3.35	1.04	(12)		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9} , I~IIa+R ^{7~9}	
25	4611	第10回6	S K 24		5.6	3.5	1.4	30		頁岩	礫群b類	I~IIb+R ^{7~9}	折れ面有り
27	RQ156	第11回2	S T 5		9.6	3.0	1.7	58		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	
27	3891	第11回1	S T 6		5.8	4.1	1.3	32	74*	頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	
27	3912	第18回1	S T 6		5.4	4.8	2.3	60		頁岩	礫群c類	Ia~IIb+R ^{7~9}	
25	RQ164	第20回2	S T 7		5.0	4.8	1.8	48	75.5*	頁岩	礫群c類	I~IVb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	欠損面有り
26	2709	第23回2	S T 8		6.3	4.5	1.5	40		頁岩	礫群c類	I~IVb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
26	3990	第31回1	S T 11		6.0	4.7	1.3	40		頁岩	礫群c類	I~IVb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
22	3614	第34回14	S T 14		4.0	3.4	1.3	20		頁岩	礫群c類	I~IVb+R ^{7~9}	
25	3985	第40回7	S T 16		4.8	4.7	1.4	39		頁岩	礫群c類	Ib+R ^{3~4} , IIb+R ^{7~9}	
24	4271	第44回4	S T 17		5.0	4.9	1.2	30		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9} , IIa+R ^{7~9}	
25	RQ55	第83回5	95~189	V層	6.14	6.2	2.3	7.6	43*	頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
26	RQ 5	第84回1	83~173	V層	6.48	4.96	1.58	56	66*	頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
25	1338	第87回1	95~177	V層	5.46	5.2	1.95	54		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	
26	2190	第87回2	103~177	V層	4.9	4.46	1.0	26		頁岩	礫群c類	I~IVb+R ^{7~9} , IIa+R ^{7~9}	
26	1070	第87回3	95~187	V層	3.54	3.32	1.26	15		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9}	
26	2259	第87回4	103~177	V層	5.9	6.2	1.4	50		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	
26	1315	第87回5	91~181	V層	4.38	5.0	1.6	32		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	
26	286	第87回6	99~173	V層	(4.8)	4.98	1.0	(20)		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	ハジケ面有り
26	135	第87回7	91~173	V層	5.34	4.9	1.54	41		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9}	欠損面有り
26	167	第87回8	83~173	V層	5.8	4.84	1.84	41		頁岩	礫群c類	I~IIb+R ^{7~9} , IIb+R ^{7~9} , R ³	

番号	遺物名	同様番号	出土地名	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃 角度	石	材	形態	剥離調整	備考
25	第46回1	S K 1			6.15	4.4	1.92	55		頁岩	複雑e類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
26	RQ84	第50回7	S T 19		7.8	4.2	1.2	20		頁岩	複雑d類	I-Ba+I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
27	RQ126	第59回3	103-189	V層	5.57	11.0	1.7	100		頁岩	複雑d類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
28	612	第68回1	87-177	IV層	3.48	5.53	1.13	22		頁岩	複雑d類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
29	1135	第68回2	91-181	IV層	4.7	6.88	1.55	51		頁岩	複雑d類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
30	1710	第68回3	99-181	IV層	3.5	6.8	1.1	31		頁岩	複雑d類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
31	RQ108	第15回6	S T 6		10.1	4.9	1.3	60		頁岩	複雑e類	I-Nb+R ⁷⁻⁸		
32	RQ136	第17回3	S T 6		8.4	4.5	1.6	68	65°	頁岩	複雑e類	I-Ba+Na+R ⁷⁻⁸		
33	RQ100	第17回5	S T 6		11.4	5.0	1.5	100	59°	頁岩	複雑e類	I-Ba+I-Ba+R ⁷⁻⁸		
34	2866	第22回24	S T 8		11.8	5.9	1.6	125		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
35	RQ70	第33回6	S T 13		11.657.8	1.8	155			頁岩	複雑e類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
36	RQ39	第93回2	99-177	V層	5.0	9.9	1.2	58		頁岩	複雑e類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
37	4447	第93回3	83-181		3.35	7.22	1.0	28		頁岩	複雑e類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸ I-Na+R ⁷⁻⁸		
38	RQ59	第93回4	103-177	V層	5.35	12.6	1.6	86		頁岩	複雑e類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
39	1031	第94回4	95-177	IV層	5.68	13.34	1.72	120		頁岩	複雑e類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
40	141	第95回1	95-181	IV層	4.7	10.3	1.7	100		頁岩	複雑e類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
41	2113	第95回2	163-181	IV層	3.93	9.98	1.24	51		頁岩	複雑e類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
42	RQ155	第11回2	S T 4		4.7	4.2	1.2	10		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
43	RQ157	第12回3	S T 5		6.7	4.9	1.8	30		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
44	RQ158	第12回6	S T 5		6.3	6.5	1.5	70		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
45	3866	第18回2	S T 6		4.5	3.8	0.7	11		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
46	3682	第18回4	S T 6		3.4	2.0	0.9	3		頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸		
47	RQ129	第22回23	S T 6		(4.6)(2.2)(0.6)	110				頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸		
48	2823	第22回25	S T 8		4.0	3.5	0.9	19		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
49	4267	第44回5	S T 17		6.1	5.5	0.9	30		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
50	RQ172	第48回3	S T 18		4.1	3.5	1.6	10		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
51	3066	第94回2	99-177	V層	6.5	5.8	1.84	71		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
52	3008	第94回2	95-177	V層	6.0	5.35	1.34	41		軟質頁岩	複雑f類	I-[Ba+R ⁷⁻⁸] Na+R ⁷⁻⁸		
53	2434	第94回4	99-193	V層	4.72	4.45	8.46	27		頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ I-a+R ⁷⁻⁸		
54	1014	第98回4	91-177	IV層	6.62	7.21	1.9	71		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
55	303	第98回5	87-173	IV層	4.9	5.13	1.46	38		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
56	1034	第98回1	95-177	IV層	6.8	7.18	2.7	141		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
57	1910	第98回2	99-185	IV層	5.2	4.4	1.0	26		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
58	676	第89回3	91-177	IV層	6.04	4.7	1.3	45		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
59	1215	第89回4	99-177	IV層	7.0	5.55	1.45	51		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
60	323	第89回5	99-173	IV層	5.66	4.12	0.98	27		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
61	563	第89回6	79-173	IV層	4.14	3.62	1.1	18		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
62	321	第89回7	99-173	IV層	5.0	4.1	1.34	25		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
63	17	第91回1	87-173	IV層	4.84	4.08	1.3	19		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
64	424	第91回2	83-177	IV層	5.15	4.64	1.1	21		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
65	645	第91回3	87-177	IV層	5.35	4.7	1.7	39		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
66	643	第91回4	87-177	IV層	4.4	3.55	1.35	29		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
67	1421	第91回5	91-185	IV層	3.1	2.45	0.75	5		頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
68	1720	第91回6	99-173	IV層	3.9	(5.0)	1.3	26		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		折れ面有り
69	761	第91回7	99-177	IV層	3.28	4.05	1.1	19		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
70	1680	第91回8	95-185	IV層	4.9	7.04	1.95	72		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
71	304	第91回1	87-173	IV層	5.9	4.4	1.3	49		頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
72	670	第91回2	91-177	IV層	6.74	4.8	0.96	35		頁岩	複雑f類	I-Nb+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
73	1197	第91回3	95-177	IV層	5.45	7.74	2.04	91		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
74	65	第91回4	87-173	IV層	4.0	6.4	1.2	35		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		
75	2302	第91回5	103-181	IV層	4.4	6.2	1.7	52		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
76	1190	第91回6	95-177	IV層	4.1	5.0	1.2	22		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸		
77	1935	第92回1	103-185	IV層	8.5	8.48	2.7	250		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ I-Ba+R ⁷⁻⁸		
78	181	第93回1	91-173	IV層	4.65	5.2	1.2	22		頁岩	複雑f類	I-Ba+R ⁷⁻⁸ Na+R ⁷⁻⁸		

形 物 名	遺物No.	国版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形 態	測 量	調 整	備 考
35	2175	第97回3	103-181	V層	9.3	5.2	1.75	85	頁岩	薄群f類	B-Nb+R ¹ R ² I+R ⁷⁻⁹		
35	4680	第102回3	S K 1		6.46	4.92	1.74	70	頁岩	薄群f類	I-Na-I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	4609	第102回4	S K 1		(6.08)5.05	1.28	(33)		頁岩	薄群f類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	2660	第11回1	S T 4		5.3	4.6	1.0	30	頁岩	薄群g類	I-Nb-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	RQ17	第13回1	S T 4		6.5	5.8	1.4	61	頁岩	薄群g類	I-Na+R ¹⁻⁹ Nb+R ⁹		
35	3901	第15回3	S T 6		7.8	5.6	1.3	80	頁岩	薄群g類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	2876	第27回3	S T 10		4.3	4.4	1.0	22	頁岩	薄群g類	Nb+R ¹⁻⁹ Na-I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	2844	第27回6	S T 10		6.4	7.5	1.0	60	頁岩	薄群g類	Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	3359	第38回2	S T 15		5.6	5.8	1.1	42	ナ-ト	薄群g類	Iab Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	3034	第95回4	95-177	V層	5.5	5.2	1.7	56	頁岩	薄群g類	I-Nb+R ¹⁻⁹ I+R ⁷⁻⁹		
35	656	第92回2	99-177	V層	9.0	4.65	2.36	92	頁岩	薄群h類	Iab+R ⁷⁻⁹		
35	1890	第92回3	99-185	V層	5.7	3.2	1.8	15	頁岩	薄群h類	I+R ¹⁻⁹ Ilb+R ¹⁻⁹ Nb+R ¹⁻⁹		
35	169	第92回4	83-173	V層	4.7	2.94	0.84	11	頁岩	薄群h類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	2340	第92回5	103-181	V層	6.48	4.87	0.98	22	頁岩	薄群h類	Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	1502	第98回1	99-177	V層	9.48	3.48	1.4	36	頁岩	薄群i類	Ia-1-Nb+R ¹⁻⁹ Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	721	第98回2	99-177	V層	12.0	3.7	1.5	65	頁岩	薄群i類	Iab Ilb+Nb+R ⁷⁻⁹		

IX群石器

形 物 名	遺物No.	国版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形 態	測 量	調 整	備 考
35	RQ74	第4回13	ST1		12.6	4.1	1.8	30	頁岩	瓦群a類	Ilb+R ⁷⁻⁹ Ia+R ⁸		
35	RQ210	第12回4	ST5		10.3	3.8	1.4	50	頁岩	瓦群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	RQ163	第17回6	ST6		8.1	3.8	1.6	50	頁岩	瓦群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	RQ142	第34回10	ST14		11.2	3.7	1.5	52	頁岩	瓦群a類	Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	RQ143	第40回5	ST16		6.7	5.0	1.3	100	頁岩	瓦群a類	I-II-Nb+I-IIa+R ⁷⁻⁹		
35	RQ138	第47回6	ST18		11.4	3.9	1.5	80	頁岩	瓦群a類	Ilb+R ⁷⁻⁹ I+R+I R ⁷		
35	RQ98	第96回1	103-177	V層	(11.4)	4.6	1.2	(70)	頁岩	瓦群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	3075	第96回3	103-177	V層	9.18	5.3	1.44	52	頁岩	瓦群a類	Ilab-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	RQ15	第96回4	87-173	V層	11.9	8.65	1.1	121	頁岩	瓦群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹ II-Na+R ⁷⁻⁹		
35	RQ51	第95回3	103-173	V層	12.9	5.88	1.38	100	頁岩	瓦群a類	Ilb+R ⁷⁻⁹ Ilb+R ⁷⁻⁹ I+R ⁷⁻⁹		
35	1316	第97回1	91-181	V層	10.45	5.621	6.0	89	頁岩	瓦群a類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹ Ilb+R ⁹		
35	24	第97回2	103-178	V層	(12.6)	5.3	1.3	(55)	頁岩	瓦群a類	Ilb+R ⁷		
35	2129	第97回3	103-181	V層	(10.65)	3.5	1.33	(42)	頁岩	瓦群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	4610	第9回5	S K 14		9.1	2.86	0.94	30	頁岩	瓦群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		

X群石器

形 物 名	遺物No.	国版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形 態	測 量	調 整	備 考
35	RQ159	第13回2	ST 5		(3.0)	(3.2)	(1.0)	(10)	頁岩	X群a類	Ilb+R ⁸		
35	RQ160	第13回3	ST 5		(4.2)	(2.7)	(1.311)		頁岩	X群a類	Ilb+R ⁷⁻⁸		
35	RQ167	第20回6	ST 7		(3.7)	(2.8)	(1.2)	(10)	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷		
35	RQ170	第43回5	ST 17		(3.11)	(3.7)	(0.8)	(1.0)	頁岩	X群a類	I-IIa-I-II-Nb+R ⁷⁻⁸		
35	RQ173	第48回4	ST 18		(7.8)	(3.9)	1.3	20	頁岩	X群a類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	1016	第98回3	91-177	V層	(5.2)	4.7	2.84	(65)	頁岩	X群a類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	2354	第98回4	99-180	V層	(3.2)	3.0	0.84	(11)	頁岩	X群a類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹		
35	1489	第98回5	91-181	V層	(3.06)	4.08	1.2	(14)	頁岩	X群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	791	第98回6	91-177	V層	(4.08)	3.3	1.5	(21)	頁岩	X群a類	I-Ilb+R ⁷⁻⁹ I-Nb+R ⁸⁻⁹		
35	1554	第98回7	87-181	V層	(3.2)	3.2	1.1	(11)	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	274	第99回1	99-173	V層	(3.65)	3.46	1.52	(20)	頁岩	X群a類	Ilb-I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	441	第99回2	91-177	V層	(4.67)	4.7	1.84	(36)	頁岩	X群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	1984	第99回3	95-185	V層	(3.3)	4.7	0.86	(8)	頁岩	X群a類	I-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	1558	第99回4	83-178	V層	(3.83)	3.0	1.06	(20)	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	1271	第99回5	91-181	V層	(3.15)	5.74	1.05	(15)	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹		
35	272	第99回6	95-173	V層	(3.94)	5.68	1.4	39	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁹		

測 量 値	遺物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形 態	剥 離 調 整	備 考
35	403	第99図7	83-177	IV層	(3.4)	3.3	1.0	(11)	頁岩	X群a類	I~IIb+R ⁷⁻⁹	欠損面有り
36	621	第99図8	87-177	IV層	(3.04)	3.1	0.9	(8)	頁岩	X群a類	I~IIb+R ⁷⁻⁸	欠損面有り
37	1638	第99図9	99-181	IV層	(3.2)	4.1	1.08	(18)	頁岩	X群a類	I~IIb+R ⁷⁻⁸	欠損面有り
38	247	第99図10	95-173	IV層	(6.82)	14.8	1.6	(55)	頁岩	X群a類	Ib+R ⁷⁻⁹	欠損面有り
39	712	第99図11	99-177	IV層	(4.0)	3.74	0.5	(10)	頁岩	X群a類	Ib+R ¹ IIb+R ⁷⁻⁸	欠損面有り
40	463	第99図2	S K24		7.8	4.84	2.1	52	頁岩	X群a類	I·IIb+R ¹⁰	欠損面有り
41	4616	第99図4	S K11		(3.08)	5.0	1.6	35	頁岩	X群a類	Nb+R ⁸⁻⁹	欠損面有り
42	412	第99図5	S K 1		(3.15)	2.65	0.93	12	頁岩	X群a類	I-II-Nb+R ⁷⁻⁸	欠損面有り

刃群石器

測 量 値	遺物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 材	形 態	剥 離 調 整	備 考
40	RQ161	第13図4	S T 5		5.3	1.0	3.2	120	頁岩	X群b類		
40	2731	第99図1	91-177	V層	10.62	6.55	4.72	330	頁岩	X群a類		石核
40	3248	第99図2	87-181	V層	8.65	6.9	6.36	362	頁岩	X群a類		石核
40	698	第99図1	95-177	IV層	10.5	9.24	6.2	520	頁岩	X群a類		石核
40	1509	第99図2	95-181	IV層	8.9	6.9	4.1	220	頁岩	X群b類		石核
40	2074	第99図1	95-189	IV層	7.5	6.86	3.8	250	頁岩	X群a類		石核
40	218	第99図2	99-173	IV層	6.6	6.45	3.6	110	頁岩	X群b類		石核
40	1389	第99図3	99-181	IV層	6.65	5.74	3.32	121	頁岩	X群a類		石核

刃群石器

測 量 値	遺物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃角 度	石 材	形 態	剥 離 調 整	備 考
41	RQ69	第6図4	91-177		(6.2)	4.2	1.0	(40)	57°	粘板岩	X群a類		基部欠損
42	RQ101	第17図1	87-181		(6.0)	5.1	1.5	(60)	68°	粘板岩	X群a類		基部欠損
43	RQ174	第48図5	95-177		9.3	4.7	1.6	95		粘板岩	X群a類		風化している
44	RQ57	第99図1	95-181	V層	11.38	5.2	2.0	150		粘板岩	X群a類		未完成品
45	RQ112	第99図3	95-189		(5.65)	4.66	1.25	(43)		粘板岩	X群a類		基部欠損
45	RQ134	第23図1	99-173		9.1	5.5	2.4	170		粘板岩	X群b類		刃部欠損
47	RQ113	第25図2	99-181		(5.0)	(4.2)	(1.4)	50		粘板岩	X群b類		基部欠損
48	RQ77	第31図4	S T 12		8.6	5.5	2.0	(110)	50°	粘板岩	X群b類		基部欠損
49	RQ13	第99図2	99-173	V層	7.7	4.21	1.36	62		粘板岩	X群b類		再生品
49	RQ66	第10図4	83-173	V層	(6.7)	4.98	1.55	(82)		粘板岩	X群b類		基部欠損
42	RQ109	第18図4	S T 6		(8.0)	3.0	1.0	(11)		粘板岩	X群c類		基部欠損
42	RQ20	第99図1	91-173	IV層	(7.95)	6.6	3.0	(112)		変性岩	X群d類		基部欠損
42	RQ58	第10図2	91-181	IV層	(5.86)	4.9	2.2	(110)		変性岩	X群d類		基部欠損

XIII群石器

測 量 値	遺物No.	図版番号	出土地区	層位	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重さ kg	石材	形態	剥離調整	備考
41	RQ177	第48図9	S T 18		6.8	5.0	0.7	30	砂岩	X群a類		石製品

第5表八幡原No.5 遺跡A区住居出土鍬器分類計測表

通し番号	遺物番号	出土地区	形態断面	細 分	長径cm	延径cm	厚さcm	重量g	石材	備考
1	1	ST 18	C ⅡB	IA + C'	9.3	8.8	4.7	350	砂岩	
2	2	ST 18	C ⅡB	IA + C7	11.0	8.4	3.0	350	安山岩	
3	13	ST 18	C ⅡB	IA + C3	9.0	7.6	4.0	380	安山岩	
4	24	ST 18	C ⅡB	IA + C ² +C12	8.1	7.9	4.9	410	安山岩	
5	30	ST 18	C ⅡB	IC + C1	9.5	5.0	2.5	240	安山岩	
6	36	ST 6	C ⅡB	IA + C1	12.1	9.3	2.0	600	安山岩	
7	48	ST 6	C ⅡB	IB + C'	14.0	7.5	1.5	370	凝灰角石	
8	51	ST 6	C ⅡB	IB + C'	13.5	8.5	2.5	350	安山岩	
9	59	ST 12	C ⅡB	IB + C'+C"	12.0	8.0	4.0	600	安山岩	
10	66	ST 17	C ⅡB	IB + C ²	(8.5)	(8.5)	3.6	300	安山岩	欠損
11	71	ST 1	C ⅡB	IB + C'+C2'	11.0	5.0	3.5	270	砂岩	
12	72	ST 1	C ⅡD	IA + C'+C2'	9.0	6.5	4.5	550	安山岩	焼けている(一部)
13	73	ST 1	C ⅡB	IA + D'+C2	10.0	9.0	4.0	850	安山岩	
14	75	ST 1	C ⅡB	IB + C'	9.5	5.5	3.1	260	安山岩	
15	80	ST 12	C ⅡB	IA + C ² +C'+C"	8.0	8.0	4.2	400	安山岩	
16	83	ST 9	C ⅡB	IA + C'	(9.2)	11.2	4.3	510	安山岩	欠損
17	95	ST 9	C ⅡB	IA + C ² +C3'	9.8	7.5	4.5	400	安山岩	
18	125	ST 11	C ⅡB	IA + C'+C1'	10	9	4	700	安山岩	
19	130	ST 15	C ⅡB	IA + C ² +C'2+C'	10	8.5	3	450	安山岩	
20	3	ST 18	D ⅡC	ID + D'	(7.5)	6.0	7.4	420	石英安山岩	欠損
21	4	ST 18	D ⅡC	ID + D'	(5.6)	7.1	8.0	300	砂岩	欠損(長徑)タキ痕有す
22	5	ST 18	D ⅡC	ID + D'	(6.4)	5.5	4.9	300	安山岩	欠損
23	7	ST 18	D ⅡC	ID + D'	(7.6)	7.0	4.6	350	普通輝石安山岩	欠損
24	8	ST 18	D ⅡC	IC + D	14	5.5	4.5	450	凝灰角砾岩	
25	9	ST 18	D ⅡB	ID + D ² +C12	14.2	6.5	5.0	660	安山岩	
26	10	ST 18	D ⅡB	IB + D'	(12.5)	8.3	4.5	700	凝灰岩	
27	11	ST 18	D ⅡC	IB + D'	(12.0)	6.3	5.5	640	閃雲花崗岩	欠損
28	12	ST 18	D ⅡB	IC + D'	(11.0)	9.8	5.0	640	安山岩	欠損
29	14	ST 18	D ⅡD	ID + D'+C ²	15.4	5.8	5.8	900	普通輝石安山岩	
30	16	ST 18	D ⅡD	ID + D ²	4.4	7.5	6.5	1100	凝灰岩	タキ痕有り
31	17	ST 18	D ⅡB	IA + D ² +C ²	10.5	10.3	5.5	810	安山岩	
32	18	ST 18	D ⅡC	(ID)+D ¹	7.5	6.4	6.3	510	安山岩	両端が欠損
33	19	ST 18	D ⅡC	ID + D ²	13.5	5.4	5.0	460	安山岩	
34	20	ST 18	D ⅡC	IB + D ²	(10.0)	6.3	5.5	550	安山岩	欠損
35	22	ST 18	D ⅡB	ID + D ² +C2'	11.5	7.5	4.6	650	安山岩	
36	25	ST 18	D ⅡB	ID + D'+C ¹²	12.6	7.5	5.1	680	安山岩	
37	26	ST 18	D ⅡC	IB + D'	14.2	7.8	6.0	960	安山岩	
38	27	ST 18	D ⅡC	IC + D ² +C2'	13.8	6.1	5.6	620	安山岩	
39	29	ST 18	D ⅡC	(IC)+D'	6.0	5.5	5.0	390	安山岩	欠損
40	31	ST 18	D ⅡD	IB + D'+C2'	13.0	7.0	6.0	750	安山岩	
41	32	ST 18	D ⅡC	IC + D	9.0	6.5	4.5	490	安山岩	欠損
42	33	ST 18	D ⅡB	IB + D'	9.0	6.5	4.5	520	安山岩	欠損
43	34	ST 6	D ⅡB	IC + D'+C2'	16.0	8.0	5.5	950	石英岩	

通し番号	遺物名	出土地区	形態断面	組	分	長径cm	短径cm	厚さmm	重さg	石	材	備考
44	35	S T 6	D	II B	IA + D' + C' 2	10.0	8.2	5.2	750	石英	安山岩	
45	38	S T 6	D	II B	IA + D'	9.8	8.5	4.0	590	安山岩		
46	39	S T 6	D	II B	IC + D'	10.3	8.2	4.8	670	安山岩		
47	40	S T 6	D	II B	IA + D ² + C' 2	11.5	8.0	5.0	550	石英	安山岩	
48	41	S T 6	D	II C	ID + D'	12	7.5	6.8	1,010	石英	粗面岩	
49	42	S T 6	D	II C	(ID) + D'	(11.5)	7.5	6.0	900	角閃安山岩		両端部欠損
50	43	S T 6	D	II C	IB + D' + C' 2	9.2	6.0	3.5	430	安山岩		
51	44	S T 6	D	II C	IB + D'	14.0	7.5	6.0	510	凝灰岩		欠損
52	45	S T 6	D	II A	IB + D'	13.2	6.5	3.5	610	凝灰角巖		
53	46	S T 6	D	II B	(IA) + D'	11.0	9.5	4.0	700	安山岩		自然によるはじけ面有り
54	47	S T 6	D	II B	ID + D ²	13.5	6.0	4.5	700	シエル		
55	49	S T 6	D	II B	IB + D + C' 2	11.5	7.5	4.0	700	安山岩		
56	50	S T 6	D	II B	ID + D ²	12.5	5.5	3.5	500	安山岩		
57	52	S T 6	D	II B	IA + D'	9.5	7.5	3.5	400	凝灰岩		
58	53	S T 6	D	II B	IC + D'	15.0	5.5	5.0	520	石英	安山岩	欠損
59	55	S T 7	D	II D	IB + C'	12.0	5.5	3.5	450	安山岩		
60	57	S T 10	D	II C	IC + D ² + C' 2	14.0	8.0	5.0	840	石英	安山岩	
61	58	S T 12	D	II B	IB + D' + C' 2	12.0	8.0	3.0	530	安山岩		
62	60	S T 17	D	II C	IC + D'	12.0	4.5	5.0	750	閃雲花崗岩		
63	63	S T 17	D	II C	IC + D ² + C' 2	17.5	6.0	5.5	890	安山岩		欠損
64	64	S T 17	D	II C	IC + D'	5.5	5.0	6.5	400	安山岩		欠損
65	65	S T 17	D	II B	IA + D'	10.0	8.0	4.7	550	安山岩		
66	67	S T 17	D	II C	IB + D'	(11.0)	6.5	4.5	700	安山岩		
67	68	S T 17	D	II B	IC + D'	12.0	7.0	3.5	400	安山岩		
68	69	S T 1	D	II B	IB + D' + C' 2	14.0	7.0	4.2	700	閃雲花崗岩		
69	74	S T 1	D	II B	IA + D'	10.5	8.0	3.0	710	安山岩		西端部4.4cm幅0.5mを1本計す。
70	76	S T 12	D	II D	ID + C'	(7.0)	6.8	5.5	300	凝灰岩		両端部欠損
71	77	S T 12	D	II C	ID + C'	(8.0)	6.5	5.2	430	凝灰岩		欠損
72	78	S T 12	D	II C	ID + D' 2	8.0	7.3	4.0	300	石英安山岩		欠損面有り
73	79	S T 12	D	II C	ID + D' + C' 2	(11.0)	8.0	5.5	700	石英安山岩		欠損
74	82	S T 12	D	II C	ID + D ²	12.3	6.4	3.4	550	安山岩		
75	83	S T 4	D	II B	IA + D' + D' 2	31.0	29.5	2.5	1,520	安山岩		
76	85	S T 12	D	II D	ID + D' + D' 2	9.2	6.8	6.7	660	砂岩		欠損
77	86	S T 14	D	II D	ID + D ² + C' 2	17.7	6.5	6.0	980	閃雲花崗岩		
78	89	S T 16	D	II C	ID + D ²	11.0	6.0	4.8	550	石英	安山岩	
79	90	S T 16	D	II B	IB + D ²	10.5	8.0	5.9	1,110	安山岩		
80	91	S T 7	D	II C	ID + D' + C' 2	(8.3)	8.0	5.8	600	閃雲花崗岩		
81	92	S T 7	D	II B	IB + D'	17.5	6.8	4.5	540	砂岩		
82	93	S T 7	D	II D	ID + D'	(6.9)	5.8	6.0	410	安山岩		両端欠損
83	94	S T 7	D	II C	IC + D'	11.5	8.1	5.7	470	石英	安山岩	
84	95	S T 9	D	II C	IB + D ²	(10.0)	6.5	4.9	600	安山岩		欠損
85	96	S T 9	D	II B	IA + D' + C 2	11	8.4	5.3	750	安山岩		
86	97	S T 9	D	II C	IB + D' + C' 2	10.5	4.0	5.2	500	安山岩		

番号	直角%	出土地点	形態断面	層	分	高さcm	厚さcm	厚さcm	重さt	石材	備考
87	98	S T 9	D II C	IC + D ²		(11.0)	5.1	4.9	700	安山岩	
88	99	S T 9	D II D	ID + D' + C' 2		11.6	4.6	4.9	500	安山岩	
89	104	S T 9	D II C	ID + D' + C' 2		13.0	7.0	4.0	610	閃雲花崗岩	
90	105	S T 9	D II C	ID + D ²		(9.0)	8.1	7.1	850	閃雲花崗岩	
91	104	S T 9	D II C	ID + D'		(11.0)	7.4	5.4	610	石英安山岩	
92	106	S T 9	D II C	IC + D'		15.5	7.8	7	1,150	安山岩	
93	106	S T 16	D II D	ID + D ²		16	5.5	6.5	820	安山岩	
94	119	S T 8	D II C	ID + D ²		7	6	6.5	600	安山岩	欠損
95	111	S T 8	D II C	IC + D ²		11	7	9	1,300	安山岩	欠損
96	113	S T 8	D II B	ID + D' + C' 2		10	8	3	510	安山岩	
97	114	S T 8	D II B	IB + D ²		7.5	6	5	380	安山岩	欠損
98	115	S T 17	D II C	IB + D'		11	5	6.5	650	安山岩	
99	116	S T 17	D II C	ID + D'		7.5	6	7.1	400	石英安山岩	欠損
100	117	S T 17	D II C	ID + D ³		6.9	8.1	6.5	650	安山岩	欠損
101	119	S T 14	D II B	IB + D'		19	8	3.5	850	石英安山岩	欠損
102	120	S T 14	D II D	IB + D'		11.5	8	5.5	850	安山岩	
103	122	S T 11	D II B	IB + D' + C' 2		15	5	4	600	砂岩	
104	123	S T 11	D II C	IC + D'		9	8	4.8	400	凝灰岩	欠損
105	124	S T 11	D II C	ID + D' + C' 2		6	5	4.8	170	砂岩	欠損
106	126	S T 11	D II B	IA + D ² + C' 2		11	8	3	360	安山岩	欠損
107	127	S T 15	D II D	IA + D ²		9	8	3	420	安山岩	
108	129	S T 15	D II B	IA + D' + C' 2		7.7	7.4	3.8	300	安山岩	
109	6	S T 18	E II B	3E		(19.0)	13.4	3.2	1,250	石英安山岩	欠損
110	21	S T 18	E II B	3E		(12.4)	(10.6)	4.1	850	石英安山岩	欠損
111	23	S T 18	E II B	IA + II C + 2E		15.3	(10.6)	5.8	380	石英安山岩	欠損
112	28	S T 18	E II B	2E		30.0	17.0	4.0	1,315	凝灰岩	欠損
113	54	S T 7	E II B	2E		(14.0)	(7.0)	7	1,150	砂岩	
114	61	S T 7	E II B	2E		22.5	17.6	10	1,270	凝灰角砾岩	
115	62	S T 17	E II B	2E		14.0	12.0	4.0	940	安山岩	
116	70	S T 17	E II B	3E		14.0	11.0	4.0	1,420	砂岩	
117	84	S T 1	E II B			11.0	8.0	5.0	460	凝灰角砾岩	欠損により不明
118	88	S T 4	E II D	2E		24.0	12.0	10.0	1,610	砂岩	欠損
119	106	S T 9	E II B			(18.0)	(16.0)	6.0	1,520	石英安山岩	欠損のため外形は不明である
120	107	S T 9	E II B	2E		31.5	13	4.5	1,610	凝灰角砾岩	欠損
121	122	S T 16	E II B	II C + 2E		34	28	3	1,810	凝灰角砾岩	
122	86	S T 11	E II B	2E		21	14	4	1,510	凝灰角砾岩	欠損
123	118	S T 8	E II B	2E		20	18	5	1,510	安山岩	欠損無熱痕有り
124	122	S T 13	E II B	2E		23	18	8	1,210	凝灰角砾岩	
125	119	S T 11	E II D	3E		19	11	3	1,980	砂岩	欠損
126	123	S T 15	E II D	3E		24	19	5	2,410	凝灰角砾岩	欠損
127	87	S T 14	F II A	IB + II A		12.0	5.7	5.2	600g	安山岩	

2)出土土器の概要

本遺跡から検出された土器群は、A区、B区合わせて2156点検出されている。先のA区は、縄文早期の竪穴住居跡を中心に1387点あり、次で包含層出土のV層535点、IV層234点の順である。

昨年度調査した八幡原No.4遺跡では第III層～第V層の3枚に亘って遺物の検出が認められているが、隣接しているにもかかわらず、遺跡の大半が杉等の樹林で覆われていることもある、上層の包含層が著しく攢乱しIV層、V層の二者に分けざるを得なかった。従って今回扱う第IV層にはNo.4遺跡で区分したIII層が加わっていることを指摘しておきたい。

今回のA区出土土器は昨年のNo.4遺跡と同様に酸性土壤であることから、土器の表裏面ともに著しい磨滅が生じ、文様の判別できる資料は住居跡を中心に僅か3分の1にすぎなかった。完形土器は縄文後期住居（ST3）より検出した2点のみである。

後のB区は古墳前期に位置する竪穴住居跡から完形土器52個を中心検出されている。住居跡群は先に述べている様に5棟とも火災に遭遇した住居跡であるため、当時のままに遺物の存在が確実にセットとして把握された貴重な資料である。その他A区の影響とみられる縄文土器数点が認められているが、遺構が検出しないこともあって、資料的価値は少ないと言える。

ここでは、A区、B区と大別し、A区は住居跡出土遺物と各包含層を中心に、B区は5棟の住居出土土器を中心に述べてみることにする。

A区出土の土器

文様表出技法と年代区分から次の12類に細別する。

I群土器〔第50図1～3〕

日計型押型文をもつ土器類であり、ST19より3点認められている。二条の平行沈線を配し、空間に菱形重角を押捺転回する仲間である。何れも小破片であることから全体的な構成は不明であるが、中間に無文帯を有するものとみられる。焼性は良く、微量の石英砂を含み、色調は暗茶褐色を呈している。

II群土器

撚糸文・縄文を中心とする撚糸文系土器の仲間である。a類～f類の6類に分けた。

II群a類〔第11図3～8、第29図1、第107図3、4、6、7〕

縦位に垂下する撚糸文土器で、ST6-6点、ST11-1点と第5層からの2点がある。ST5と5層出土の撚糸文土器は、撚のゆるい原体を間を開けて押捺転回する稻荷台式に類以し、ST11から検出された撚糸文は間を詰める夏島や井草式に類をみることができる。両者とも口縁が幾分外反気味に開く器形を有し、前者は暗茶褐色、後者は黄褐色をなし、胎土に中量の石英砂を含み焼性は、比較的良好。

II群b類 [第13図9・第36図3・第107図3・4・6]

横走する撚糸文である。先のa類よりは新らしいグループに分けられ、貝殻文や沈線文を併うことから田戸上層に平行すると考えられる。繩文の転回から、ゆるやかに横走する13図9、36図3、107図3と密に転回する107図4、6がある。前が茶褐色、後のグループが暗灰褐色を呈し少量の石英を含む。焼性は良くない。S T 6、S T 15から各1点、第5層から4点の計6点が認められた。

II群c類 [第38図3～6]

S T 16のみに一括して10点認められた。節の微細なR $\frac{l}{l}$ を転がしたもので、茶褐色を呈し焼性は良く、胎土に多量の石英砂を含んでいる。b類に後続するものとみられる。

II群d類 [第107図5・8]

第5層から検出された斜繩文片である。黄灰褐色をなし、多量の石英砂を含んでいる。住居内からの検出がないことから難しいが、先のb類もしくはc類に属するものと考えたい。2点とも焼性が悪く、もろい感である。

II群e類 [第22図18～21]

繩文前期にみられる様な土状の節を有するもので、胎土に纖維質を含む。S T 8からのみ4点検出し、他に表裏条痕文や繩文条痕を伴出することから同時期の仲間とみてよい。焼性は比較的良く、暗茶褐色を示す。

II群f類 [第22図18、第108図17]

纖維を含む撚糸文でS T 8-1点と第5層から1点認められる。a類と同様に縦位に回転施文するが、纖維を混入することで明らかに識別される。暗黄灰褐色を呈し、焼性は普通である。

III群土器 [第6図2～16、第107図32]

三戸式土器以前の沈線文土器として最近注目されている初期沈線文土器群の仲間と考えられるS T 2より一括して検出されたものであり、二条もしくは三条の平行沈線間を多条の斜状沈線を交互に転回し、数段繰り返すものとみられる。器形は外反する長身の尖底土器と考えられ、色調は茶褐色を有し、胎土に微砂を含み焼性は良い。

VI群土器

III群土器に後続するとみられる沈線文土器群を一括した。

IV群a類 [第13図6・7、第29図9～13、第34図5、第38図8～10、第42図1～8・11・19・21・32・34～36、第44図6～8・10・12・14・16、第107図21～23・33～35・37・38、第108図2・19]

細線を主体に文様を構成するもので、斜位や平行する多条文、菱型文、格子目状文、矢羽状文山形文がある。住居跡からはS T 6-2点、S T 12-5点、S T 14-1点、S T 16-3点、S T 17-15点、S T 18-7点と第5層から10点の計43点が検出されている。この中で、S T 16から出

土した38図8～10やST17の42図1～3にみられる格子目状文、菱型重文等は本類の中でも古い要素を表出するものであり、Ⅲ群土器に近い三戸式に類するものと考えられる。

色調は、黄灰褐色ないし、茶灰褐色を示すものが多く、多量の石英砂、微砂を含み、焼性は良くない。器形は外反するものとみられる。

IV群b類土器〔第18図7～19、第29図8、第44図9・13・15、第107図24〕

太状の沈線を空間をもちらん横引き状に施文する、横位に転回する短沈線文のグループである。これまでの沈線文とは異なり幅広で、深い沈線を描くのが特徴と言える。ST7の13点を主体に、ST18が3点、ST12と第5層各1点が認められている。胎土に多量の石英砂もしくは微砂を混入し、黄茶褐色を呈し、焼性は悪い。器形はゆるやかに外反するものと、わずかに内曲するキャリバーに近い二通りが考えられる。

IV群c類土器〔第18図5・6、第31図6、第42図10・20、第107図25・27・28・42、第108図1〕

太状沈線の間を短沈線文で埋めるものを一括した。平行沈線に斜行線を配し、その間を縦位の短沈線文で埋めるもの31図6他と二条の平行、斜行線間を短沈線で埋める108図1他の二通りが認められる。ST17から2点、ST13・1点、第5層5点の計8点を数える。器形は不明であるが、胴上部から下胴にかけて多く施文するものとみられる。

第V群土器

籠状もしくは小板状工具の先端を用いて押し引様に連続施文する所謂『籠状角押文』と称されるものをまとめた。

V群a類〔第31図7、第42図23～31・33・37、第46図3～8、第108図13～15〕

工具の最先端を軽く押し引いた「[」状の籠状角押文を基本とする。波状口縁を有する器形に比較的多く用いられる手法とみられ、平行する二条の沈線と波状、斜行する沈線間を埋める様に連続して施文している。

ST17-10点、ST18-6点と両者から多く検出され、他にST13-1点と第5層から3点がある。赤茶褐色、暗茶褐色をなし、多量の石英粒を含み、焼性は著しく悪い。器形は先に述べた様に波状口縁を示す外反するものとみられる。

V群b類〔第18図22、第38図11～13〕

a類とは相反して平縁もしくはそれに近い器形を有するものに多い。平行沈線を埋める籠状角押文は、先端から2mm位の角ばった工具を用いて連押しており、深さ、幅とも明確に施文する特徴がある。器形は外反する器形、焼性は良く、色調は暗茶褐色を呈している。この時期における平縁を有する器形の口縁部付近に施文する文様構成と理解される。

V群c類〔第25図4～8〕

S T 10から検出されたもので、工具を斜に押し当て上下に繰り返すことによって「く」字状の簾状角文を連続させている。「く」字状の簾状角押文は竹管による平行沈線間を埋めるもので、二段に配しその下に竹管沈線による茎状文、さらに内部を横位の条痕が横走する。

器形は外反し、幾分波状を示すものと考えられ口唇が尖状を示すのを特徴とする。焼性は良く小量の石英砂を含み、暗灰褐色をなす。

V群d類〔第18図21、第107図29〕

ヘラ状工具の角を押し引き状に連続するもので、太状の平行沈線文が併う。文様表出技法的には後述するVI群と同じ刺突文のグループに属するが施文状況が異なることから区別し、「L」字状刺突文としたい。S T 7、第5層各1点が認められ、焼性は良く、小量の石英砂と微砂を混入する。器形は外反もししくは外反気味に内傾するものと考えられる。

VI群土器

貝殻腹縁文・貝殻沈線文等の貝殻・沈線文系土器を一括して本群とした。

VI群a類〔第42図9・14・16～18、第107図30〕

平行沈線の間に貝殻刺突文を列点状に施文するものが特徴で、S T 17を中心にして6点認められている。器形は不明であるが、胴部から下胴部にかけて表出されるもので、焼性は良く茶灰褐色を呈し、石英砂を含む。

VI群b類〔第13図12～18・26〕

貝殻腹縁連続文と竹管による小さぎみな山形文で構成する土器群である。S T 6のみにまとまって8点検出されている。貝殻腹縁文は横位に連続して移行するものが基本と考えられるが一部斜位に配しているものも存在することから、ゆるやかな波状を呈するのかも知れない。それを囲む（現実的には山形文の間を埋める）様に山形文を設している。暗茶黒褐色を呈し、焼性は良くない。胎土に小量の石英砂を含んでいる。

VI群c類〔第34図3・4・8、第107図36・39・41・43・44・46〕

沈線によるゆるやかな山形文、平行沈線文に貝殻腹縁文を配した仲間である。焼性は良く、暗茶褐色をなす。S T 14から3点と第5層から6点検出されている。

VI群d類〔第4図2～10、第31図9・10、第107図36・39・43・44・46〕

刺突連続沈線文（結節沈線文）、貝殻腹縁刺突文、貝殻腹縁沈線文、貝殻腹縁連続文の四者を文様表出技法として構成する土器群であり、時折沈線を配するものもある。この種の土器は大寺式と常世式、それに明神裏3式が加わった文様構成を有するもので、No.4遺跡に半完形の良好な資料がある。器形は外反気味に内曲するキャリバー的な形状を有するのが特徴で、文様は口縁部文様帶と胴部文様帶に大別される。

先の口縁部文様帶は、頸部と区画する様に平行の刺突連続沈線文上部に貝殻腹縁沈線による波

状文を配し、その間を貝殻腹縁文で埋めている。この区画帯を中心に下は無文帯を置き、さらに胴部文様を転回している。上は平行する狭い貝殻腹縁沈線文を主体に斜位から渦巻、平行と施しその間を貝殻腹縁で埋める方法をとっている。このため口縁に2単位の三角形状空間が開き、この空間にメルクマール的な円弧の貝殻腹縁文を配し、構成している。

後の胴部文様帶は広い貝殻腹縁沈線文と刺突連続沈線文を交互に横走して、空間に貝殻腹縁文を斜位に連続させて、羽状に構成している。本遺跡からは、ST 1にまとめて検出され10点、ST 13-2点と第5層から8点の計20点があるが、ST 13に関しては後述する次の明神裏3式の仲間と考えた方が妥当とみられる。黄灰褐色をなし、焼性は普通で胎土に石英砂を含んでいないのを特徴としている。

VII群土器

刺突連続沈線文、突刺文を主体とするグループで、基本的に貝殻文を伴なわない土器群を一括した。

VII群a類〔第4図1、第6図19~27、第13図8~11、第22図17、第23図3~9、第25図9 第29図7、第31図8~13、第34図6・7、第108図7・9〕

白石市明神裏3式に併行する土器群で、ST 1-1点、ST 4-9点、ST 6-4点、ST 8-1点、ST 9-7点、ST 10-1点、ST 12-1点、ST 13-6点、ST 14-2点、第5層2点と早期の堅穴住居18棟の約半分に相当する9棟の住居跡から僅かながらにも認められている。

2条の刺突連続沈線文と沈線文+刺突連続沈線文の組み合せをメルクマールとし、平行、斜状、波状文を構成する？特に平行する間には短沈線文による「ノ」字状や「八」状文を埋める場合が多く、明神裏に多く存在する波状の構成は13図8を除く他はみられなかった。本遺跡の特徴と言えそうである。胎土に多量の石英粒を含み、焼性は普通もしくは悪く、色調も暗茶褐から暗黄茶褐色と暗い感じのものが多い。

VII群b類〔第38図7、第42図12・13・15、第44図10・10・17~20、第107図40、第108図16〕

竹管による平行沈線文ないし斜状の沈線間を半円形状の刺突文で埋める土器群でありV群a類に伴うものである。刺突は竹管を用い、ST 17-5点、ST 18-4点、第5層から2点検出している。ただし、38図7に関しては、地文に条痕を施し、刺突連続沈線文の平行沈線に半円形の刺突を配したものであり、器形は外反する波状口縁をなす。この種の土器は他に類がないが、刺突連続沈線文の特徴から(VII群a類の)仲間に位置付けるのが妥当と考える。

VIII群土器

条痕土器を有する土器群をまとめた。これまでの土器群にはみられなかった胎土に石英砂とともに多量の雲母を混入する特徴がある。

VIII群a類〔第38図14~18、第40図1~4〕

縄文条痕を有する土器類であり、ST16に一括して20点認められた。胎土に他に多量の纖維を含んでいる。条痕は内面に広幅で浅く不規則であり、表面に転回する縄文は多条の節を斜状に転回したものである。薄黒く、焼性は悪い。

VII群 b 類〔第22図2～14・16、第11図19、第36図4、第107図19・48・49〕

表裏条痕を有するグループで、ST8から14点、ST5、ST15各1点と第5層から3点が認められている。

VII群 c 類〔第22図1〕

b 類と同じ様に表裏条痕をもつ仲間であるが、内面に格子目状の沈線文が配するのを特徴とする。ST8に1点ある。他に類をみなく、近いものとして宮城県王造郡岩出山町の天神山遺跡より検出されている。関東地方の野島式に類するものとみたい。

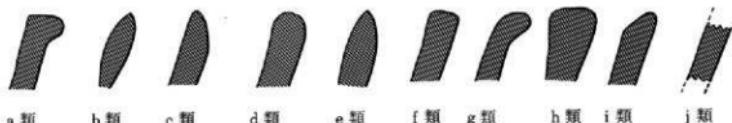
VII群 d 類〔第22図15、第107図20〕

表面のみに条痕文を有するもので、ST8、第5層各1点がある。

XI群土器

無文土器を一括した、ST5、ST6、ST2と第5層から検出している。すべて外反する器形を呈するものとみられ、口縁部の断面形状より下記のa～gタイプに細別することができた。

第6表、無文土器断面形態分類表



a 類

b 類

c 類

d 類

e 類

f 類

g 類

h 類

i 類

j 類

IX群 a 類〔第107図16〕

口唇部が外へ張り出して外反し、丁度、長靴を逆にした様な形状を示すもの。第5層から1点検出している。

IX群 b 類〔第6図29、第11図9、第13図22・23、第107図13〕

口唇部が尖り、断面形態が凸レンズ状を示すもの。ST6-3点とST5-1それに第5層から1点の計5点がある。

IX群 c 類〔第13図20、第107図9～11〕

内面が平坦を有し、口唇部が尖り、外面のみがふくらみをみせるもの、ST6-1点と第5層から3点検出させている。

IX群 d 類〔第6図28、第11図11・15・16〕

口唇部が丸味をもつもので、全体的に器壁が厚いのを特徴とするもの。ST4-1点とST5から3点認められた。

IX群 e類〔第11図12・13、第107図17〕

口唇部が尖状を示し、先の b類と近いが、器型の厚味が一定するところに違いが認められる。

S T 5 - 2点と第5層1点がある。

IX群 f類〔第11図18〕

S T 5から1点のみ検出されている。口唇部が平坦で角状を示すもの。

IX群 g類〔第6図12〕

口唇部が丸味を帯び、著しく外反するもの。S T 2より1点検出されている。

IX群 h類〔第11図14、第107図12〕

器號の最大径を口唇部に集め平坦を有するもの、S T 5、第5層より各1点がある。

IX群 i類〔第11図10、第13図21・24、第107図14・15〕

口唇部が尖状をなし、内面が曲するものであり、c類の逆の形状に近い。

IX群 j類〔第11図17、第13図26、第23図8、第107図8〕

口縁部のない胴部片を集めたもので、分類不明なものとした。S T 5、S T 6、S T 9、第5層から各1点認められる。

X群土器

繩文前期初頭に位置付けられる土器群を一括する。

X群 a類〔108図20～26〕

本状の原体R(ℓ)とL(r)を交互に転回する羽状繩文のグループであり、28は底部、21は口縁部である22～26は繩文、ループ文竹管による爪形文を配し、胎土に多量の纖維質を含んでいる。すべて第4層出土である。

X群 b類〔第108図27～31〕

微量の纖維質と微砂を混入する胎土をなし、茶褐色を有す。横方向に円孔状の刺突文を施すものを特徴とし、下方に横位の「S」字状連結文を配している。大木2b式に併行するものとみられる。

X群 c類〔第108図32～35〕

文様の明確に判別できる資料は32のみであった。地文となるR(ℓ)に半裁した竹管を用いて爪形文を連続させ、方角状円弧文とその間に円孔状の竹管を施文している。この種の土器群は関東地方の諸磧a式に比例するものでこれまで県内に類例がなく、近いものとして八幡原No25遺跡に数点みられるにすぎない。他の33～35は斜繩文片であり、同時期と考えられる。

X群土器〔第109図1～34、第110図1～11〕

繩文後期初頭に位置する土器群をまとめた。すべて第4層上部内からの検出によるものであり、この中にはS T 3住居跡から検出された第8図1・2・4の完形土器3点も含んでいる。

多条沈線による山形連続文第109図1・20同平行沈線文第109図3・4・7沈線内による入組文や方形、菱形、平行沈線文に充填繩文を配するもの第109図2・5・12・18・19・21があり、他に粗製の無文第109図23・24、L { $\frac{r}{r}$, R { $\frac{e}{e}$ } 等の斜繩文、撚糸文、を有するもの第109図25~34がある。年代的には第109図2~20が堀の内II式、第109図1・21、第8図1・2・4が加曾利B I式に、第109図22、第8図3に関しては繩文晚期の大洞A'式にそれぞれ併行するものとみられる。第110図1~11は底部片であり粗製土器も含め、堀の内II式ないし加曾利B I式に属するものとみられる。

B区出土の土器

すべて古墳前期の堅穴住居から検出された土器類であり、4棟の住居跡床面に沿って52個の完形、一括土器が得られている。土器類は器形から楕、壺、高环、甕、瓶の5器種に分けられさらに細かい特徴から各器種ごとに細分類した。下記参照。

第7表、土器分類表

楕形土器 [a ¹ ~ a ⁸ 類] 40点。
壺 [d類] 1点。
高环 [c類] 1点。
甕形土器 [d ¹ ~ d ⁴ 類] 8点。
瓶 [e ¹ ~ e ² 類] 2点。

第8表、住居跡出土土器類別表

	楕	壺	高环	甕	瓶	計
S T 1	7	0	0	2	1	10
S T 2	19	0	0	2	1	22
S T 3	8	1	1	1	0	11
S T 4	6	0	0	3	0	9
合計	40	1	1	8	2	52

以下簡単に各土器類の説明を加える。

a類【楕形土器】

S T 2を中心に40点認められ、a¹~a⁸類に分けられる。

a類土器〔第117図9~12、第119図4〕

底部が円に近い丸底を有し、口縁部から外に曲する、丁度ヘルメットを逆にした様な形態に近い。外面調整は縦位、横位、斜位によるハケメ調整を胴部に行い、口縁部を様位のナデで施すのを基本としている。内面調整はナデ、ヘラナデを中心とし、口縁付近をハケメで用いるものもあるが、第119図4の様にヘラミガキを最後の調整として施文するのは、むしろ例外である。

外面の底面調整は第117図12を除くとハケメ調整で仕上げている。胎土は、多量の石英粒や砂を混入し、二次焼成（火災のために焼成をうけたものとは別に）をうけ、外内面とともに著しく磨滅を呈す。S T 4のみに5点ある。

a²類土器〔第116図1・2、第119図2・9~11、第120図3~5・11〕

器高が低く、口縁部やわずかに内曲するのを特徴としている。調整は外面をハケメから横ナデ

ヘラミガキを有するものとナデからヘラミガキを行うものの二者に分けられ、ハケメからナデを施する第116図1もある。内面は横ナデから縦位のヘラミガキを行うのが主であり、第119図10の様に横位のヘラミガキを行うものもある。本類は最初の調整として縦位のナデ（ヘラナデもある）を施し最終的な調整としてヘラミガキを有するのが特徴であり、前後する^a類、^a類を除く楕形土器の基本的な調整順位と考えられる。ST 3を中心各住居跡内から認められている。

^a類〔第116図8・9、第117図5〕

形態的には^a類と同じであるが、やや器高が高く、器厚が底部に沿って厚くなっていることから区別した。調整は磨滅のため不明なものがあるが、^a類と同様とみられる。ST 1より2点、ST 2より1点の3点がある。

^a類土器〔第116図3・4、第117図7、第120図7〕

^a、^a類に近い。口唇部が尖り、器高が高いのを本類に入れた。外面調製は横位のナデに横位から斜位のヘラミガキを有し、第116図4の様にヘラミガキをヘラ調整で行うものもある。内面はナデ横、ヘラナデ後にヘラミガキ縦を最後の調整として配してあるが、その前に横位のヘラミガキを有する。第117図7や第120図7もみられる。底部調整はヘラケズリを時計回りもしくは不定方向に施している。ST 1-2点、ST 2、ST 4各1点の計4点が認められた。

^a類土器〔第117図13~16〕

口径が15.4~17.4cmと楕形土器の仲間で最も大きいグループである。器形は器高の深いポール状を呈し、口唇部が中状を示すのを特徴としている。調整は、ハケメ、ナデを主に内面は横位のナデから縦位のヘラ調整と一部ヘラナデ、ハケメの使用も認められる。いずれにしても内外面とともにヘラミガキを用いないことが注意される。ST 2のみに検出された。

^a類土器〔第117図2・3・6・8、第119図3、第120図8・10〕

底部がこれまでの丸底から幾分平坦的になるものが多く、ポール状から立ち上がる口縁部がわずかに外反するか、そのまま立ち上がる器形をもつ。特に口縁部内面に「く」状の張り出しを有することが他の器形との大きな特徴である。調整は外面を横位のナデから横位のヘラミガキ、内面を同じくナデ後に縦のヘラミガキを施こし一部、第117図2・3の様に内面にハケメを有するものや第119図3の様に外面にヘラケズリを施するものもある。ST 2とST 4より7点検出されている。

^a類土器〔第116図10、第117図1、第119図12〕

口縁部が外反する楕形土器であり、先の^a類と類似する。調整は外内面ともにナデからヘラミガキを行う調整順位で、器形も口唇付近で外曲する特徴から^a類とは区別される。胎土はきめ細い粘土を用いてあり、石英を多量に含む^a類とは明らかに異なっている。各住居跡から認められている。

a⁵類土器〔第116図4、第120図2〕

その他の楕形土器を本類とした。S T 1から検出した第116図10は口縁部が「く」字状に外反するのを特徴として、底部はゆるやかであり、平底に近い。調整は内外面ともにハケメからナデを有し、最後にヘラミガキで整えている。

S T 3の第120図2はa⁶類の器形に高台状の張り出し底部をもつもので、外面を指ナデからヘラ調整、横位をなし、内面は横位から斜位によるナデで仕上げている。底部は明瞭にヘラケズリで調整している。

b類〔埴〕〔第119図7〕

下半部を失なった埴であり、頸部と口縁部が残っている。欠損していることもあって全体的な形状は不明と言わざるを得ないが、ほぼ球形を有するものとみられる。調整として、口縁部外面を縦位のハケメから横位のナデ、最後に縦位のヘラミガキ、頸部を横位のヘラミガキを施している。内面は口縁部付近を横位のハケメから斜位のヘラ調整、最後にナデを用し、頸部斜位のヘラ調整を用いている。S T 3より1点検出された。

c類〔高环〕

高环の脚部片である。先の埴と同じくS T 3から1点のみ認められている。頸部から垂大して大きく脚が広がる特徴を示す。外面を縦のハケメ・横のナデを施し、最後に縦位のヘラミガキで整える方法をとっている。内面は指のナデからハケメ、最後に横位のナデの順で行っている。

d類〔斐形土器〕

各住居跡から1~3個認められる。器形からd~dに分類する。

d¹類土器〔第118図2〕

全体的な形状が細長い卵状を有するもので、頸部から口縁部にかけてほぼ直角に外反し、口縁部が「く」字状に呈する斐形土器である。調整は外面を広幅のヘラ状工具で施すヘラミガキが縦位を中心に行われ、内面は底面から下胴部付近を斜位のヘラナデを配し、粘土貼付から横位のヘラケズリを用い、さらに胴部を斜位のヘラナデ、胴上部にかけて横と斜位のナデ交互に施している。口縁部は内外とも横位のナデで丹念に整えている。S T 2からの出土である。

d²類土器〔第116図5・7〕

S S T 1から検出された斐形土器を代表するもので、短身の斐形土器である。胴部が球形状を有し、頸部から立ち上る口縁は直角に近く、さらに口唇部で外曲する特徴をもつ。さらに胴部から下胴部にかけて粘土を貼付する技法がみられる。粘土による貼付は最初の調整(多くはハケメ)を施した後に行う技法とみられ、本類の他にd¹類、d⁴類、d⁵類土器にもみられる。主に内面に多くみられるが、外面を縦位のハケメから粘土による貼付、さらに縦位のハケメ、口縁部の横位

ナデを行なって、最後に縦立のヘラミガキで仕上っている。内面は第116図7が底部から下胴部にハケメを要し、粘土による貼付、同ヘラケズリから縦位と斜位のヘラナデを有する。口縁部は横位のナデ後に指ナデを頭部との接合点に配する。一方、第116図5内面調整は、下半部が失なわれているので、粘土貼付の有無は不明であるが（？）後に斜位のナデから頭部、胴上部にかけてのヘラケズリ横と最後に横と縦位のヘラミガキを呈し、前者の調整との異りを示している。

d³類土器〔第118図1〕

長身の斐形土器であり、d¹類とはほぼ同様な形態をなす。頭部から口縁部に外反する傾きも同じく、若干立つ感じである。ただ内面の器厚は、頭部付近が著しく厚く、折り返し口縁を有し、胴部もやや球形を示すことがやや異なっている。調整は外面を弱いナデ斜から口縁部の横位のナデを配し、最後に縦位、斜位のハケメを施する手順である。

内面調整は外面と同じであるが、ハケメを横位に行い、最後に口縁部をハケメから横位のナデで仕上である。底部付近のハケメは胴部に配した横位のハケメの前に行なわれているものとみられる。

d⁴類土器〔第120図1、第121図1〕

d¹・d³類よりも短身で、球形をなし、口唇部が丸味をもつ仲間である。底部が若干外へ張り出す。d⁴類の120図2に似る特徴を示め、下胴部との接合部を指ナデで調整している。調整は外面を口縁部を中心とした横位のナデ後に縦位のハケメを設するもので、第120図1のみが外部粘土貼付を行なっている。内面は第120図1が下胴部のハケメから粘土貼付、同ケズリを以て胴部斜位のヘラナデ、最後に口縁部横位のナデをもつ。

第121図1は下胴部を縦位のハケメから粘土貼付、胴部を斜位のハケメ後に貼付部分のヘラケズリと底部付近の指ナデその後胴上部の横および斜位のヘラナデを行い、最後に口縁部を横位のヘラナデを呈する。ST3とST4から1点認められている。

d⁵類土器〔第121図2〕

やや長身の球形を示す甕よりも壺に近い器形をもつ。頭部から立ち上る口縁部がこれまでの斐形土器と比較して急角度を有し、口唇も尖形をなす。外面調整は弱い斜位のナデから口縁部にかけた横位のナデと胴部に縦位のハケメを行い最後に縦位のヘラミガキを施している。内面も弱いナデを胴部下半に行い、最後に胴上部から口縁部にかけて横位のハケメを施すものであり、これまでの調整方法とは変った要素を呈している。ST4からのものである。

d⁶類土器〔第120図12〕

胴下半部を失なった小形の斐形土器で、ST4から検出されたものである。外面を横位のナデから縦位のハケメ、最後に縦位のヘラミガキをなし、内面は斜位のナデから口縁部横位のハケメ、同ナデ最後に頭部を横立のケズリで調整する方法をとっている。器形は胴部最大径を胴上部にも

つことから比較的長身の器形を有するものとみる。

e 類 [瓶]

S T 1 と S T 2 各 1 点認められる。前者は浅鉢形状を示すのに対し、後者の S T 2 出土深鉢形状を有する。

第116図1は尖底状を有し、底部に1.6cmの円孔を伴っている。外面調整は斜位のハケメから同ナデを行い最後に口縁部を横位のナデで用いている。内面は斜位のハケメから同じヘラナデの簡単な調整を有する。

第119図1は、最大径を口縁にもつ瓶であり、頭部に補修孔を呈している。調整手法はヘラケズリとヘラ調整を胴部の最後に、口縁を横位のナデで仕上げている。内面調整は、斜位のヘラ調整を胴部に施し、次に口縁部を横位のナデ、さらに胴上部から頭部にかけて、斜位および横位のヘラケズリを行って最後に瓶長のヘラミガキを用いている。

以上B区出土土器の説明を加えたが、後述する土器群の年代の前に楕形土器について気付いた点を指摘しておく。今回検出された土器は火災に遭遇したこともある完形土器が多く、器形の形態はされることながら計測できる数字は当時のままの姿に近いと言える。

細分した類形にこだわらず、数字の小さい（口径の小さい）順にならべると次の表の通りになる。

第9表 八幡原No.5遺跡B区出土楕形土器計測分類表[単位はcm]

通No	分類	口径	通No	分類	口径	通No	分類	口径
40	I a ⁵ 類	12.7	6	III a ² 類	14.9	4	IV a ¹ 類	15.4
22	I a ⁴ 類	13.2	7	III a ² 類	14.9	5	IV a ¹ 類	15.4
38	I a ⁷ 類	13.3	10	III a ² 類	14.9	25	IV a ⁵ 類	15.4
34	II a ⁷ 類	13.8	18	III a ³ 類	14.9	27	IV a ⁶ 類	15.4
30	II a ⁴ 類	13.9	19	III a ⁴ 類	14.9	24	IV a ⁵ 類	15.5
37	II a ⁷ 類	14.0	29	III a ⁶ 類	14.9	3	IV a ¹ 類	15.6
11	II a ² 類	14.2	32	III a ⁴ 類	15.0	36	IV a ⁷ 類	15.6
12	II a ² 類	14.2	33	III a ⁵ 類	15.0	21	V a ⁴ 類	15.9
13	II a ² 類	14.2	8	III a ² 類	15.1	14	V a ² 類	16.0
16	II a ³ 類	14.2	9	III a ² 類	15.1	23	V a ⁵ 類	16.0
17	II a ³ 類	14.2	1	III a ¹ 類	15.2	31	V a ⁵ 類	16.8
28	II a ⁶ 類	14.3	15	III a ² 類	15.2	26	V a ⁵ 類	17.4
39	III a ⁸ 類	14.8	30	III a ⁶ 類	15.2			
35	III a ⁷ 類	14.8	2	IV a ¹ 類	15.4			

これによると I ~ V のグループに分けることができる。I は 12.7cm ~ 13.3cm を有するもので、最小のグループである。

II のグループは 13.8cm ~ 14.3cm を計り、平均 14.1cm を算定することができる。

III のグループは 14.8cm ~ 15.2cm を計り平均 15.0cm を算定することができる。

IV のグループは 15.4cm ~ 15.6cm を計り平均 15.5cm を算定することができる。

V のグループは 15.9cm ~ 17.4cm を計り上下の差を有することから比較にならない。

以上からバラツキのある I と V を除くと II の『約 141cm』、III の『約 150cm』、VI の『約 155cm』の 3 単位をみいたせるが、いかがなものであろうか。

第10表 八幡原N_o5遺跡B区出土器具形態計測分類表

測定番号	測定部位	道具番号	分類	高さ	口径	底径	外 面 調 査	内 面 調 査	底 部 調 査	種別番号
27	ST2	RP7	a ⁴ 型	6.4	15.4	6.4	ナデシコ+ヘニアミガキ類 ナデシコ+ヘニアミガキ類	ハヤシ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類+ナデシ科	ヘラケズリ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11780 2
28	ST2	RP12	a ⁵ 型	6.4	14.3	6.4	ナデシコ+ヘニアミガキ類 ナデシコ+ヘニアミガキ類	ハヤシ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘラケズリ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11780 3
29	ST2	RP18	a ⁴ 型	5.2	14.9	5.2	ナデシコ+ヘニアミガキ類+同科+ヘラケズリ類 ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘラケズリ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11780 7
30	ST2	RP8	a ⁴ 型	15.2	6.4	6.4	ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科 ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11780 8
31	ST4	RP74a	a ⁴ 型	16.8	5.4	5.4	ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+ヘニアミガキ類 ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11980 3
32	ST4	RP23	a ⁴ 型	15.0	5.4	5.4	ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+ヘニアミガキ類 ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	12080 8
33	ST4	RP25	a ⁴ 型	15.0						12080 10
34	ST1	RP72	a ⁷ 型	6	13.8	6	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類 ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11680 10
35	ST2	RP21	a ⁷ 型	6	14.9	6	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類 ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	11780 1
36	ST3	RP26	a ⁷ 型	15.6	5.8	5.8	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科 弱いナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	11980 12
37	ST4	RP29	a ⁷ 型	14.0			ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科 ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	12080 6
38	ST4	RP27	a ⁷ 型	13.3			ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類 ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類	ヘニアミガキ類+ナデシ科+ヘニアミガキ類	12080 9
39	ST2	RP4	a ⁷ 型	6.4	14.8	6.4	ナデシ科+同科+弱いナデシ科+ナデシ科 ナデシ科+同科+弱いナデシ科+ナデシ科	ナデシ科+同科+弱いナデシ科+ナデシ科	ナデシ科+同科+弱いナデシ科+ナデシ科	11780 4
40	ST3	RP48	a ⁹ 型	8.8	12.7	5.6	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科 ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+同科+同科	12080 2
41	ST3	RP43	b ⁹ 型	8.8	13.9	8.8	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+ナデシ科 ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+同科+同科	ナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+ナデシ科 ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+同科+同科	弱いナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類	11980 7
42	ST3	RP37	c ⁹ 型		13.9					11980 8
43	ST2	RP5	d ⁹ 型	27.4	17.1	6.8	ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科 ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科	ヘニアミガキ類+同科+ナデシ科	同科+ナデシ科	11880 2
44	ST1	RP44	d ² 型		17.3		ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+ナデシ科 ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+ナデシ科	ナデシ科+同科+ヘニアミガキ類+ナデシ科	弱いナデシ科+ナデシ科+ヘニアミガキ類+ナデシ科	11680 5
45	ST1	RP49	d ⁹ 型	22.7	15.4	6.8	ナデシ科+同科+ナデシ科+ナデシ科+同科+同科 ナデシ科+同科+ナデシ科+ナデシ科+同科+同科	ナデシ科+同科+ナデシ科+ナデシ科+同科+同科	ナデシ科+同科+ナデシ科+ナデシ科+同科+同科	11680 7
46	ST2	RP2	d ⁹ 型	30.2	18.4	7.5	弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科 弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	11880 1
47	ST3	RP47	d ⁹ 型	22.4	20.7	6.7	弱ナデシ科+ナデシ科+弱いナデシ科+ナデシ科 弱ナデシ科+ナデシ科+弱いナデシ科+ナデシ科	弱ナデシ科+ナデシ科+弱いナデシ科+ナデシ科	ナデシ科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科+弱ナデシ科 ナデシ科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科+弱ナデシ科	12080 1
48	ST4	RP28	d ⁹ 型	26.8	17.3	6.5	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+弱ナデシ科 ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+弱ナデシ科	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+弱ナデシ科	弱いナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+弱ナデシ科	12180 1
49	ST4	RP24	d ⁹ 型	24.2	13.7	6.2	弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科 弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	弱いナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	12180 2
50	ST4	RP20	d ⁹ 型		13.1					12080 12
51	ST1	RP42	e ⁹ 型	10	16	2.2	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科 ナデシ科+同科+ナデシ科+同科+ナデシ科	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	ナデシ科+ナデシ科+ナデシ科+同科+ナデシ科	11680 6
52	ST2	RP15	e ⁹ 型	27.4	24.6	8.3	ナデシ科+同科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科 ナデシ科+同科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科	ナデシ科+同科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科	ナデシ科+同科+同科+弱ナデシ科+ナデシ科	11880 1

VI まとめ

土器の年代を推測することによって、石器や遺構の年代・推移等に住居跡を中心まとめるこ^トにする。

1)土器の年代と遺構（A区）

これまで述べてきた23棟の竪穴住居跡のうち、明らかに縄文後期に属するST3を除く10棟の相互の切り合い関係順位とそれに伴う土器群の相違からI～V期の年代を求めることが可能であった。このことは既に住居跡の年代でも前後して触れている。

つまり、切り合いをもつ住居跡の新・旧を選出し、各住居跡の床面出土の遺物を吟味し、切り合をもたない住居跡も含めた平行期住居群、もしくは近いグループをまとめたものである。

これを古い序別として述べた結果、I期〔ST5, ST11, ST19, ST2〕4棟

II期〔ST7, ST12, ST18, ST15〕4棟、III期〔ST6, ST14, ST17, ST10〕4棟。

IV期〔ST4, ST9, ST13, ST1〕4棟、V期〔ST8, ST16〕2棟となる。

I期とした4棟の住居跡からは、縦位の迴転押捺した撚糸文系土器、『I群a類、同b類』日計型押型文土器。『II群』初期沈線文土器『III群』があり、I群a類は関東地方の稲荷台式、同b類は井草式に求めることができ、II群は日計式、III群土器は岩城市竹之内遺跡等で検出され、注目を集めている初期沈線文系土器と類するものであり、早期前半に属するものである。

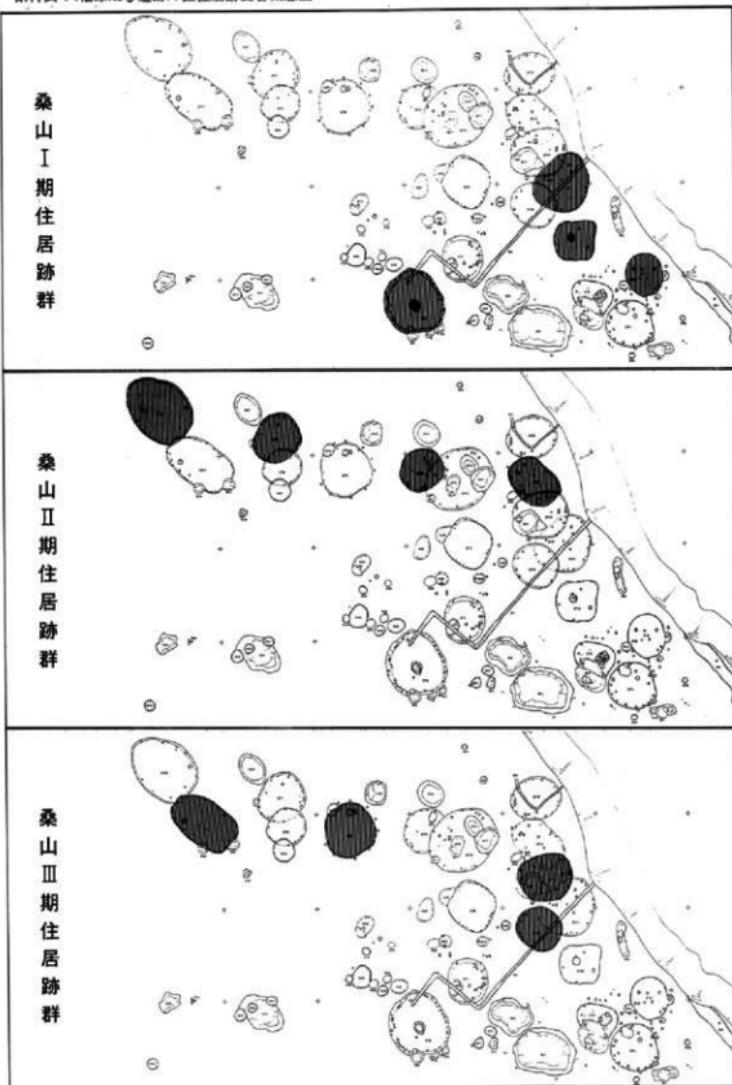
II期は、沈線文を中心とした土器群を含んでいる。太状の沈線による短沈文『IV群b類、同c類』や細線による格子目状、失羽状、多状沈線を有する『IV群a類』の一部はその代表で、大平式や田戸下層式に併行するグループである。その他、竹管等による平行沈線、同斜線間を竹管刺突文で埋める『VII群b類』と簾状角押文『V群a類』がある。

VII群a類は岩手県蛇王洞にみられ、V群a類も白石市明神裏、雄勝町岩井堂洞、岩城市竹之内遺跡等から検出されており、特にV群a類はST7とST18に検出されたもので、切り合いをもつST17, ST18との比較をすると、古いST18では少なく、ST17に多量に認められる。そもそも両者との切り合いは、少なくとも出土遺物の関係からも年代的に隣接しており、ST18はII期の範疇に属する中でも新しく、V期からIII期にかけてV群a類の出現を示唆するものと言える。

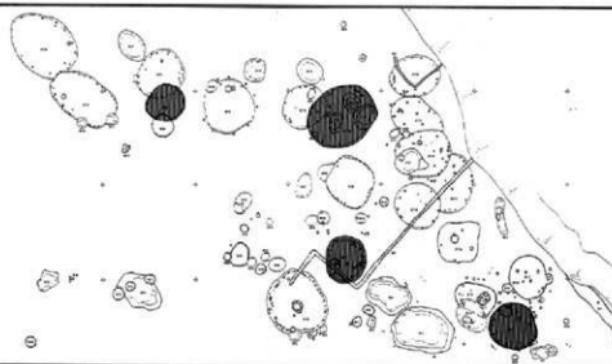
III期はII期にすぐ移行する時期とみる。細線による沈線文『群類』、簾状角押文『V群a～c類』と貝殻文が伴なってくる。貝殻文は平行沈線間に貝殻腹縁を列点状に埋める『群a類』、連續的に配する『同b類』、貝殻沈線を有するもの『同c類』とがあり、田戸上層式、物見台式、大立式常世式に併行する仲間とみられる。

IV期は、刺突連続文刺突連続沈線文『VII群a・b類』の出現にある。これまでIII期にみられない

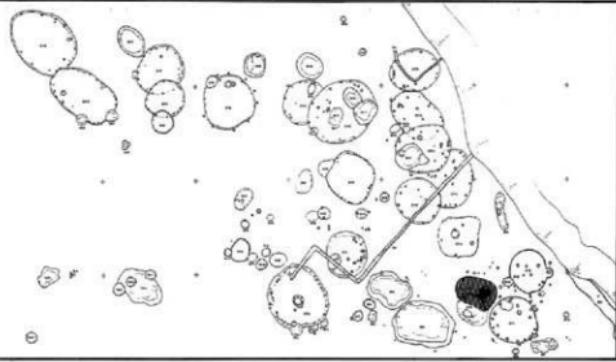
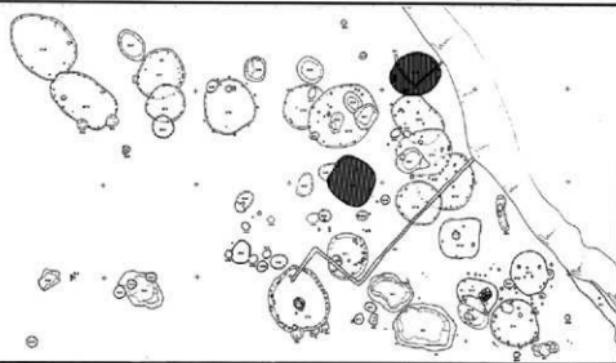
第11表 八幡原No.5遺跡A区住居跡変容概念図



桑山Ⅳ期住居跡群



桑山Ⅴ期住居跡群



い特徴でもあり、さらにⅢ期からつながる貝殻沈線文も存在する。特に刺突連続沈線文・貝殻腹縁沈線文・同腹縁刺突文に貝殻腹縁連續文を構成する『VI群d類』は明神裏3式に大寺・常世式が加わったもので、他に例は少なく本遺の特徴的な土器として把握されよう。VII群a・b類は明神裏3式に併行するとみられるものの、明神裏3式に多い、波状を有する刺突連続沈線文や大柄な波状口縁を示す特徴は少なくむしろ平行状に横走するものが多い。またⅡ期から伴うV群a～c類の存在も注目される。

V期は縦文条痕文や条痕を中心とするグループで、早期後半に位置付けたい。野島式や櫻木上・下層式に併行するものと思われる。

以上のことから八幡原Na5遺跡の住居跡では土器の変容をおおざっぱに配すると次の様になるものと言える。

年 代	撫奈文	押型文	初期沈線文	沈線文	貝殻沈線・貝殻刺突文	貝殻腹縁連續文	刺突連續文	縦文	無文	縦文・条痕文
I 期										
II 期	↓	↑								
III 期			↑						↑	
IV 期				↓			↑			
V 期	↑				↑		↑			↑

2) 土師器の年代と遺構

B区のみに検出されたもので住居跡にみると若干の異いがあるにしても大差ではなく、同時期とみる。楕形土器を主体にした多くは、関東地方の和泉I式の特徴を呈し、變形土器の幾かには五領田式に併行するものもあるが、中心的年代は和泉式に求め、東北地方での所謂『南小泉II式』をあたえたい。

3) 石器の年代

本遺跡から出土した427点の石器について、第3表を作成し12形態に分類した。分類は、形状や剥離技法に主眼を置いていたもので出土況別によるものではない。

土器の分析と住居跡の重複関係から、第I期～第V期に把握することが可能であった。遺構、土器は既に述べた通りで、ここでは分類した石器群がどのような位置に属するかを、土器の年代と合わせて検討していく。各群石器の中でX群〔破損面を有する石器〕、XI群石器は年代的把握が困難なことから、検討外とする。

I群石器（石鎌）

I群a類～h類の6形態となる。これらの石器群の中で桑山I期～IV期の範囲に入るI群b類とd類の2形態が注意される。特にd類は桑山I期～III期に加わるもので、桑山III期より下るものではない。一方d類はd類と同時期に現われ、桑山IV期に至るが、桑山V期には、基部に明

瞭な抉りをもつ（62図1）に変化するものとみたい。

a, c, e, f類の4形態は、V層上面～IV層の出土で占められることから、X群土器に共存する縄文前期初頭～中期とみられ、f類63図1やe類の中でも小形な63図2, 6, 11はIV層の中でも比較的上の（III層）層から検出することから、むしろ縄文後期に位置する形態の石鉗とみる。

II群石器（尖頭器）

II群石器は、a類～d類の4形態に分類でき、その中には石鉗の未完成も含まれる。時期的には、桑山Ⅰ期～V期、さらに前期・後期と各時期に平均化する特徴があり年代区分は困難である。

IV群石器〔石鉗〕

III群はa類～c類3形態に分類できる。b類はV層と桑山IV期の刺突連続沈線文を中心とするIV群a類土器に伴って検出され、V層出土の63図2も同時期に置く。a類はNo.4のIV層上面より出土した頭部の広いIV群b類に類似するもので、本遺跡のX群c類土器に共存することから縄文前期末に置く。C類は、桑山II期の太状沈線文を有するIV群a類、同b類土器からX群土器に至る。

縄文前期末の石器64図1・2がある。これらの石器群は剥離調整面において、各時期ごとに明らかに相違することが重要である。

IV群石器〔石匙〕

本群はa類～f類の5形態を有する。これらの石器のうちa類とb類はV層より検出されたが桑山V期の条痕文を中心とするVII群a類土器に伴う石器と理解され、この時期に初めて出現するものと考えられる。特に古い要素を持つa類は、杉久保型ナイフ形石器に類似し、原則的にはツマミを有していない。c類～e類の3形態は、IV層よりの出土であり、大半はX群a類土器に伴う縄文前期の所産と考えてよいが、d類は刃部が丁度エンド・スクレーパー的な縄文中期～後期初頭の特徴をもつ。

V群石器〔打製石斧〕

本群はV群a類～j類の10形態を呈する。これらの石器のうち、V群a類、d類の2形態は縦位に垂下する撚糸文のII群a類土器、桑山I期と太状の沈線文を有するIV群a類土器、同b類土器併行の桑山II期の範疇に認められるもので打製石斧の出現に重要な意味をもつとして注目される。b類石器・e類石器は、IV群a類土器、桑山IV期刺突連続沈線文のVII群a類土器の桑山III期に属する石器群で、特にe類は、桑山III期の特徴とした位置付けが可憲とみられる。V群c類石器・f類石器は、桑山I期～III期に認められるa・d・b・e類石器に統く形態として、これらは桑山IV期～V期にかけて多数量を呈する。またV期の早期末にかけての打製石斧基本形態と理解され、小形化し縄文前期へ形態を移行する。V群d類石器は、II群b類土器に併行する桑山II期にまでさかのばる石器で、大形の形状を特徴とするのに対して、V層出土石器は小形を呈し、注意されるが、出土数が2点を限定されるため、明確には言えない。從来V群d類石器は、北海

道や東北地方北部の縄文早期に多く認められる石器であるが、この点においては桑山遺跡も一致する。V群 h 類石器は、V層上面・IV層の出土状況を有する為、X群 a 類に併行する縄文前期初頭に位置付けたい。また、V群 i 類石器・j 類石器の2形態は、桑山IV期のVI群土器に併行する縄文後期の所産である。

IV群石器〔石範〕

所謂、石範と称される石器は、桑山遺跡においても桑山I期～V期、V層、IV層に広く分布する石器群であり、細分類を加えると、ある程度の年代的把握が可能となる。

VI群の a 類石器、b 類石器、f 類石器、i 類石器の4形態は、先端が尖状を有する両面加工の石器群で、桑山I期～桑山V期の範囲に把握できる。IV群 j 類石器は、桑山最古の撚糸文系土器 II群 a 類、無文系のII群土器に併行する桑山I期～桑山IV期に加わるもので桑山IV期より下るものではないと理解してよい。VI群 f 類石器は、平行沈線を中心としたIV群 a 類土器併行の桑山II期と刺突連続沈線文のVII群 a 類併行の桑山VI期に認めることができる特徴を有す。一方VI群石器 a 類、b 類の2形態は、V群石器の古い段階に位置する石器形態に類似することが注意される。すなわち a 類石器、b 類石器も、発生初期ではV群の a 類石器や b 類石器と一致し、この2形態の打製石斧が桑山I期～III期の範囲で分布するに対し、VI群石器 a 類、b 類は桑山IV期以降まで続くとみられる。

VI群 b 類石器は、桑山II期の古い要素を持つもので、V層出土の2点もこの時期に置くのが妥当であり、前述したV群石器との関係を整理すると、本群石器は、各時期の打製石斧の形態が強く影響していることが伺われる。

IV群 h、j、k 類の3形態は、桑山I期～桑山V期、IV層の各時期に分布する。一方 d 類石器、g 類石器も桑山II期～桑山V期、IV層（縄文前期～同期末）に分布を呈す。これらの5形態の石器群の中で、各時期を通じてあまり変化のないものは g、h、k 類石器であり、他の d、j 類石器は V群石器と同様な変化を有し縄文前期初頭へ以降する。

VI群 c 類、e 類石器は、刃部再生によって形態が著しく変化した石器であり、検討外とした。c 類石器は基部から理解して原形はV群 f 類と考えたい。

VII群石器〔石槍〕

VII群 a 類、b 類の11図1、c 類の3形態は、桑山最古の撚糸文系II群 a 類土器、無文系のIX群土器併行の桑山I期の所産であり、S T 5の出土による。刺突連続沈線文併行のV群 c 類土器に併行する桑山III期には、b 類27図の2を置く。VII群 d 類は II群 a 類土器の極位に重下する撚糸文系土器併行の桑山I期に29図5がある。他の3点はV層出土であるが早期末を下るものではなく、むしろ桑山I期に近い石器と考えたい。

8)VIII群石器〔スクレーバー類〕

本群は a 類石器～ i 類石器の 9 形態となる。本群も VI 群と同様に各時期に広く分布している。その中でも早期位置付けが可能な石器群は、 VII 群 g 類石器で、桑山最古の撫系文系土器 II 群 a 類に併行する桑山 I 期～桑山 V 期に加わる石器で、桑山 V 期も下るものではなく、この時期に共通する特徴を持った石器と理解したい。

VII 群 c 類石器があり、 VII 群 c¹・c²共 g 類と同様に考えてよい。VII 群 e 類は、桑山 III 期の VI 群 b 類土器、 IX 群 b 類土器に併行し出現するもので、縄文前期初頭は VII 群 d 類の縦型サイド・スクレーバーに以頼するものと考えられる。その他には f² があり桑山 IV 期の VII 群 a 類土器、 IX 群 7 類土器に併行する。

X 群 a 類土器の縄文前期初頭の所産としては、 i 類石器の縦形サイド・スクレーバーと、 h 類石器、 c³ 類石器がある。その中で c³ 類石器の I 部は X 群土器 b ・ c 類に併行する縄文前期末も含まれる。

IX 群石器〔縦形サイド・スクレーバー〕

桑山 I 期の II 群 a 類土器、 IX 群土器に併行する石器で、桑山 V 期までの各時期に分布し、前期初頭以降まで続くが、早期の範疇として、 VII 群 e 類の石器と同様に考えてよい。

10) VII 群石器〔磨製石斧〕

本群は VII 群 a 類～ d 類の 4 形態となる。a 類石器は、桑山 IV 期に位置づけられ、これを上回るものではない。b 類、 c 類石器と共存を有し、b 類石器は、条痕文を中心とする桑山 V 期まで存続すると考えたい。d 類は、桑山 VI 期の加曾利 B 式に併行する磨製石斧で、 V 群 i 、 j 類と同様な変性岩の石材を使用している。

参考文献

杉原莊介、芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文化初頭の貝塚」 明治大学部研究報告、考古学第二輯 明治大学

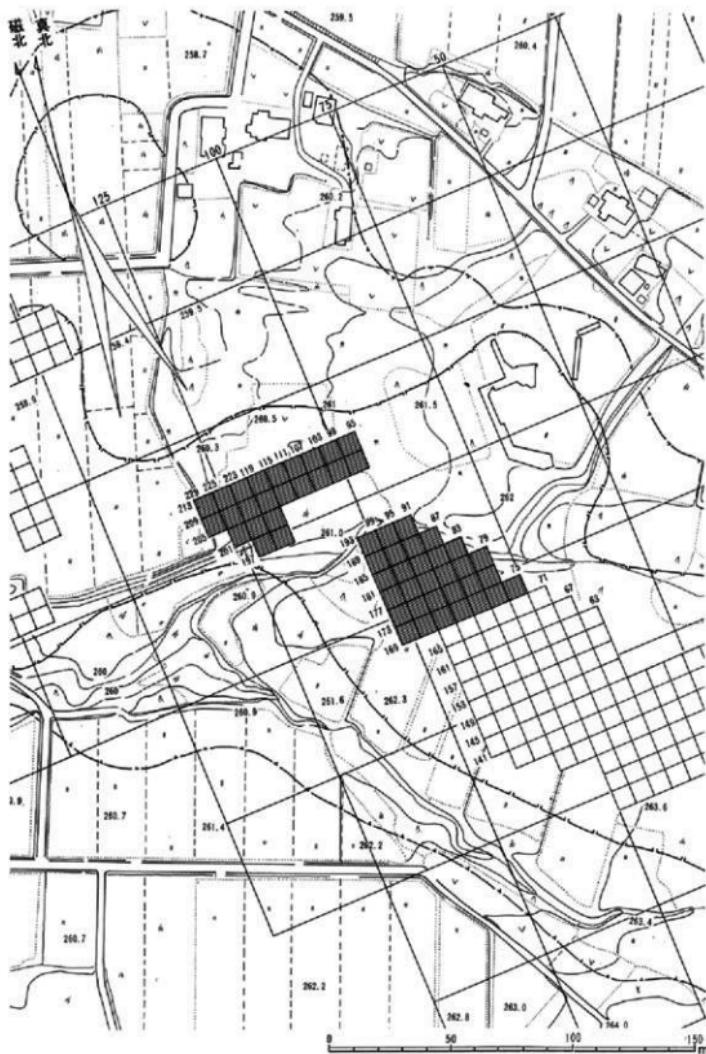
雪田 孝、安孫子昭二他 1966 「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ」 多摩ニュータウン遺跡調査会

柏倉亮吉、加藤 稔 1967 「山形県下の洞穴遺跡」 『日本の洞穴遺跡』 P.P 51～64 平凡社

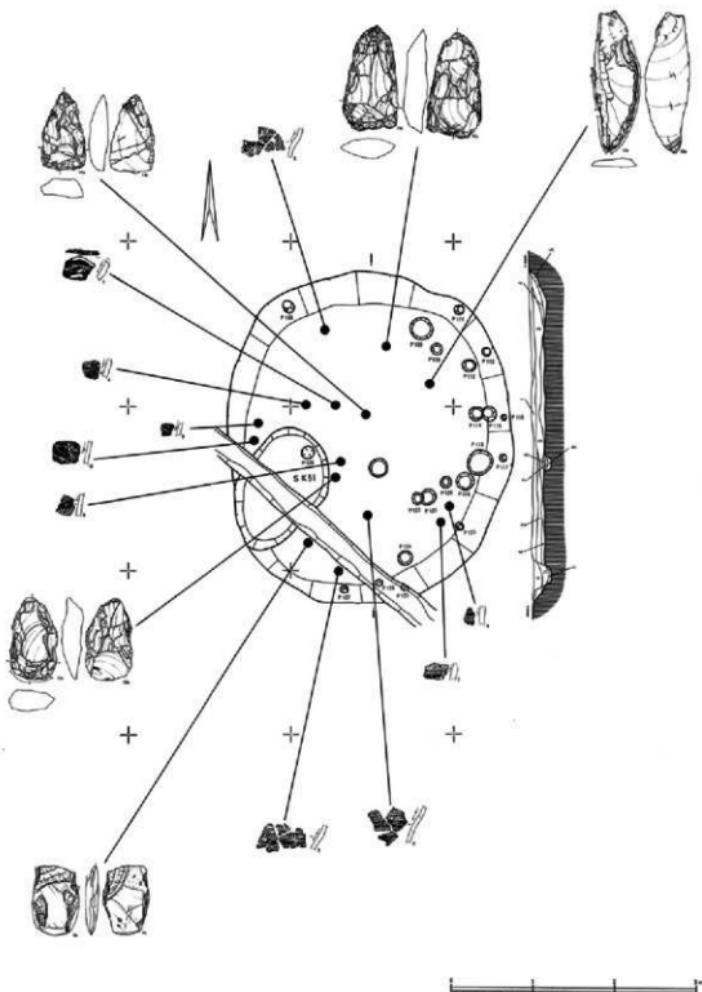
中村孝三郎、小片 保 1967 「室谷洞窟」 長岡市立博物館

三宅 徹他 1976 「小田野沢」 「下田代納屋 B 遺跡発掘調査報告書」 青森県立郷土館

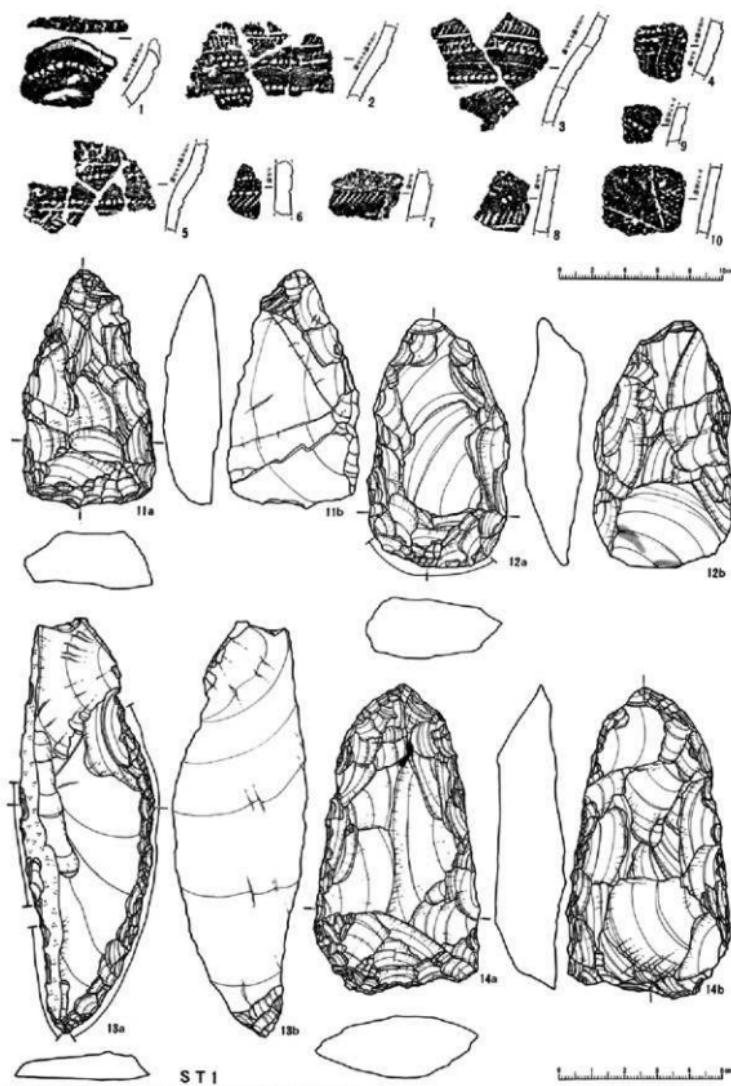
- 岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて」 『東北考古学の諸問題』 P.P 75~96
東北考古学会
- 富樫泰時 1976 「トランシエ様石器について」 『東北考古学の諸問題』 P.P 109~124
東北考古学会
- 柏倉亮吉、加藤 稔、手塚 孝他 1975~1977 「米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書」 「米沢市埋蔵文化財調査報告書1集~3集」 米沢市教育委員会
- 北林八洲晴 1976 「千歳遺跡」 「青森県文化財調査報告書第27集」 青森県教育委員会
- 山本良和 1979 「高輪寺遺跡」 「久喜市埋蔵文化財調査報告書」 久喜市教育委員会
- 山本孫繼 1979 「岩井堂洞窟」 「第4洞穴第8次発掘調査報告書」 ニュー・サイエンス社
- 馬目順一、山田 廣、原川雄三 1979 「廣谷地B遺跡調査報告」 「葛尾村埋蔵文化財調査報告書」 第一冊 葛尾村教育委員会
- 阿部明彦 1980 「弓張平A遺跡発掘調査報告書」 「山形県西村郡西川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」 西川町教育委員会
- 白石地域文化研究会 1982 「宮城県白石市下川原子A遺跡第一次調査報告」 「赤い本」 刊行号 P.P 33~81 赤い本同人会
- 手塚 孝、菊地政信 1982 「米沢市万世町桑山団地造成地区埋蔵文化財調査報告書I」 「米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集」 米沢市教育委員会
- 馬目順一 1982 「竹之内遺跡」 「いわき市埋蔵文化財調査報告」 第8冊 いわき市教育委員会



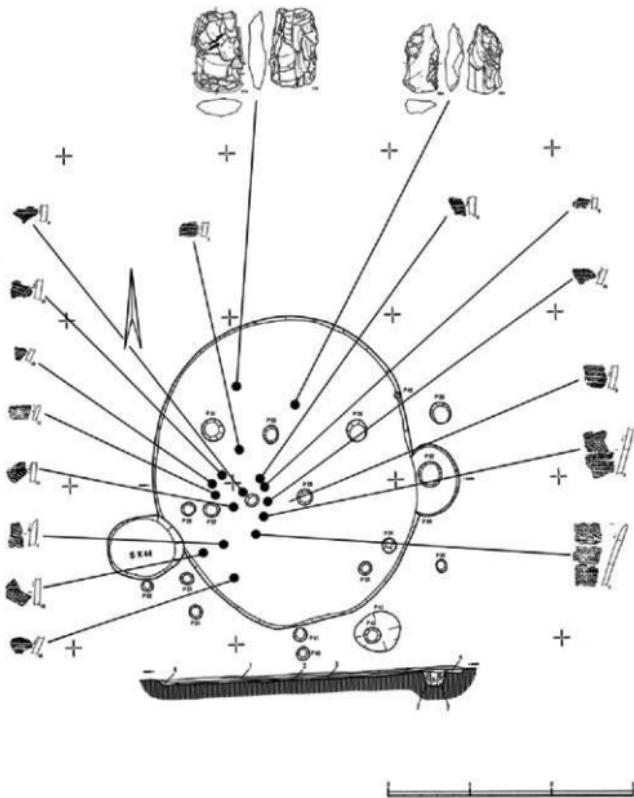
第1図 八幡原No5遺跡グリッド配図



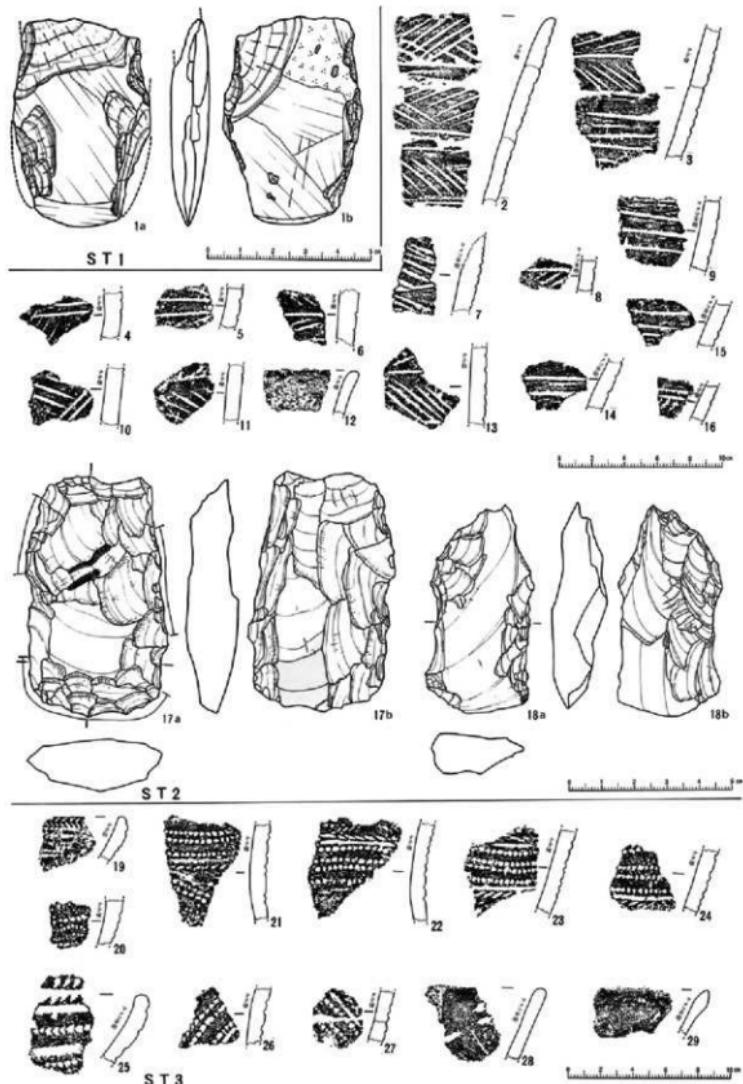
第3図 八幡原No.5遺跡A区S T 1平面図



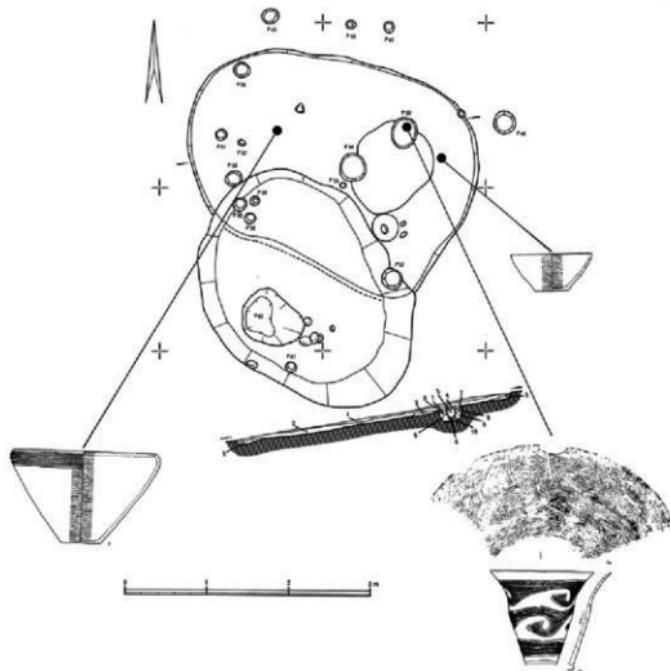
第4図 八幡原No5遺跡A区住居跡内出土遺物(1)



第5図 八幡原No5遺跡A区ST2平面図



第6図 八幡原No.5遺跡A区住居跡内出土遺物(2)



第7図 八幡原No5遺跡A区S T 3平面図